

溝原貝塚

—名護博物館収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—

1989年3月

沖縄県名護市教育委員会

名護市の遺跡分布 (1989年3月現在)

（凡例）

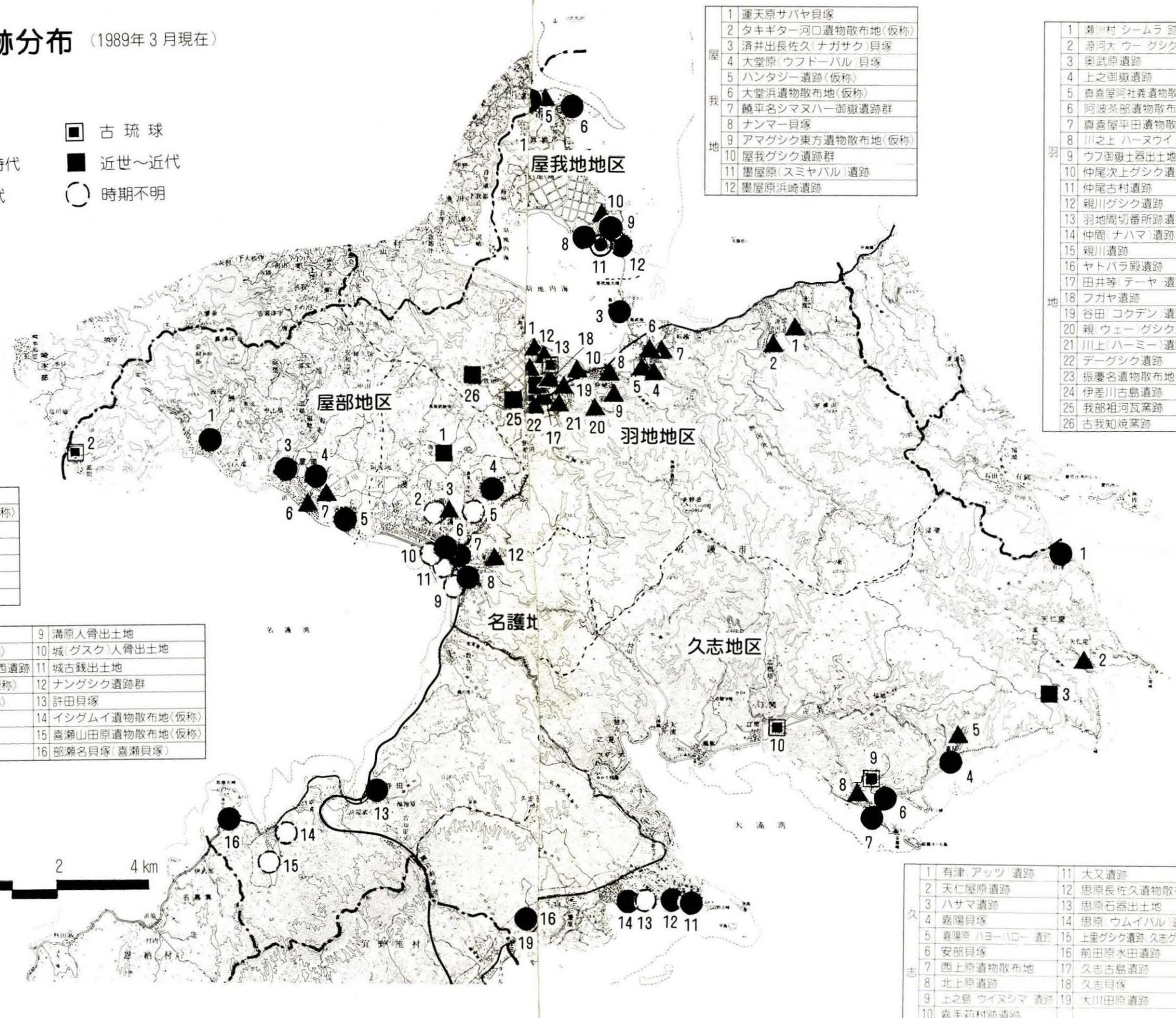
- 早期
- 古琉球
- 沖縄貝塚時代
- ▲ グシク時代
- 時期不明



屋	1 安和貝塚
部	2 部間權現青磁出土地(仮称)
	3 屋部前田原貝塚
	4 屋部貝塚
	5 東兼久原貝塚
	6 屋部河口古瓦出土地
	7 宇茂佐古島遺跡

名	1 宮里古島遺跡	9 溝原人骨出土地
護	2 大西区遺物散布地(仮称)	10 城(グスク)人骨出土地
	3 大堂原(ボードーバル)西遺跡	11 城古錢出土地
	4 大堂原東遺物散布地(仮称)	12 ナングシク遺跡群
	5 大中区遺物散布地(仮称)	13 許田貝塚
	6 名護貝塚	14 イシグムイ遺物散布地(仮称)
	7 アバヌク貝塚	15 喜瀬山田原遺物散布地(仮称)
	8 溝原(ミゾバル)貝塚	16 部瀬名貝塚(喜瀬貝塚)

注：時期が複数にまたがる
遺跡は、便宜上その遺
跡のいちばん古い時期
の記号を用いた。



みぞ ばる
溝 原 貝 塚

— 名護博物館収蔵庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 —

1989年3月

沖縄県名護市教育委員会

はじめに

本調査概報は、名護博物館収蔵庫建設に伴い、県文化課の協力を得ながら名護市が主体となって発掘調査を実施した成果の記録です。

名護博物館の周囲一帯は溝原貝塚の広がりが予想されており、住宅が密集し調査が進んでおりません。当遺跡の広がりや、歴史的価値、性格を把握するためには今後の調査を合わせて考えていかなければなりません。

当市において砂丘地に立地する遺跡は、名護貝塚をはじめ、アパスク貝塚、久志貝塚、嘉陽貝塚、安和貝塚等々、遺跡の上に現代の集落が形成され、遺跡を保存することは容易なことではありません。

当委員会としても、これらの遺跡群について、早めに遺跡の全体像をつかみ、文化財保護行政上の基礎情報を整備しているところですが、近年のリゾート開発、土地改良事業、区画整理事業等の開発に伴う文化財の有無の照会についても十分に対応しきれてないのが実状です。

このところの開発で多くの遺跡が消滅していく状況にありますが、文化財を市民の共有財産として保護、活用していくためには、関係者並びに市民の理解と協力が必要です。

本調査は、収蔵庫建設設計画の変更により、2次に亘り、また、調査員も別々という変則的なものとなりました。文化財保護行政当局の体勢の整備が必要です。

最後に、発掘作業にあたられた方々、また、資料整理に御苦労された作業員の方々に深く感謝いたします。

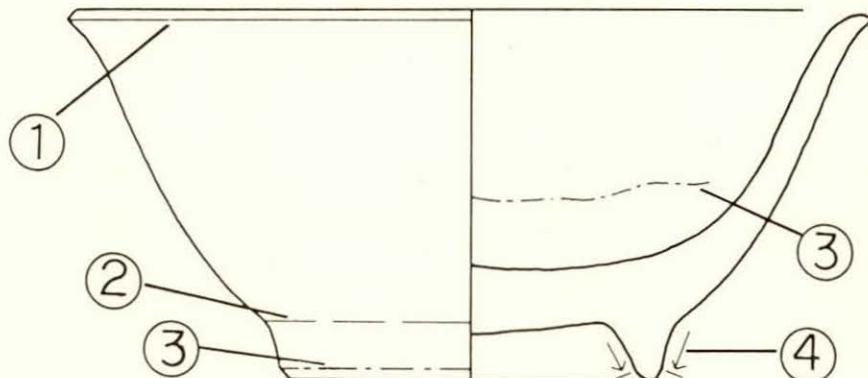
1989年3月

名護市教育委員会

教育長 比嘉太英

例　　言

1. 本調査概報は、名護博物館収蔵庫建設と知名商店新築工事に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 発掘調査は、1984年と1985年の2回行なわれた。
3. 遺跡の分布図は名護市役所発行の1/50,000の地形図によった。
4. 遺跡の位置図その他は、国土地理院発行の1/5,000国土基本図によった。
5. 陶磁器実測図の表現は以下に示すとおりである。



- ① 陵線（明瞭な線であることを示す）
- ② 陵線（不明瞭な線を示す）
- ③ 粕薬のさかいを示す
- ④ 粕薬がかかっている範囲を示す

目 次

はじめに

例 言

I. 調査の目的と調査の経過	1
II. 調査の組織	2
III. 溝原貝塚の位置と環境	3
IV. 調査結果の詳細	5
1. 発掘調査の範囲と方法	5
2. 層 序	7
3. 遺 構	9
4. 遺 物	11
(1) 土 器	12
(2) 陶磁器(青磁・白磁・染付・沖縄産陶器・擂鉢・類須恵器)	34
(3) 石器類	51
(4) その他	54
(5) 自然遺物	55
V. 調査の成果と課題	74

―――― 図 表 目 次 ―――

第1図 溝原貝塚の位置	1	第29図 土 器(底部)	32
第2図 名護市の位置	3	第30図 土 器(底部)	33
第3図 溝原貝塚の位置と周辺の遺跡	4	第31図 青 磁	38
第4図 グリット設定図	6	第32図 青 磁	39
第5図 層序断面図(1次)	7	第33図 青磁・白磁	40
第6図 層序断面図(2次)	8	第34図 染 付	41
第7図 遺構平面図(1次)	9	第35図 染 付	42
第8図 遺構平面図(2次)	10	第36図 染 付	43
第9図 土 器(I-a)	12	第37図 沖縄産陶器	44
第10図 土 器(I-a)	13	第38図 沖縄産陶器	45
第11図 土 器(I-a)	14	第39図 沖縄産陶器	46
第12図 土 器(I-a)	15	第40図 沖縄産陶器	47
第13図 土 器(I-a)	16	第41図 沖縄産陶器	48
第14図 土 器(I-b)	17	第42図 捜 鉢	49
第15図 土 器(I-b)	18	第43図 類須恵器	50
第16図 土 器(I-b)	19	第44図 石 器	51
第17図 土 器(I-b)	20	第45図 砧 石	52
第18図 土 器(I-c)	21	第46図 土 器(近世)	53
第19図 土 器(II-a)	22	第47図 キセル・錘・硯	54
第20図 土 器(II-b)	23	第48図 名護市における後期遺跡の分布図	74
第21図 土 器(II-b)	24		
第22図 土 器(II-b・c)	25		
第23図 土 器(III-a)	26	第1表 青磁・白磁の観察表	34
第24図 土 器(III-b・c)	27	〃	35
第25図 土 器(有文)	28	第2表 自然遺物(貝類集計表・1次)	55
第26図 土 器(有文)	29	〃	56
第27図 土 器(有文)	30	第3表 自然遺物(貝類集計表・2次)	57
第28図 土 器(胴部)	31	第4表 名護市の遺跡編年表—時代区分表	75

―――― 表 目 次 ―――

第1表 青磁・白磁の観察表	34
〃	35
第2表 自然遺物(貝類集計表・1次)	55
〃	56
第3表 自然遺物(貝類集計表・2次)	57
第4表 名護市の遺跡編年表—時代区分表	75

I. 調査の目的と調査の経過

溝原貝塚は表面調査の結果、名護博物館から東江公民館に至る付近一帯に広がる遺跡と考えられる。詳細な分布範囲は未調査なので明らかではない。1981年度の試掘調査で、博物館敷地内から土器の出土がみられた。そのときの調査では、土器の底部はすべて尖底が得られ、編年的位置づけは、沖縄貝塚時代後期の前半（約2,000年～1,500年前）の遺跡と推定された。

博物館敷地内は、古くは名護間切番所として利用されてきた土地である。そして、名護町役場、名護市役所の庁舎を経て、新市庁舎が市街地西側に建築されたのに伴い、現在は博物館として跡利用されている。

博物館の整備基本計画に沿って、収蔵庫の建設が計画され、その収蔵庫の建設予定地より土器の出土がみられたことから発掘調査を行なうことになった。

1984年に、発掘調査を行ない、ほぼ遺跡の保存状況等は把握されたのであるが、収蔵庫の設計変更により、さらに、1985年にも発掘調査を実施しなければならなくなつた。その間、調査体勢も変わり、調査員も変わった。以下、調査の概要を述べる。



第1図 溝原貝塚の位置

II. 調査の組織

調査総括 名護市教育委員会

教育長 比嘉太英

調査責任者 名護市教育委員会

社会教育課長 仲宗根武夫

総務責任者 社会教育係長 稲嶺進

総務(1次) 事務主事 比嘉良則

調査員 大阪府教育委員会 安里進

総務(2次) 事務主事 平良芳一

調査員 名護市教育委員会 島福善弘

発掘作業

久場川恵子、玉城留美子、大城智代美、比嘉淳子、屋嘉充男、玉城かおり、宮城勝、新城京子、宮城節子、松田千代子、松田菊子、末吉ヨネ、嘉手苅のぶ代、松田吉子、小橋川キヨ、新城トミ、山城正、玉城良子

資料整理

松田博文、久高京子、仲村美代子、金城真希、比嘉久、玉城留美子

トレース

仲村美代子、久高京子

遺物写真撮影

比嘉久、松田博文

編集

島福善弘

執筆

島福善弘、松田博文、仲村美代子、久高京子、上原政昌

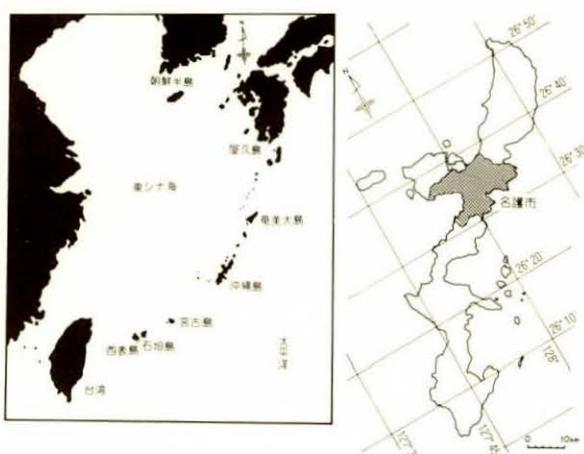
III. 溝原貝塚の位置と環境

名護市は、琉球列島のほぼ中央、沖縄本島の北部に位置する人口約52,000人の都市である。ほぼ北緯26度30分、東経128度に位置し、面積は210.73km²である。北に大宜味村と東村、南は宜野座村と恩納村、北西は本部町と今帰仁村の6町村に隣接し、東に太平洋、西は名護湾と、そして風光明媚な羽地内海に面する。市の中心部より東側には、多野岳・名護岳・辺野古岳・久志岳などの標高300m級の山が、西側には、嘉津宇岳・安和岳などの400m級の山が連なっている。平野部は、両山地に挟まれた羽地ターブックと名護市街地が主なもので、また、羽地大川・屋部川・源河川・汀間川など大小20数本の河川が市域を流れ海に注ぎこんでいるが、それらの河口付近にも小さな平地があり集落が立地する。

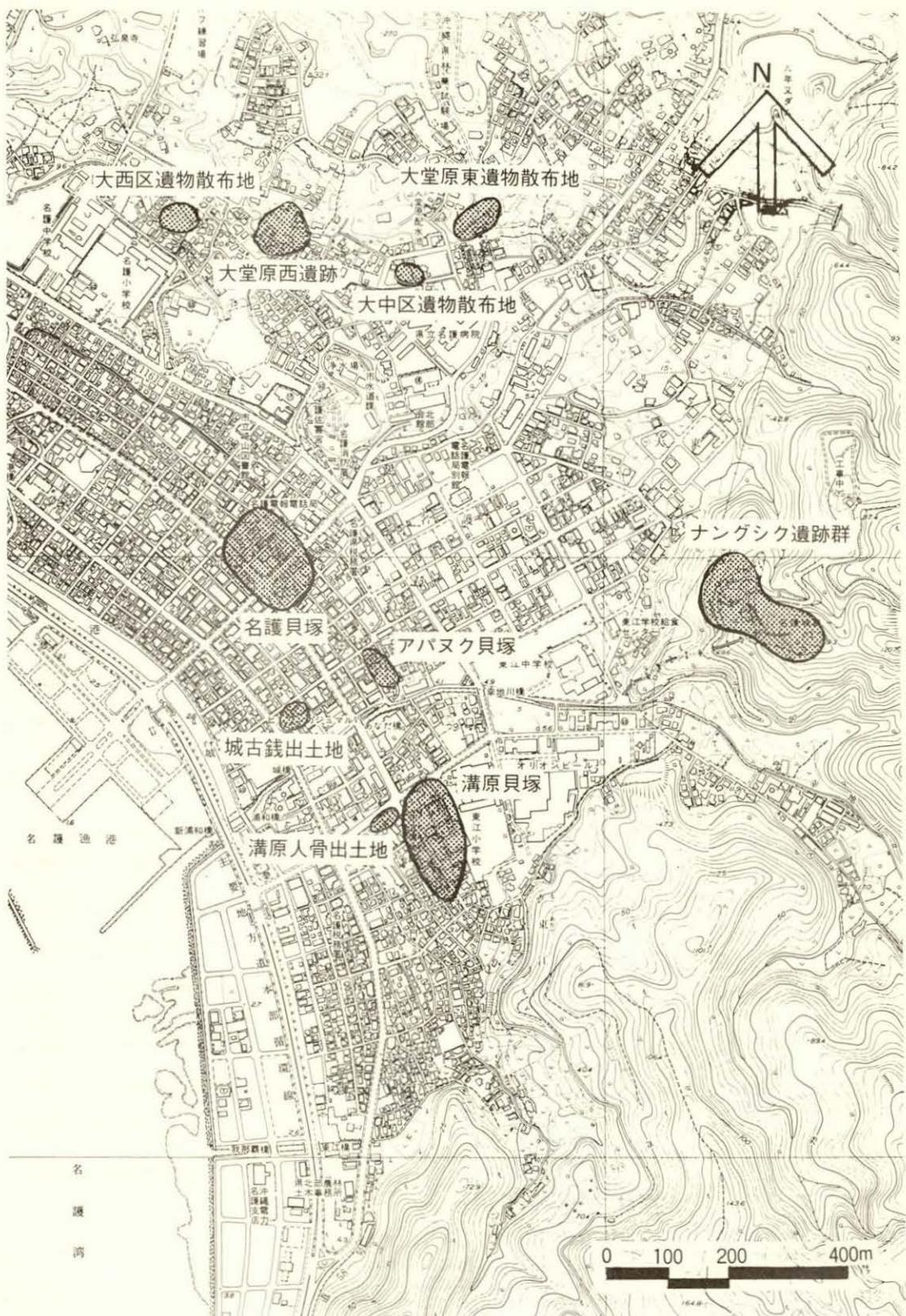
名護市は、1970年に旧屋我地村・羽地村・屋部村・名護町・久志村の5町村の合併により誕生した県下9番目の市であるが、市内には55の部落があり、これが名護市を構成する基本単位になっている。以前から名護湾を中心とした海上交通、国頭街道を中心とした陸上交通の要地として発達し、現在では名護湾を埋め立て、国道58号線・国道449号線・沖縄自動車道等の交通網が整備され、北部の中核都市として目ざましい発展をしている。

溝原貝塚は、名護市名護溝原の海岸砂丘地にあり、現在では名護博物館（名護間切番所跡・旧名護市役所）から東江公民館付近にかけて立地し、標高3mで海岸線より約500m内陸に位置している。周辺にはナングシク・名護貝塚・アパスク貝塚等の先

史、原史時代の遺跡が10ヶ所程分布しており、名護湾をひかえたこの一帯が当時好適な生活環境であったことが窺える。本貝塚は沖縄貝塚時代後期の遺跡であることは以前から知られていた。



第2図 名護市の位置



第3図 溝原貝塚の位置と周辺の遺跡

V. 調査結果の詳細

1. 発掘調査の範囲と方法

• 1次調査

溝原貝塚の地は後世名護間切番所・町役場・市役所になった所であり、標高3m程の砂地に形成され、現在の博物館を中心に近隣に拡がっていると思われる。東の方に小川が流れ、現在の東江小学校は湿地帯であったという。

1981年7月に、博物館中庭で数ヶ所試掘調査が行なわれたが、全て攢乱層であった。

今回の調査は、当初計画していた収蔵庫建設予定約20m×10mの長方形の部分を行なった。3年前の試掘と今回の若干の試掘によって攢乱層がおさえられたので、十字の断面観察用畦を残し、大部分の攢乱層をユンボによって除去した。十字の畦に区切られた四つの地区を、便宜上方角によってNE、NW、SW、SEと地区設定した。

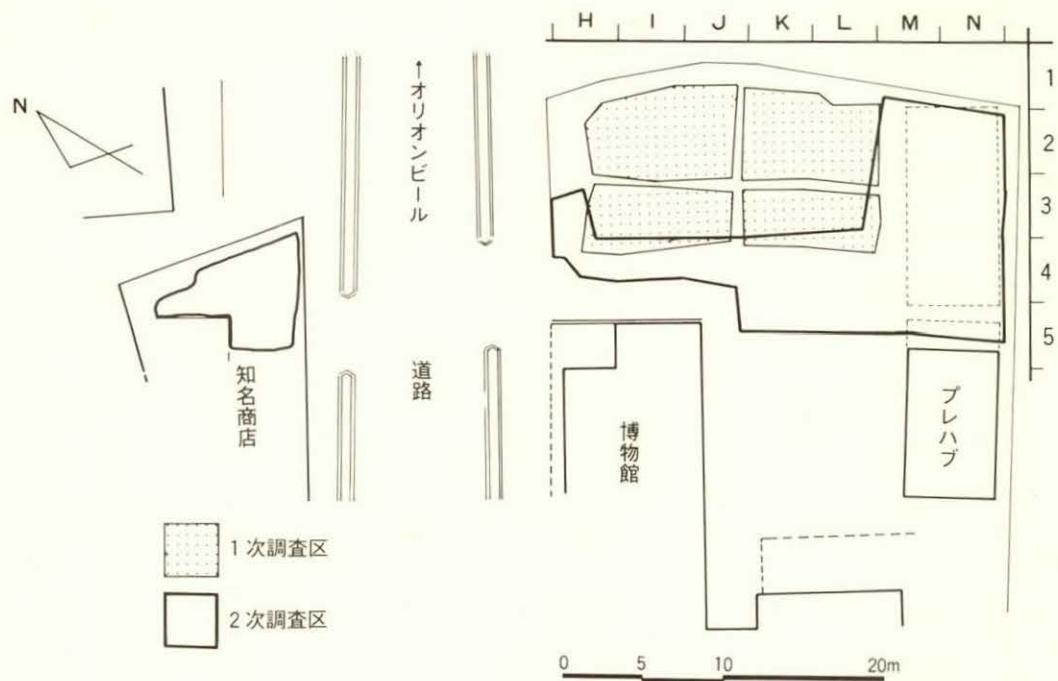
未攢乱の包含層は、後述のように確認されないので、柱穴(ピット)による建物プランで遺構を検討しなければならなくなり、ピット、土壌毎遺物を分け、詳細な検討を行なった。なお、以前破壊された所を地表より約2m50cm掘下げてみたが、白砂層より下に遺物包含層は確認されなかった。(『名護博物館紀要・1』1985年)

• 2次調査

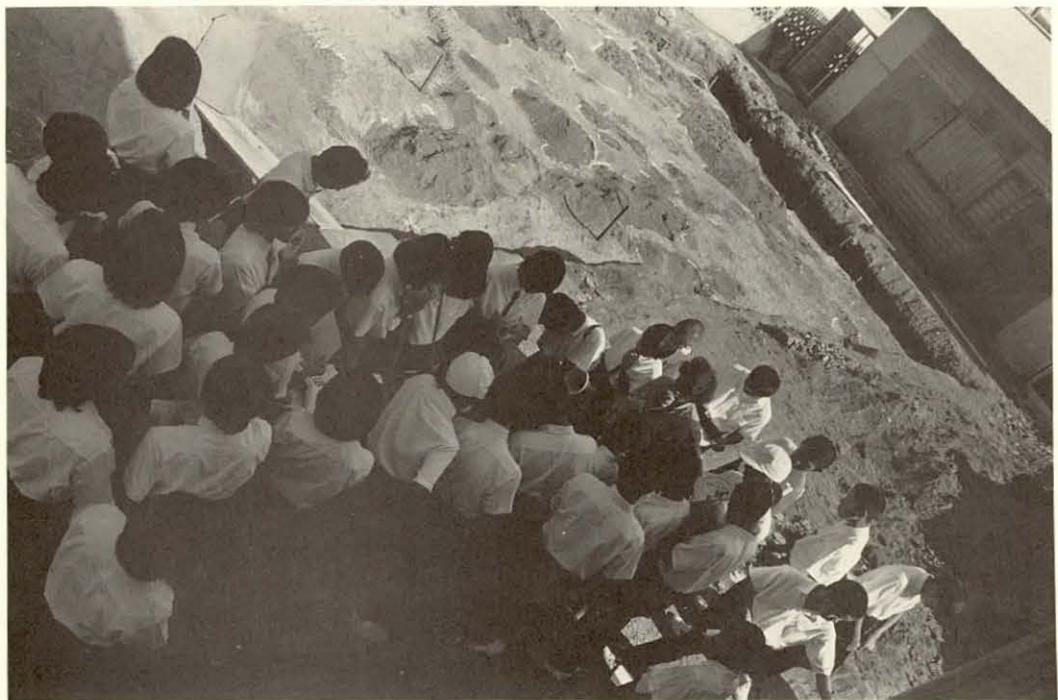
収蔵庫の設計変更に伴う部分についての調査となるが、1次の調査区に重ねるため簡易平板測量を行ない4m×4mのグリッドを設定し発掘調査を進めることになった。

グリッド設定図は第4図のとおりである。保存状況については数ヶ所の試掘と1次調査の結果より未攢乱の遺物包含層は期待できなかった。層についてはある程度把握されていたので、遺構が残っている可能性のある白砂層の直上までは遺物の採集に重きをおき、遺構については、柱穴の可能性のあるものについてすべて番号を付し個々に遺物を取り上げ、未攢乱のピットが残存しているか検討できるようにした。

また、博物館隣地の、知名商店新築工事に伴う発掘調査もあわせて行うことになった。調査に先立ち試掘を入れたが、いずれも攢乱が進み、保存状況はきわめて悪いことが確認された。知名商店敷地についても同様に、遺物の採集と、ピットごとに遺物をまとめ、未攢乱の柱穴が残存していないか詳細に検討できるようにした。



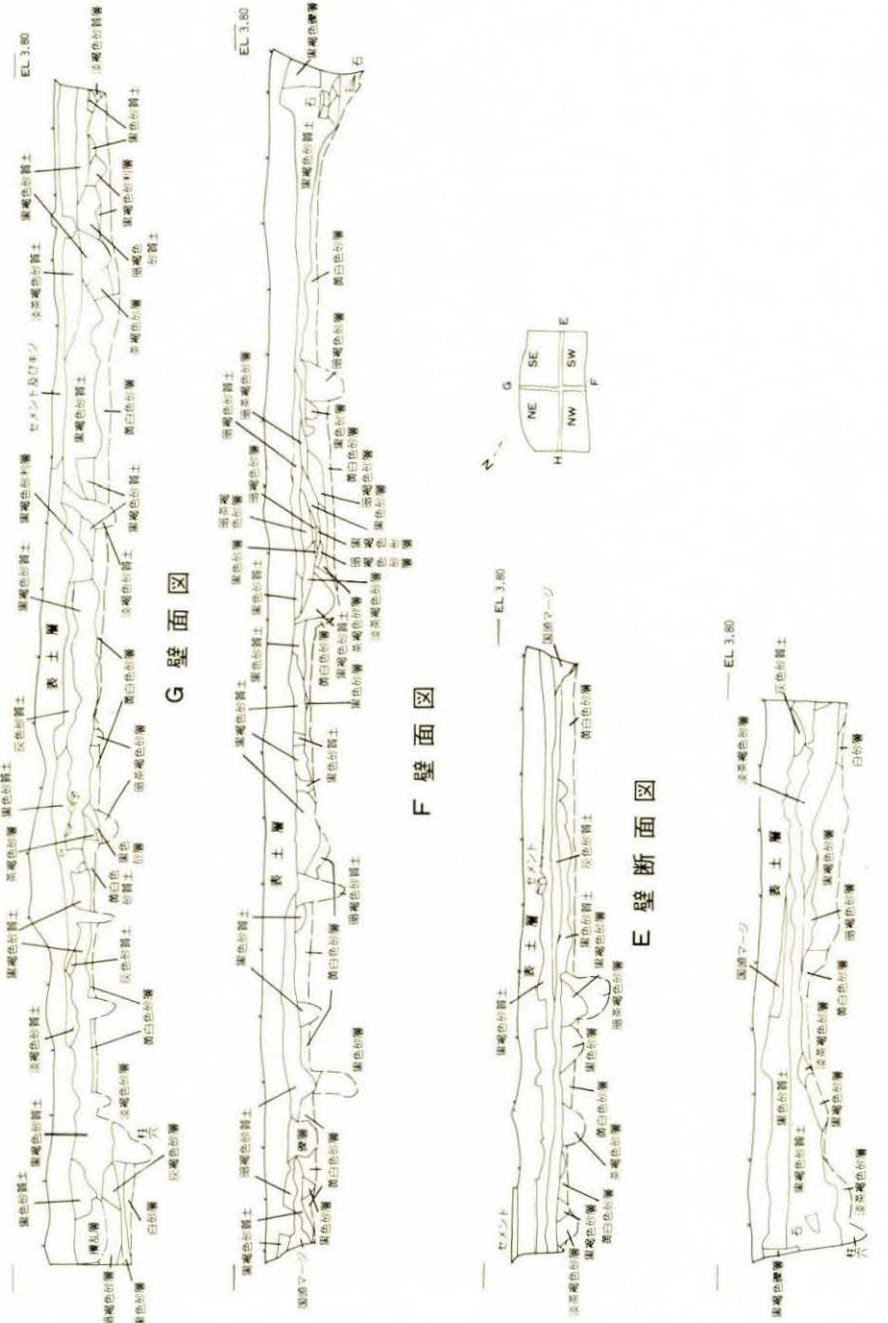
第4図 グリット設定図



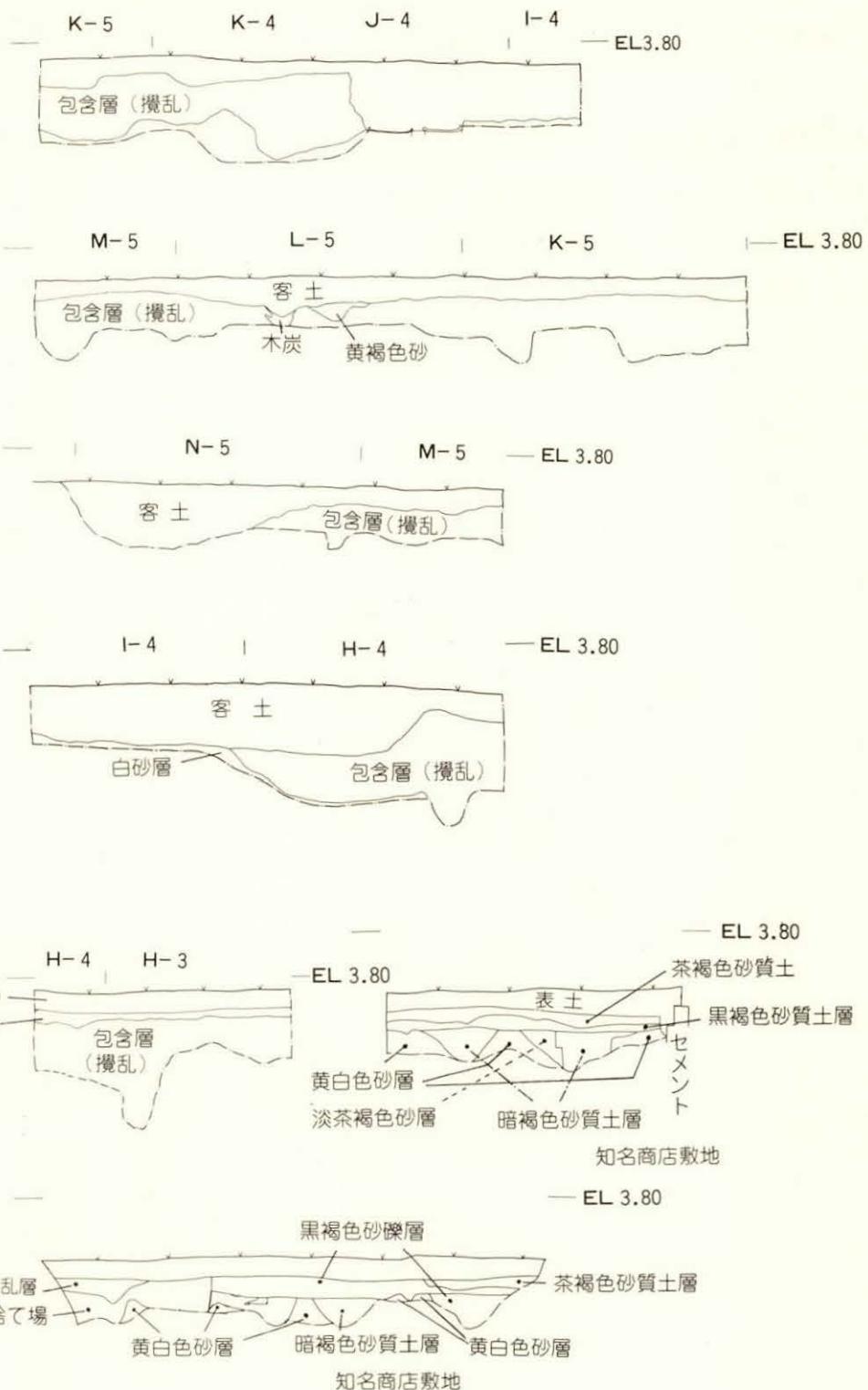
PL-1 遺跡説明会

2. 層序

溝原貝塚の立地するこの土地は、名護間切番所として、また、その後は名護町役場名護市役所庁舎として利用されてきた。発掘調査の結果では未攢乱の遺物包含層は確認されず、遺物を包含する最下層面から、近・現代遺物が出土し、攢乱が進行している状況が観察された。



第5図 層序断面図(1次)

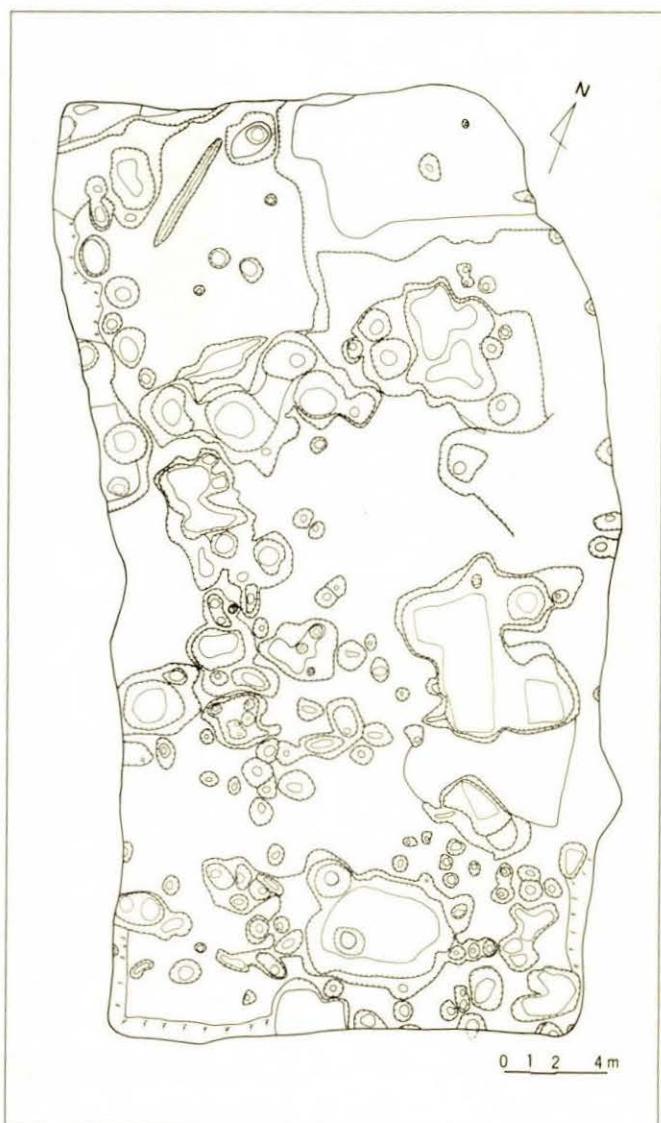


第6図 層序断面図(2次)

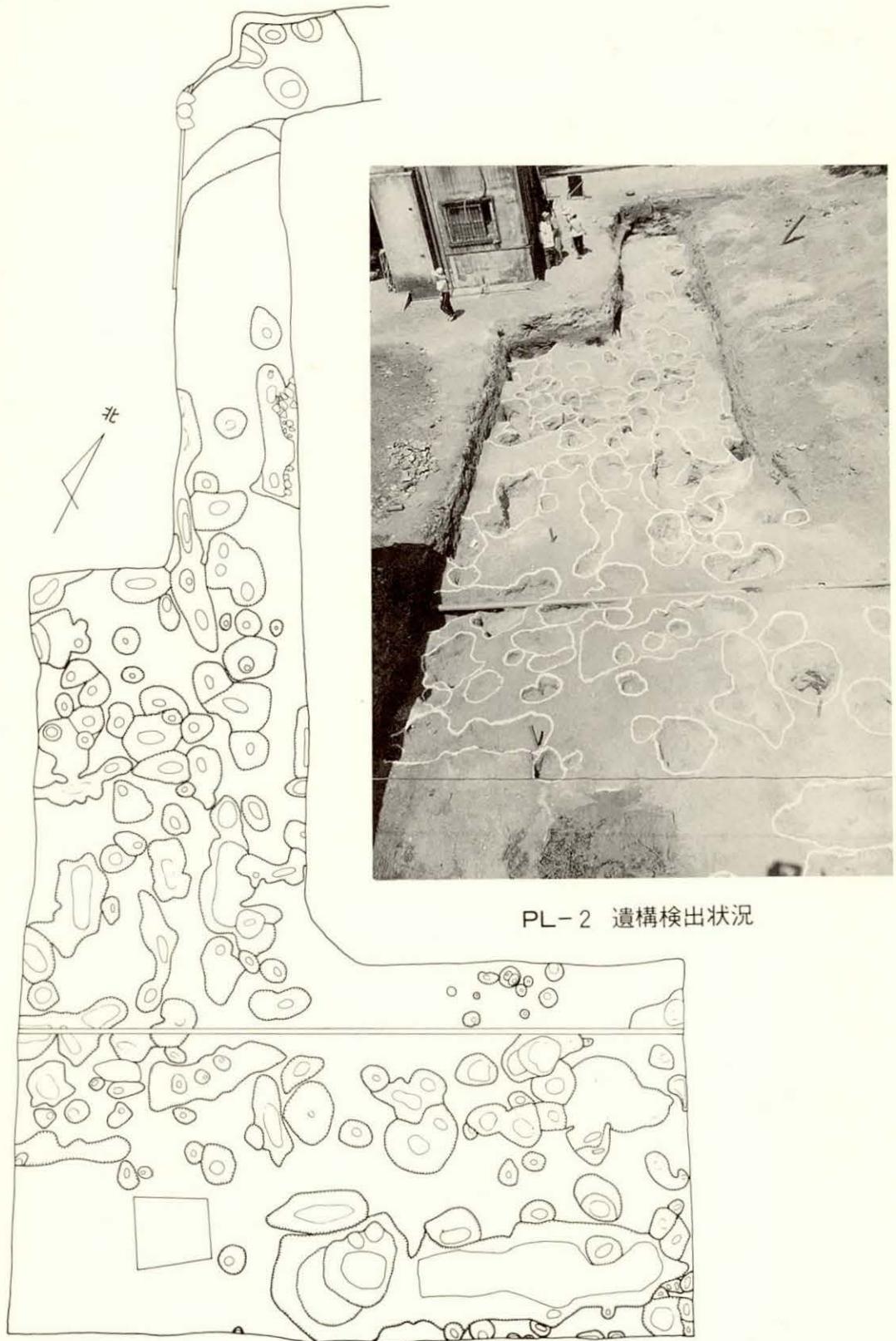
3. 遺構

白砂層面に無数のピット群が形成され、その1つ1つについて詳細な検討を行なった。各ピットごとの出土遺物一覧表をつくりチェックをしたが、多くのピットから土器の小破片とともに、近・現代の遺物も出土し貝塚時代の遺構は残存しないとみられた。ただし、土器のみが出土するピットもあることからいくつかのピットについては未攪乱の可能性もある。

調査区内から出土する近・現代遺物、白砂層直上に残る市役所当時の遺構、それにピット群の出土遺物の検討の結果、貝塚時代の遺構は可能性がないと結論づけられた。



第7図 遺構平面図(1次)



PL-2 遺構検出状況

第8図 遺構平面図(2次)

0 1 2 4m

4. 遺物

本調査の出土遺物は、貝類等の自然遺物と、土器、石器類、陶磁器、キセル等の人工遺物である。

(1) 土器

本遺跡から出土した土器は、すべてが小破片で、また摩耗もみられ、攪乱による2次的な変化と思われる。復元できる資料はなく、器形等については不明。無文土器が主体で数点有文もみられる。底部は乳房状尖底やくびれ平底などが出土した。尖底の量が多く、近くのアパスク貝塚や、名護貝塚がくびれ平底が多いのに対し特徴的である。

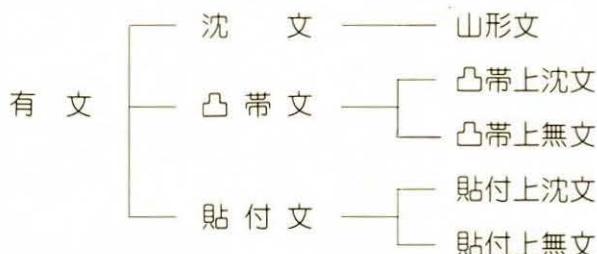
(イ) 無文口縁

最も出土量の多い土器である。胎土の中に光沢を放つ雲母の微粒が見られる。口縁部の形態を分類の最後に可能性として示した。



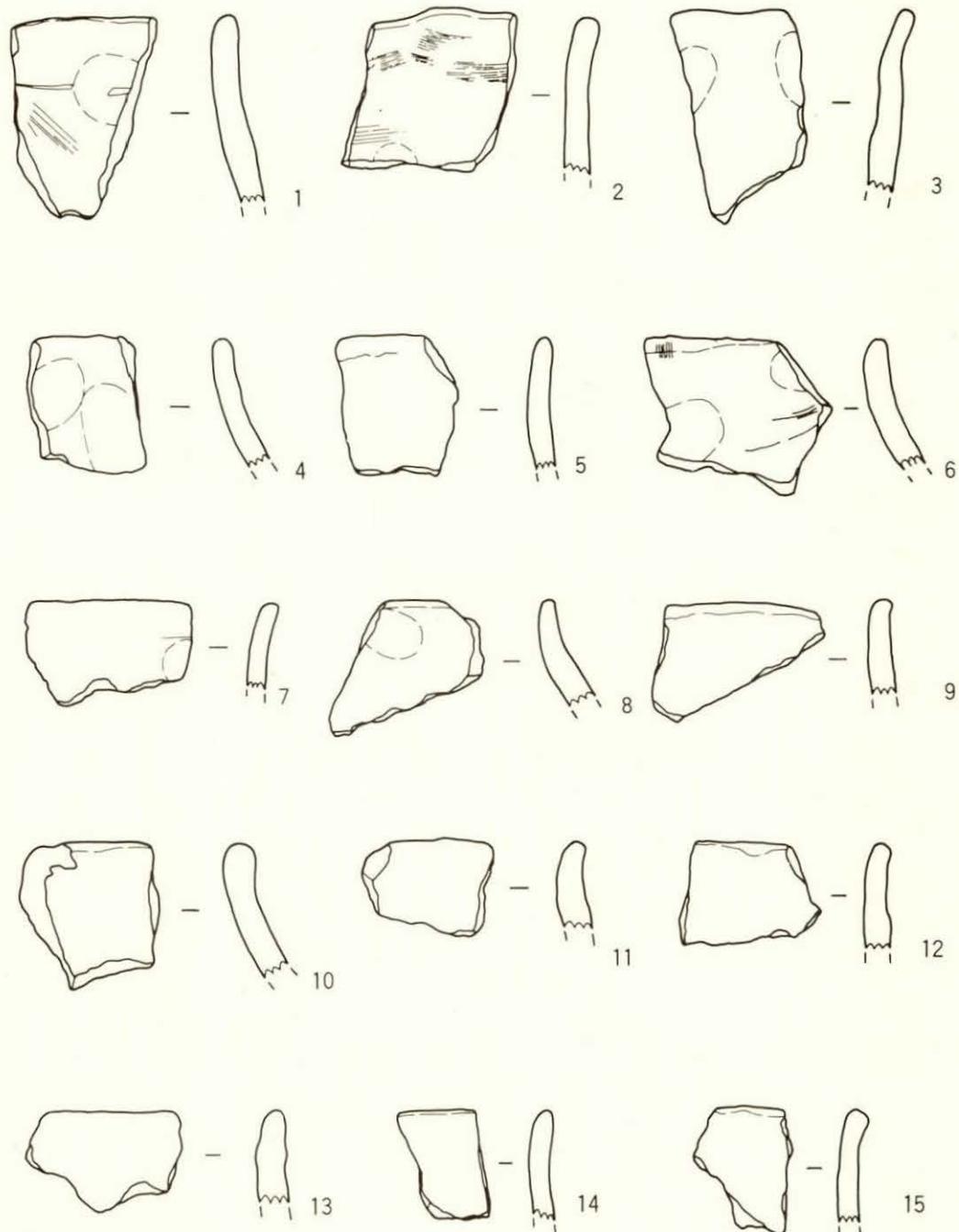
(ロ) 有文

38個の有文土器が得られた。分類は以下のとおりである。



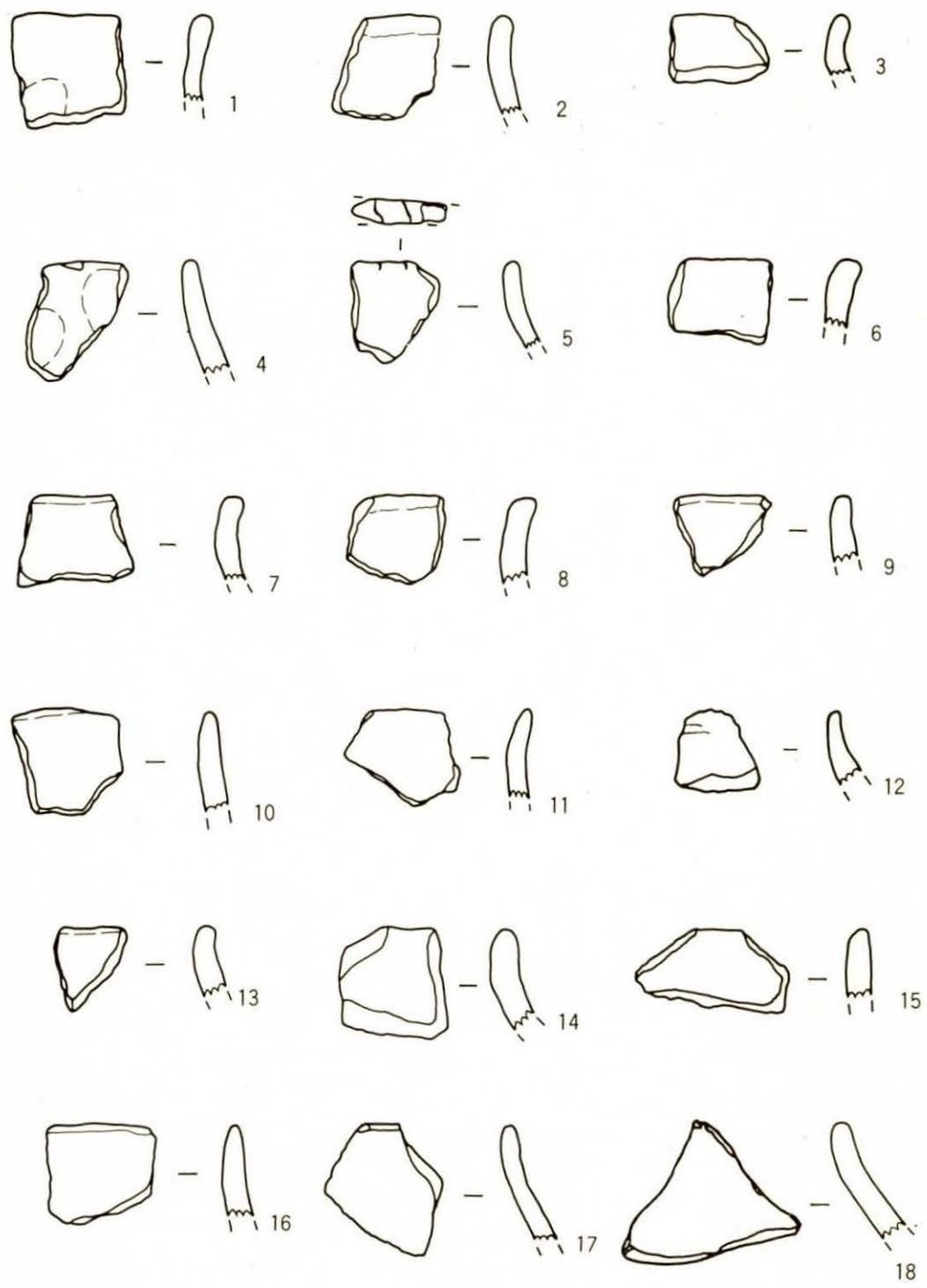
(八) 底 部

底部の出土状況は、乳房状尖底 2 個、尖底 20 個、丸底 1 個、平底 5 個、くびれ平底 11 個、小型土器 3 個という内訳である。



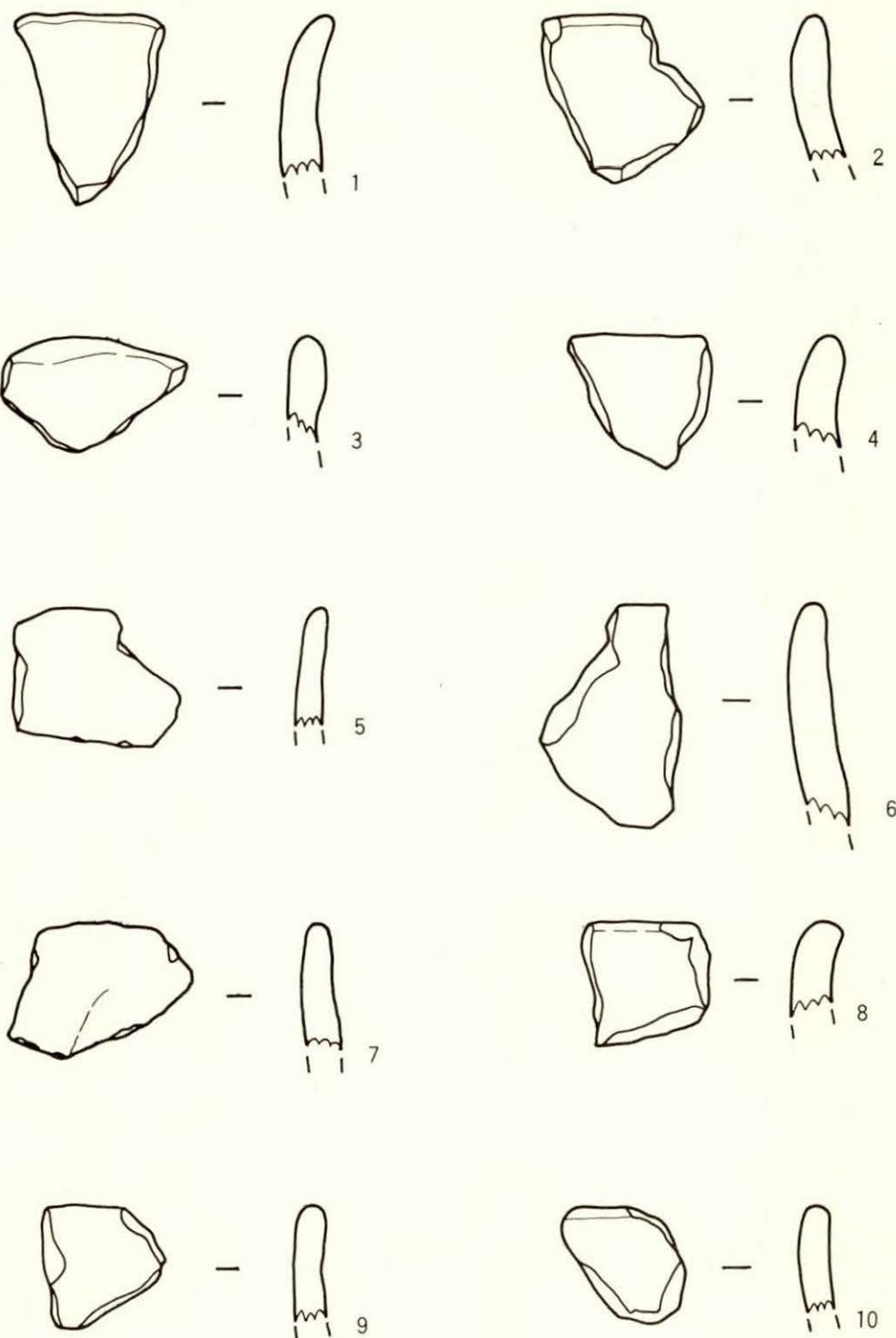
第 9 図 土器 (I - a)





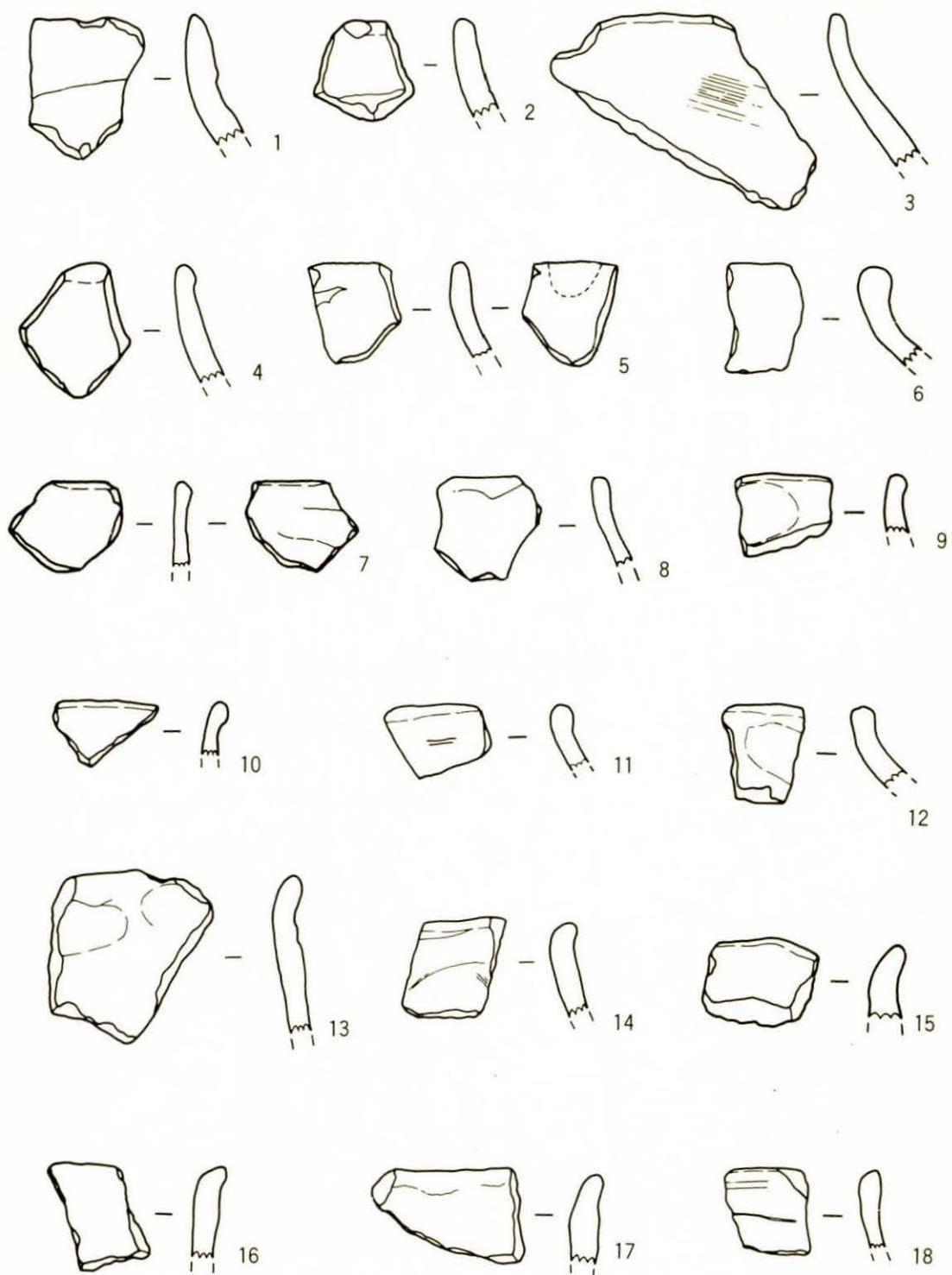
0 5 cm

第10図 土器 (I - a)



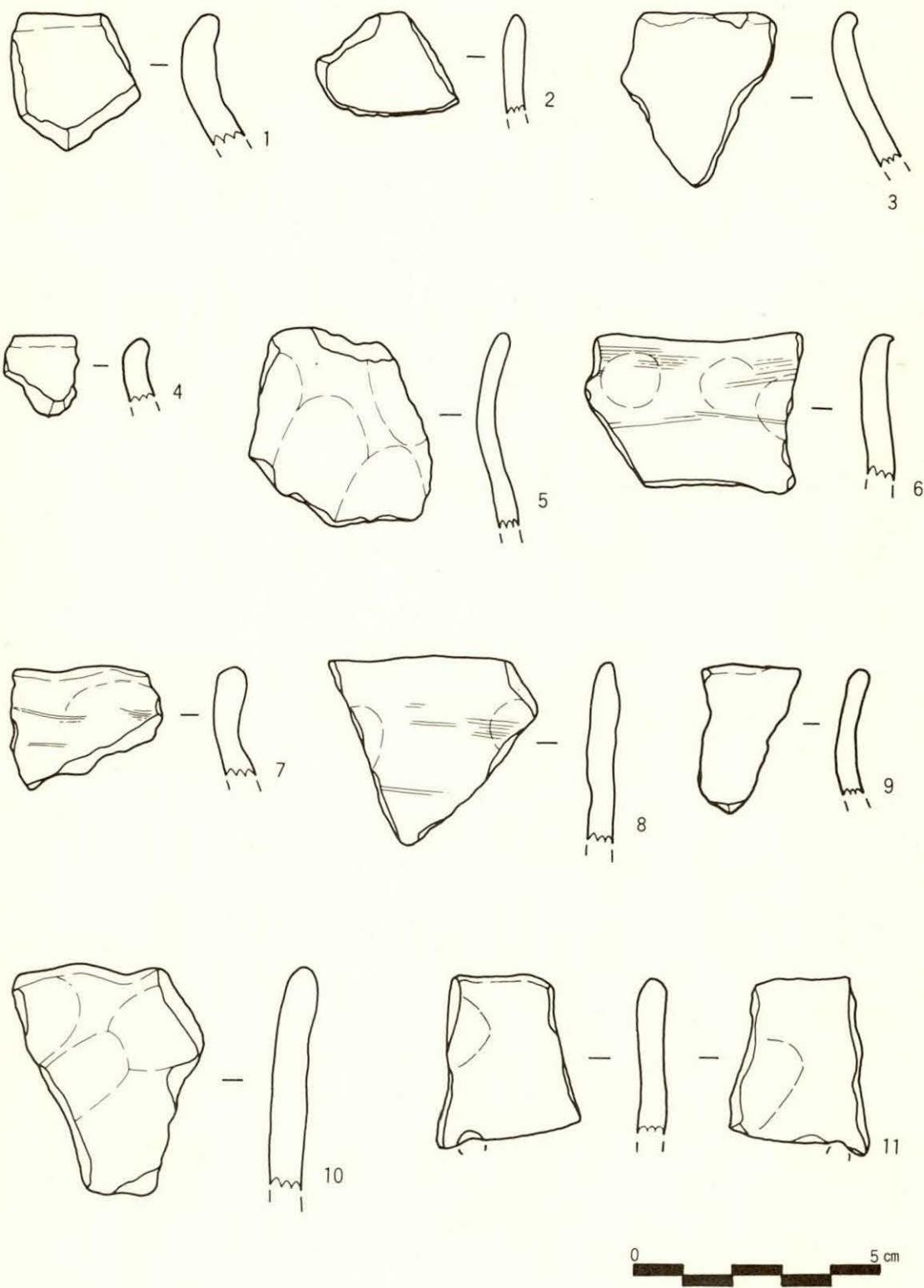
0 5 cm

第11図 土器 (I - a)

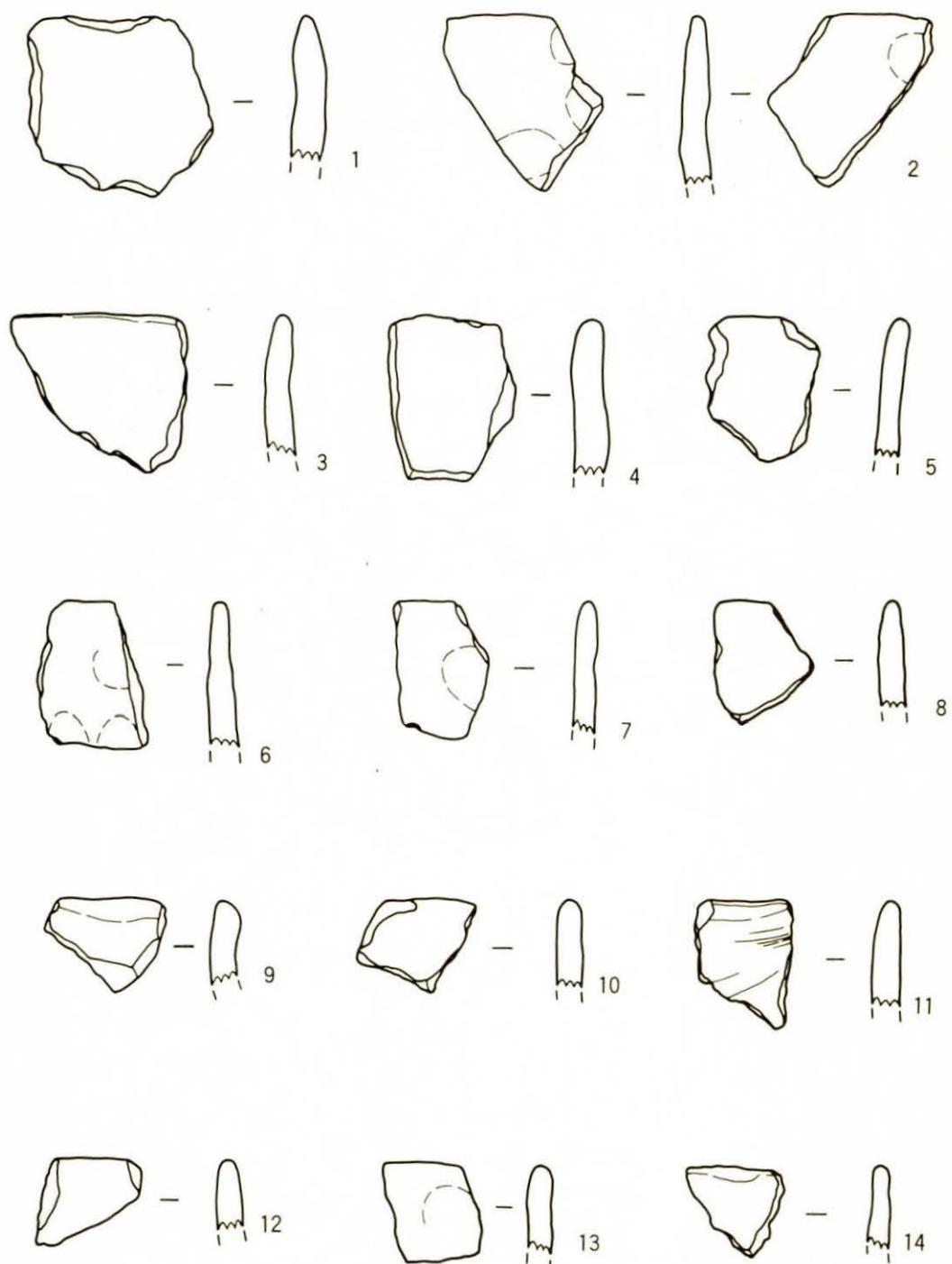


第12図 土 器 (I-a)

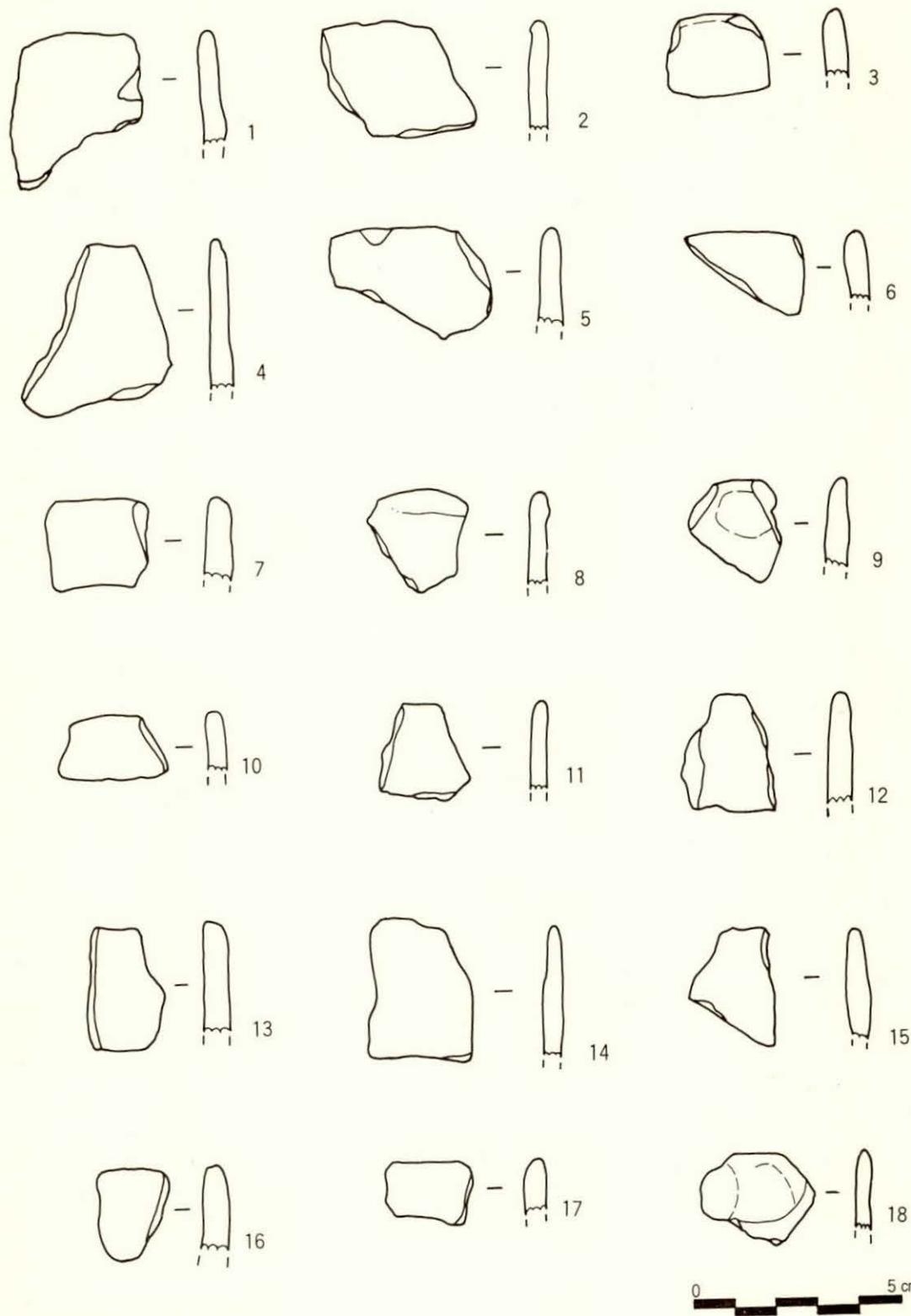




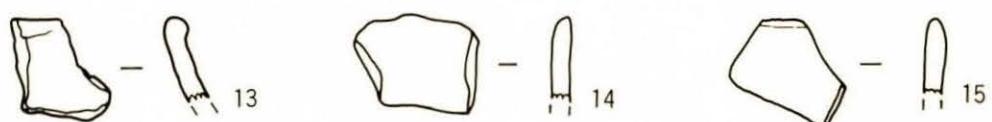
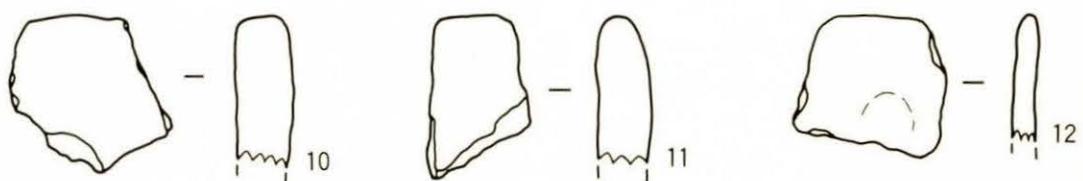
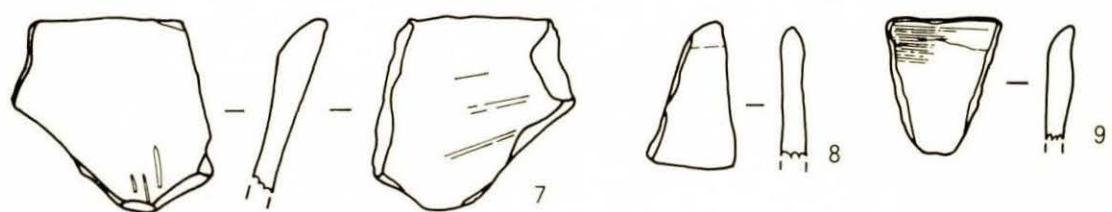
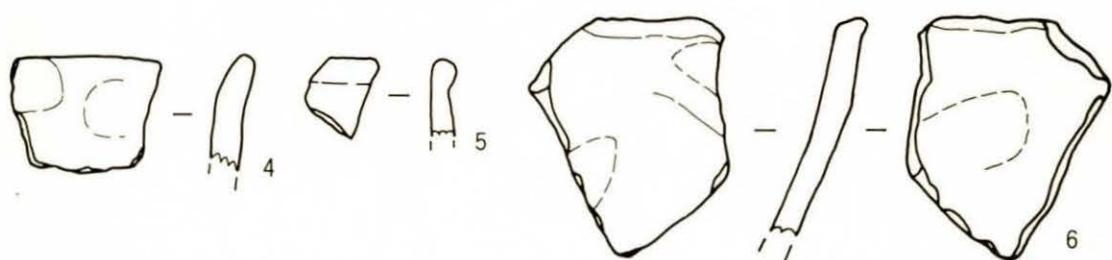
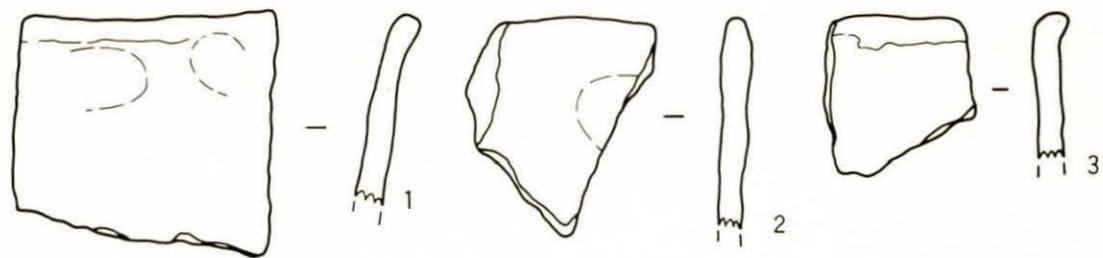
第13図 土 器 (I-a)



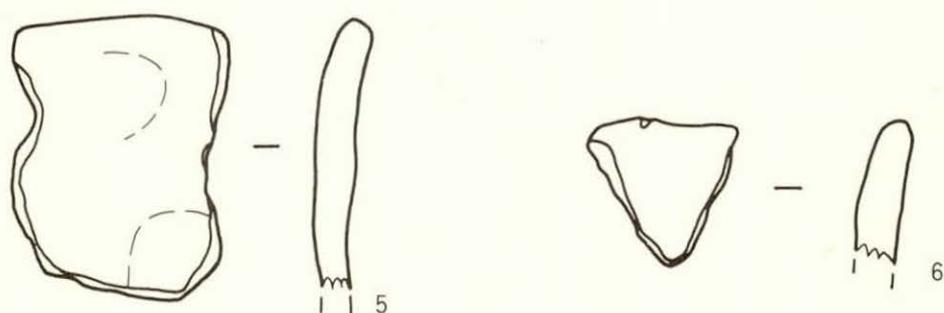
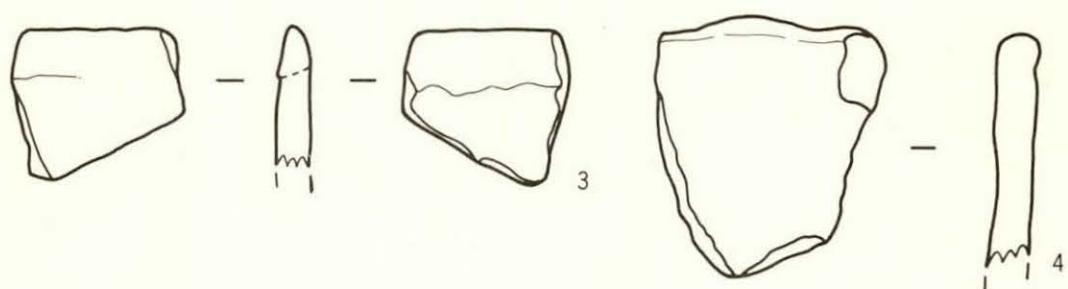
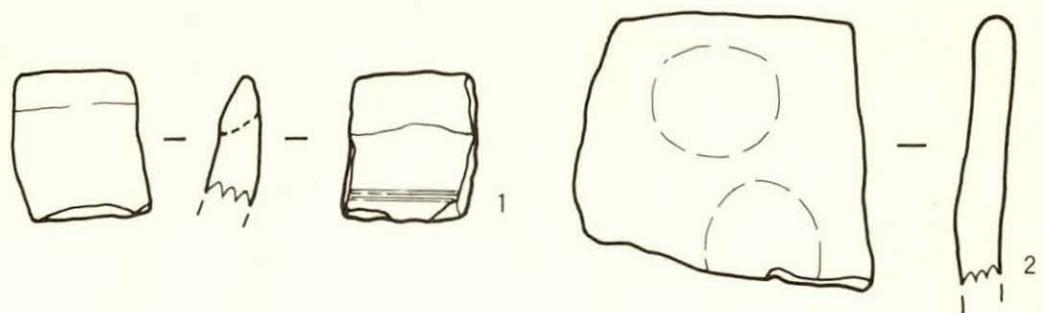
第14図 土器 (I - b)



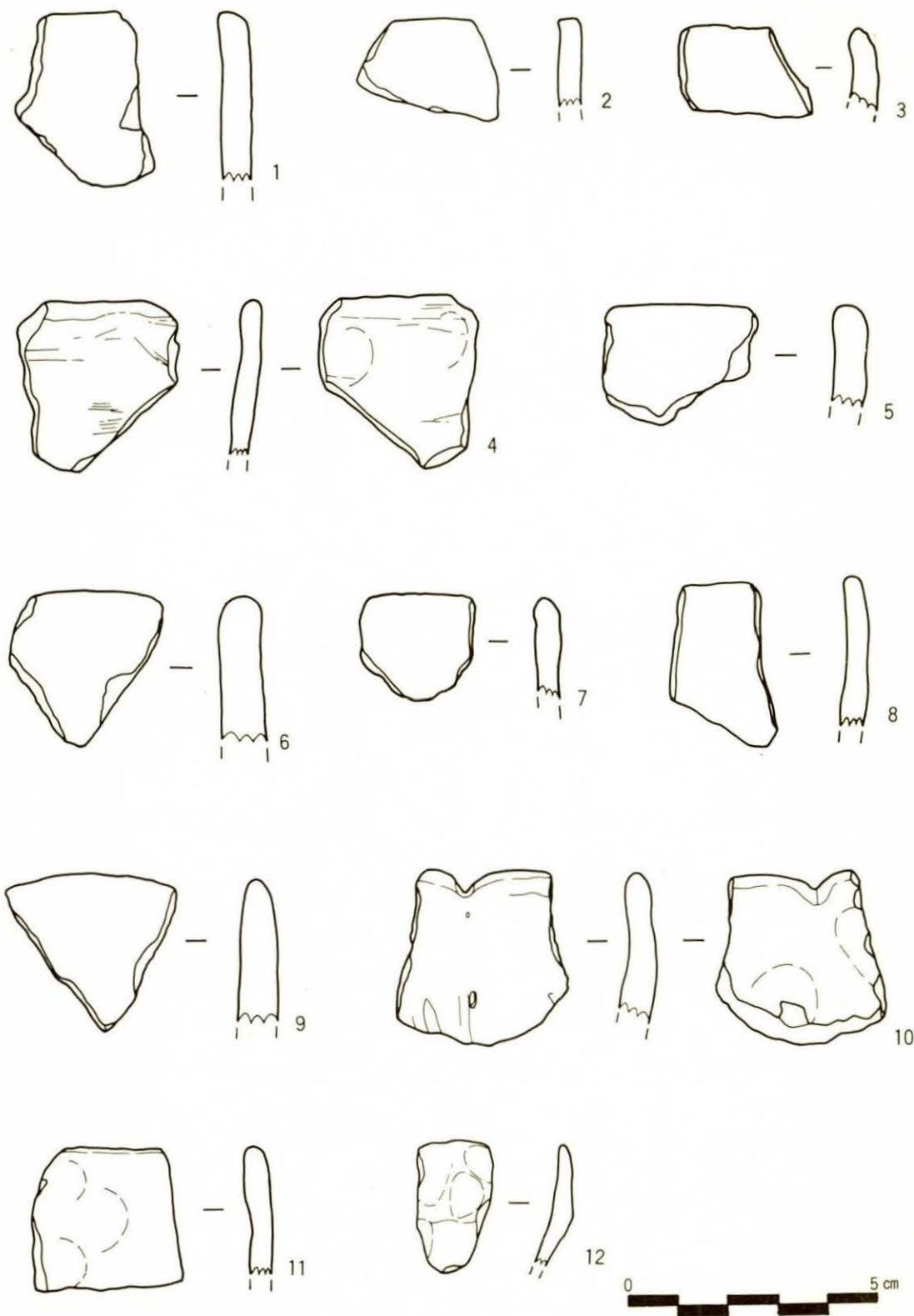
第15図 土器 (I - b)



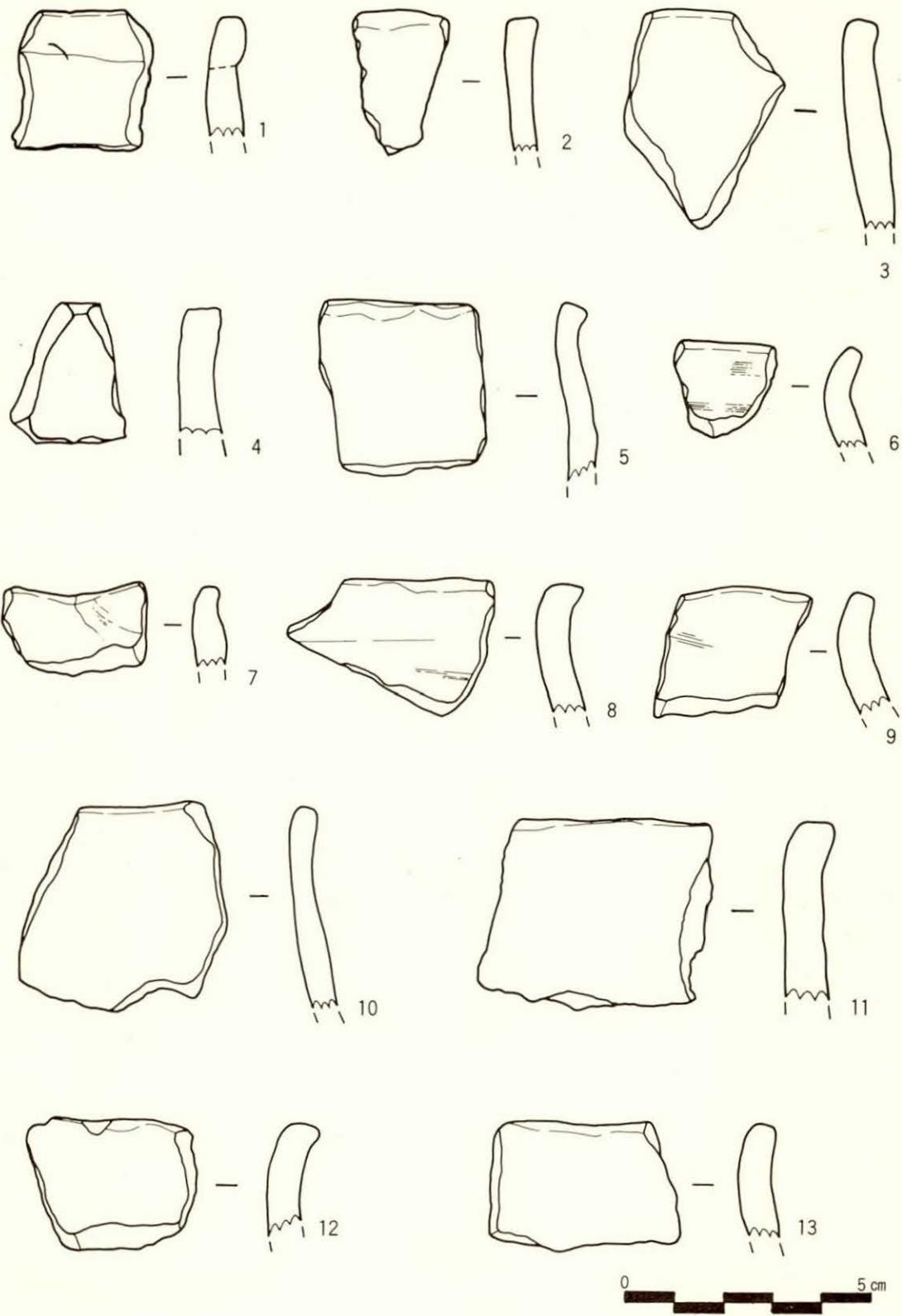
第16図 土器 (I - b)



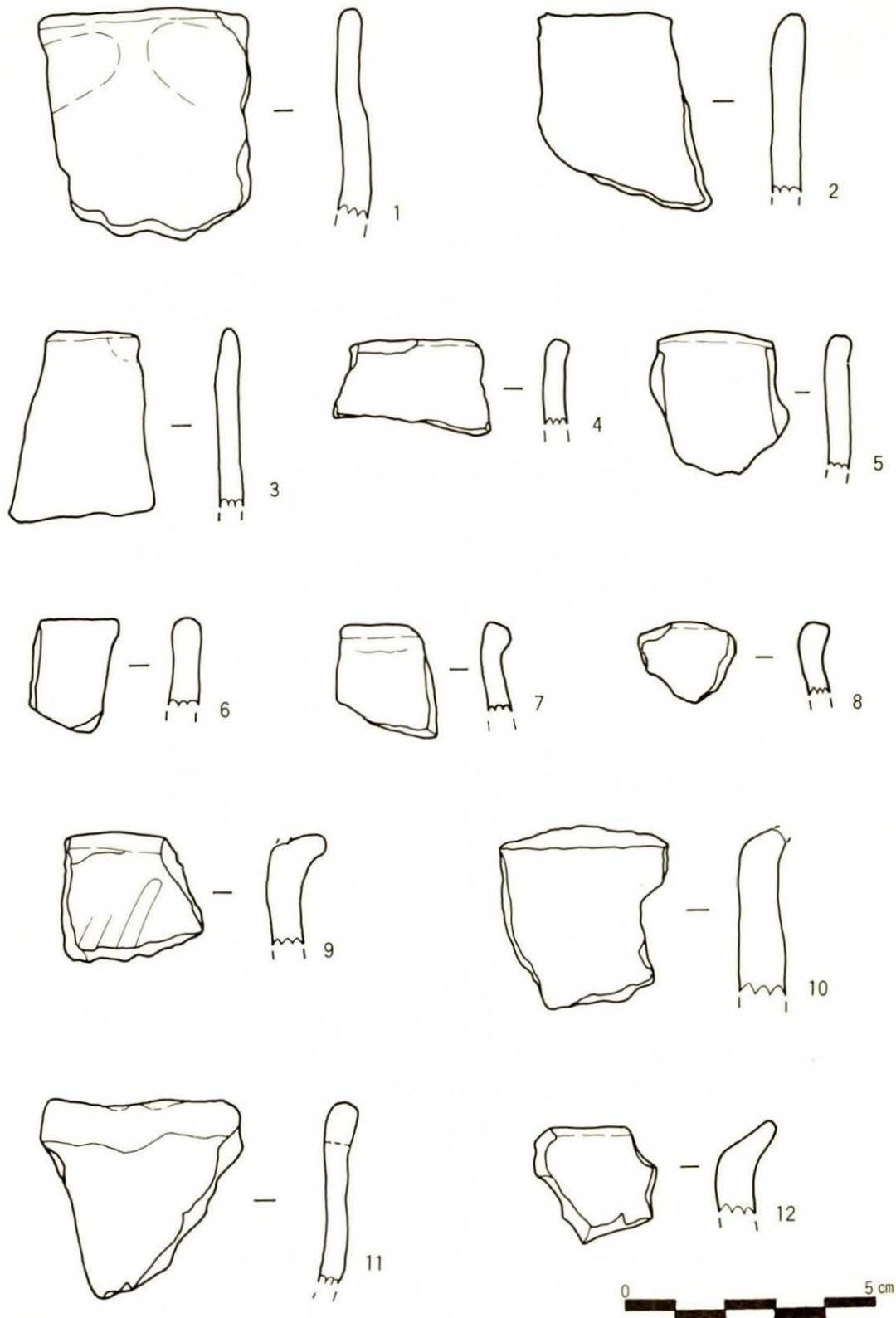
第17図 土器 (I - b)



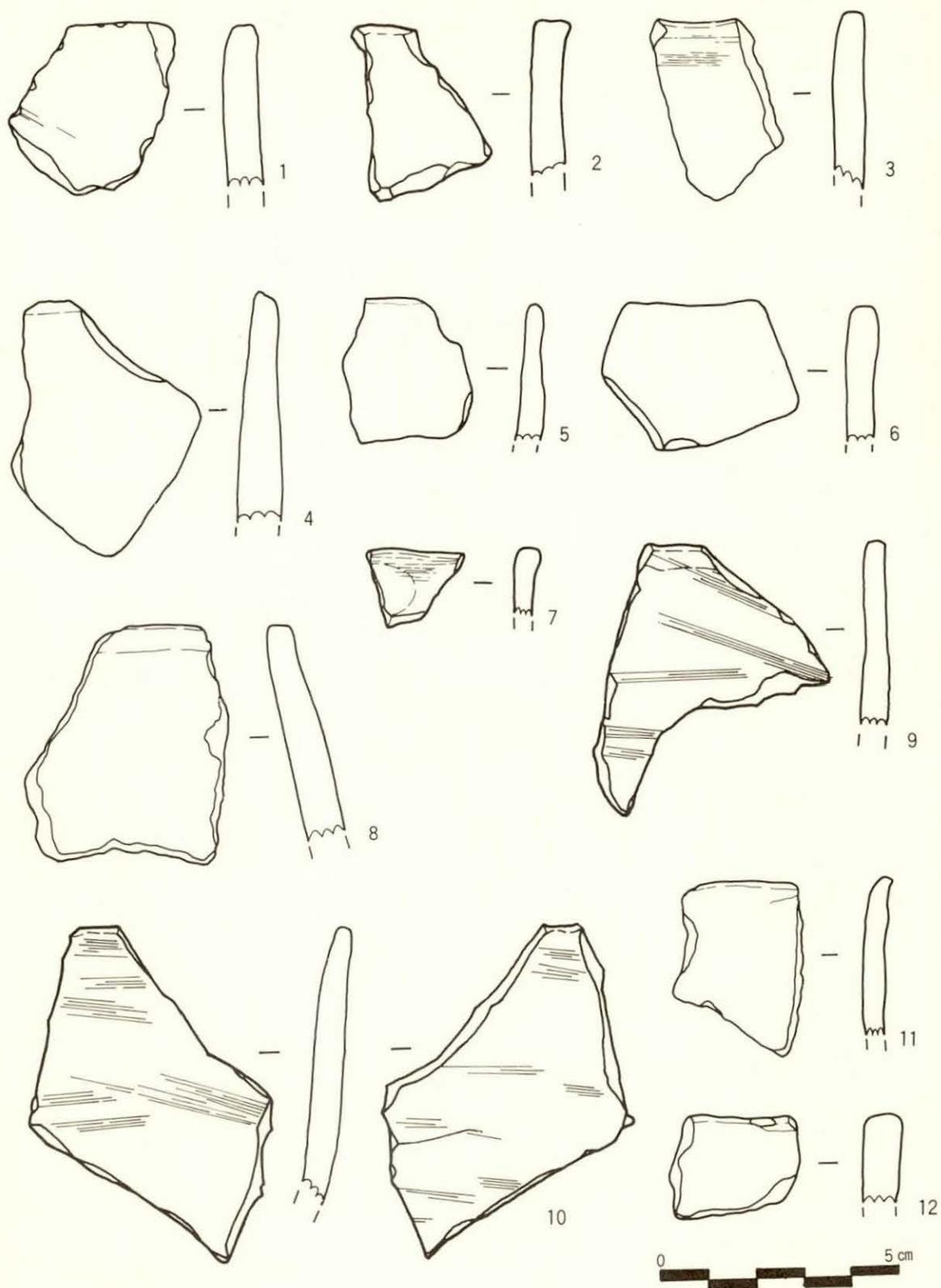
第18図 土器 (I - c)



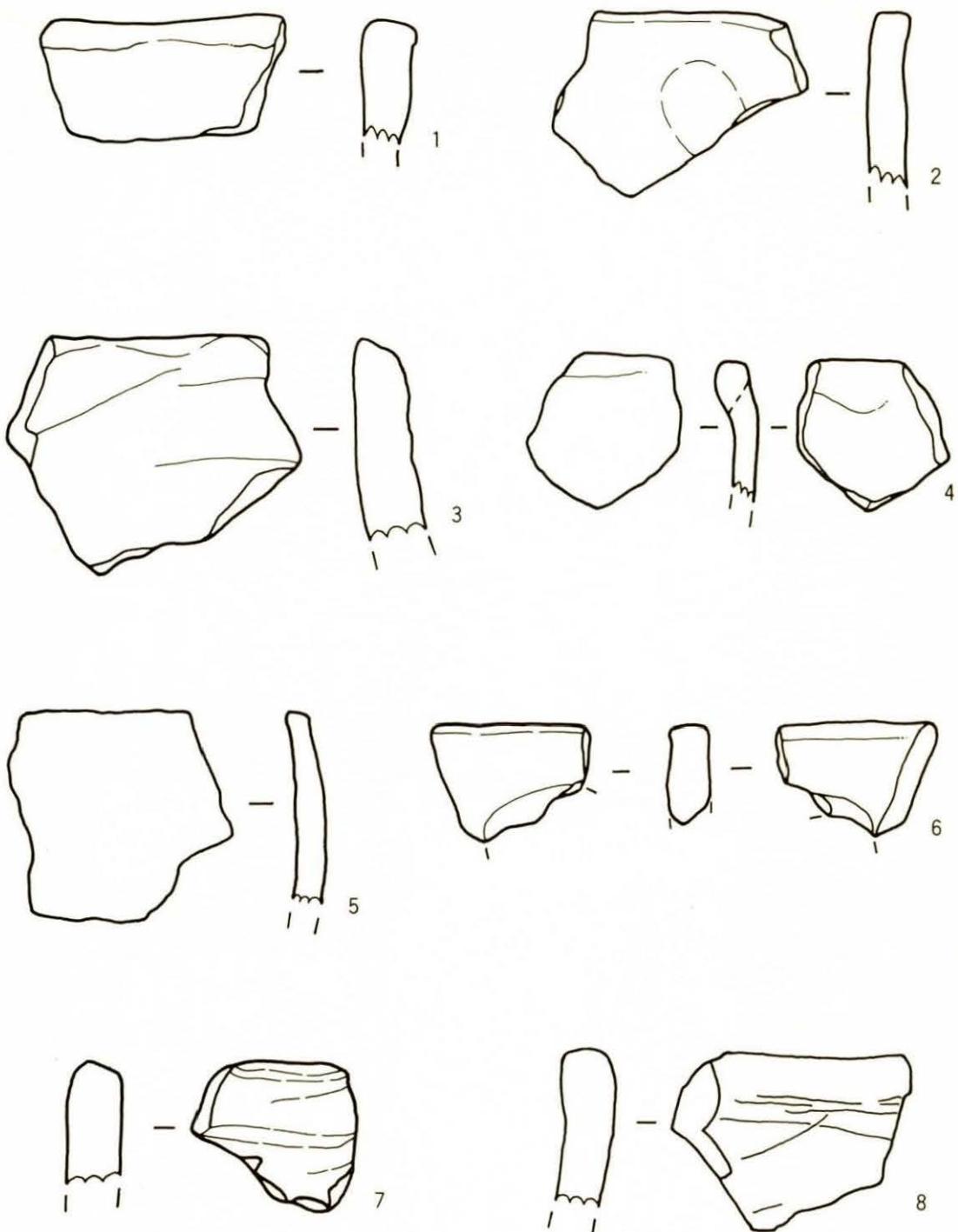
第19図 土器 (II-a)



第20図 土器 (II-b)

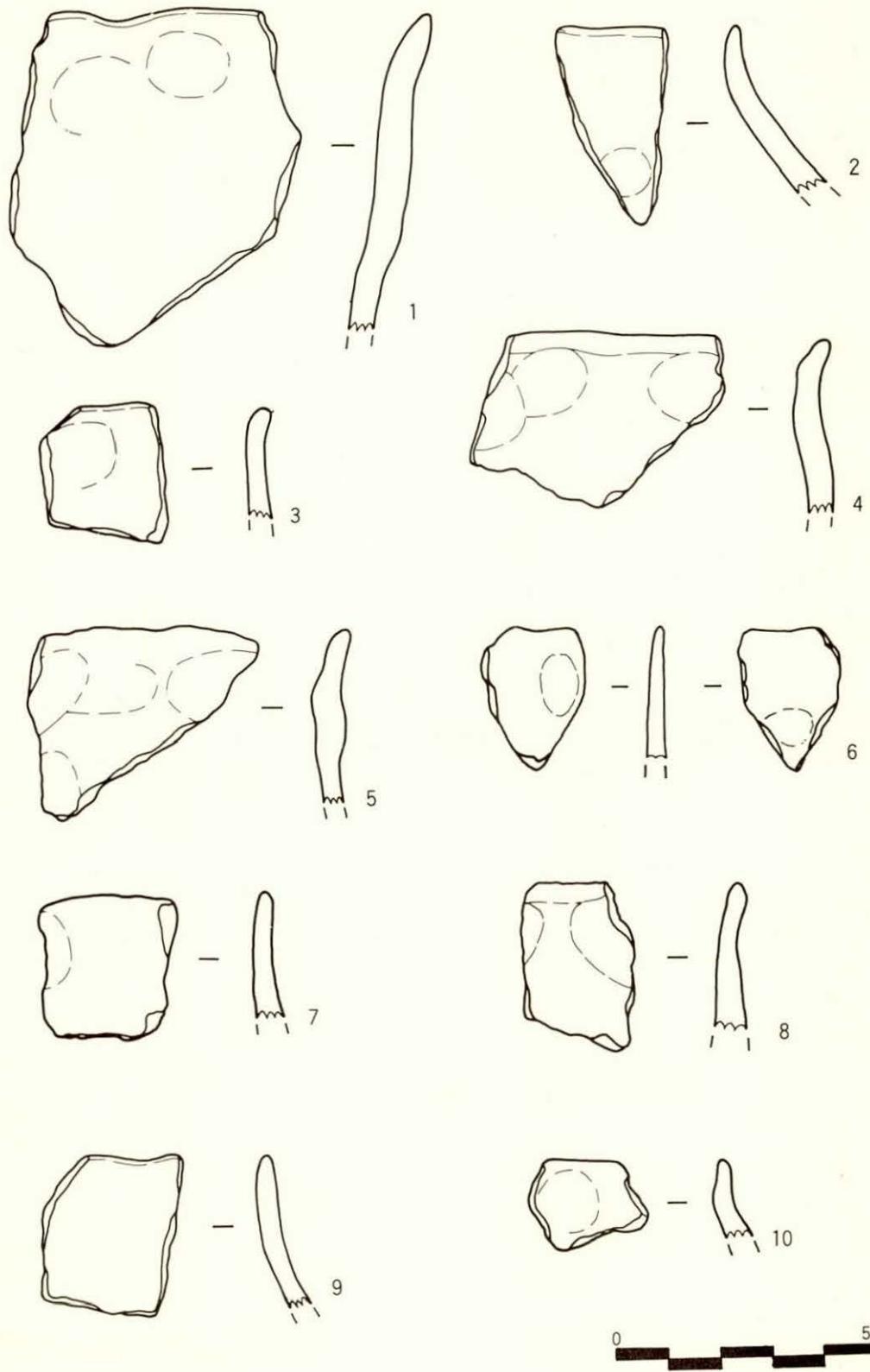


第21図 土器 (II-b)

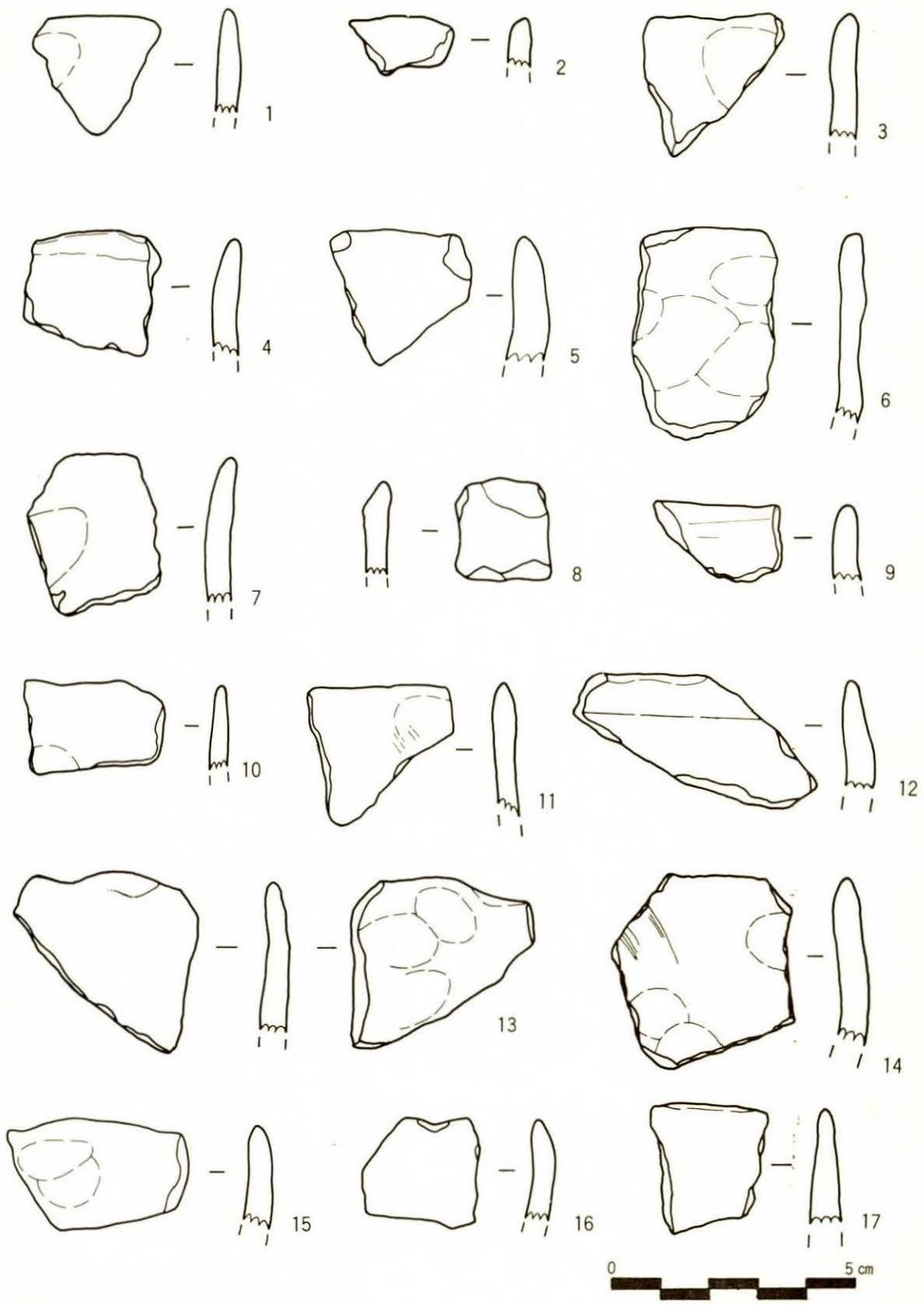


0 5 cm

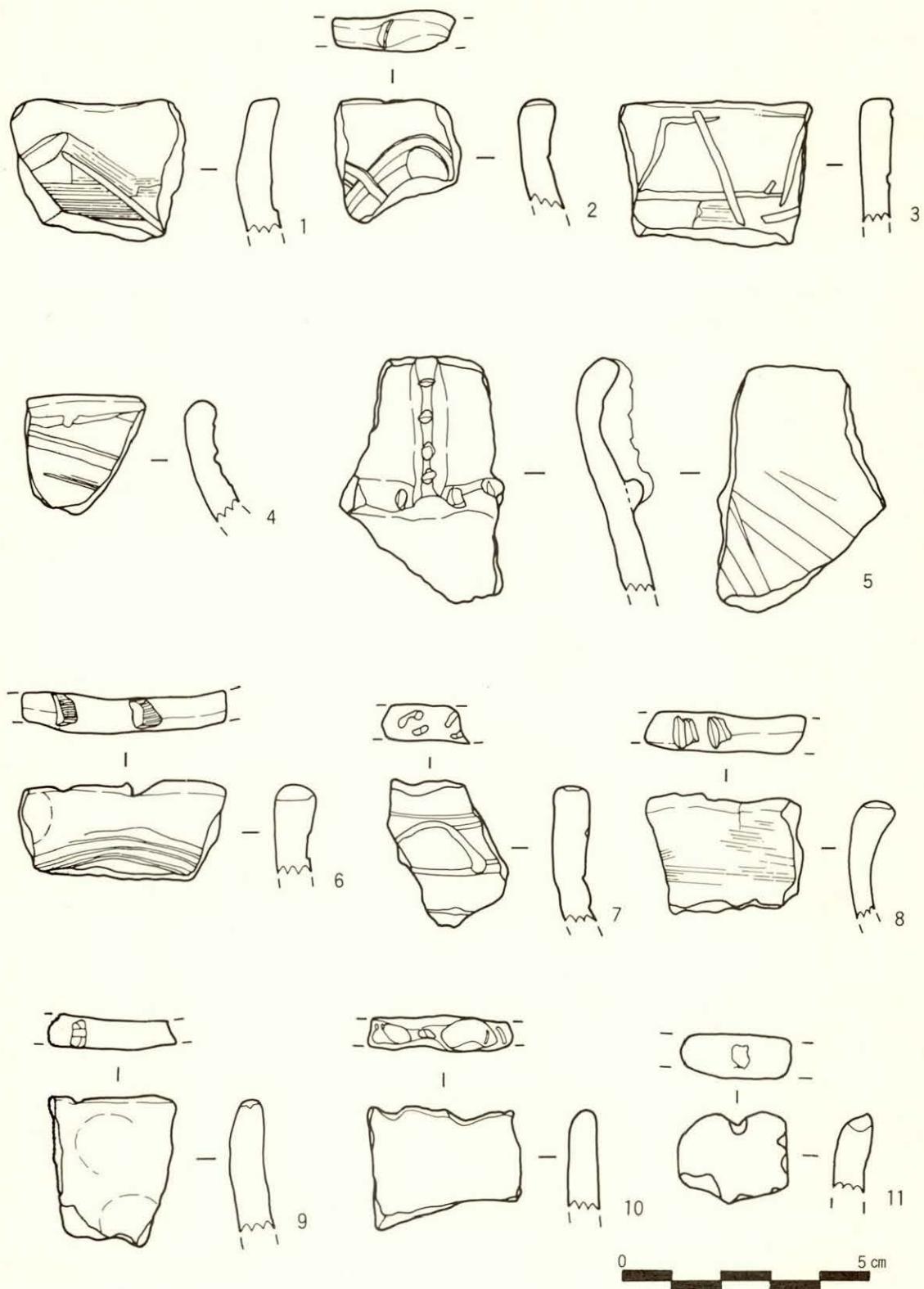
第22図 土器 (II-b, II-c)



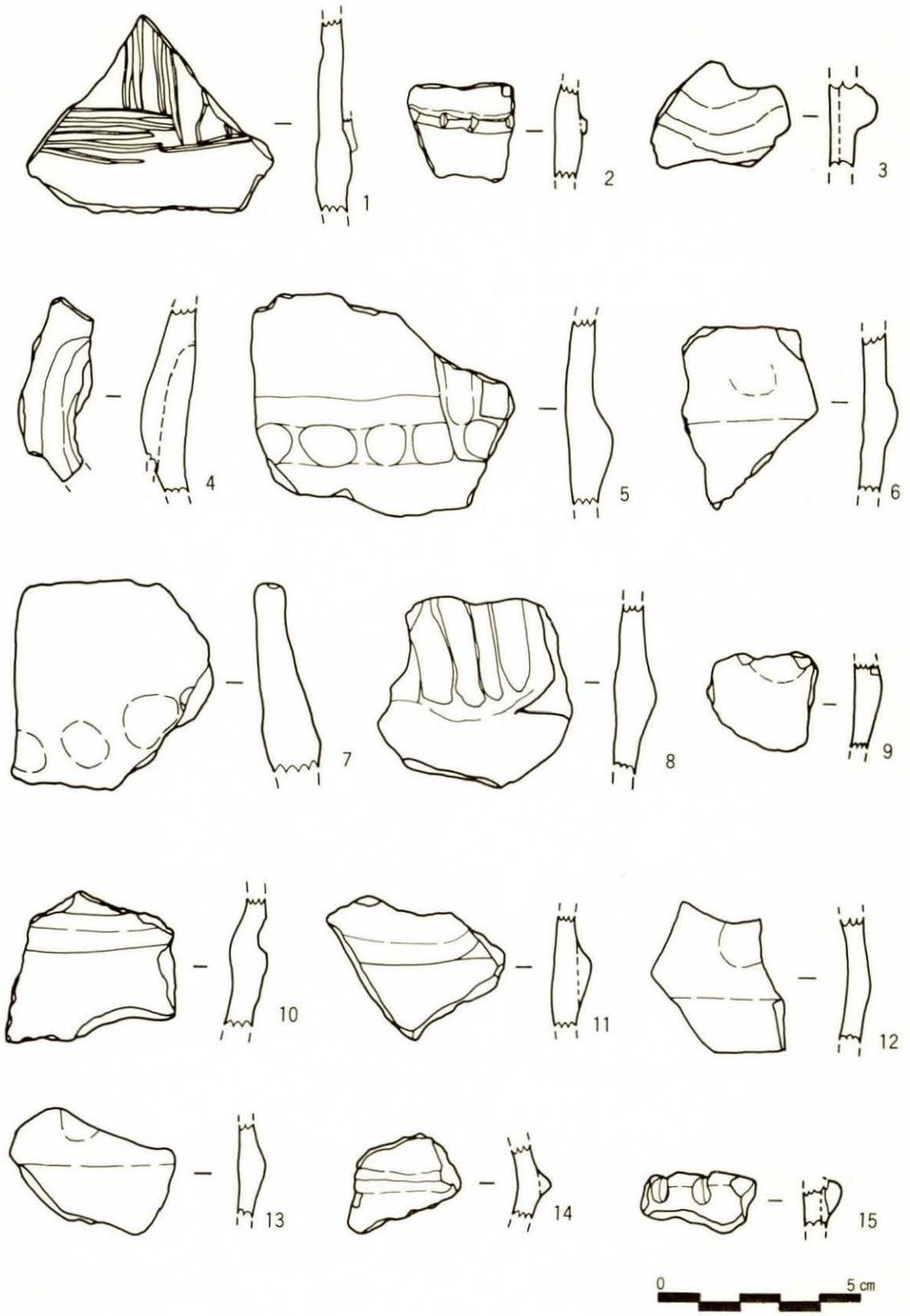
第23図 土器 (III-a)



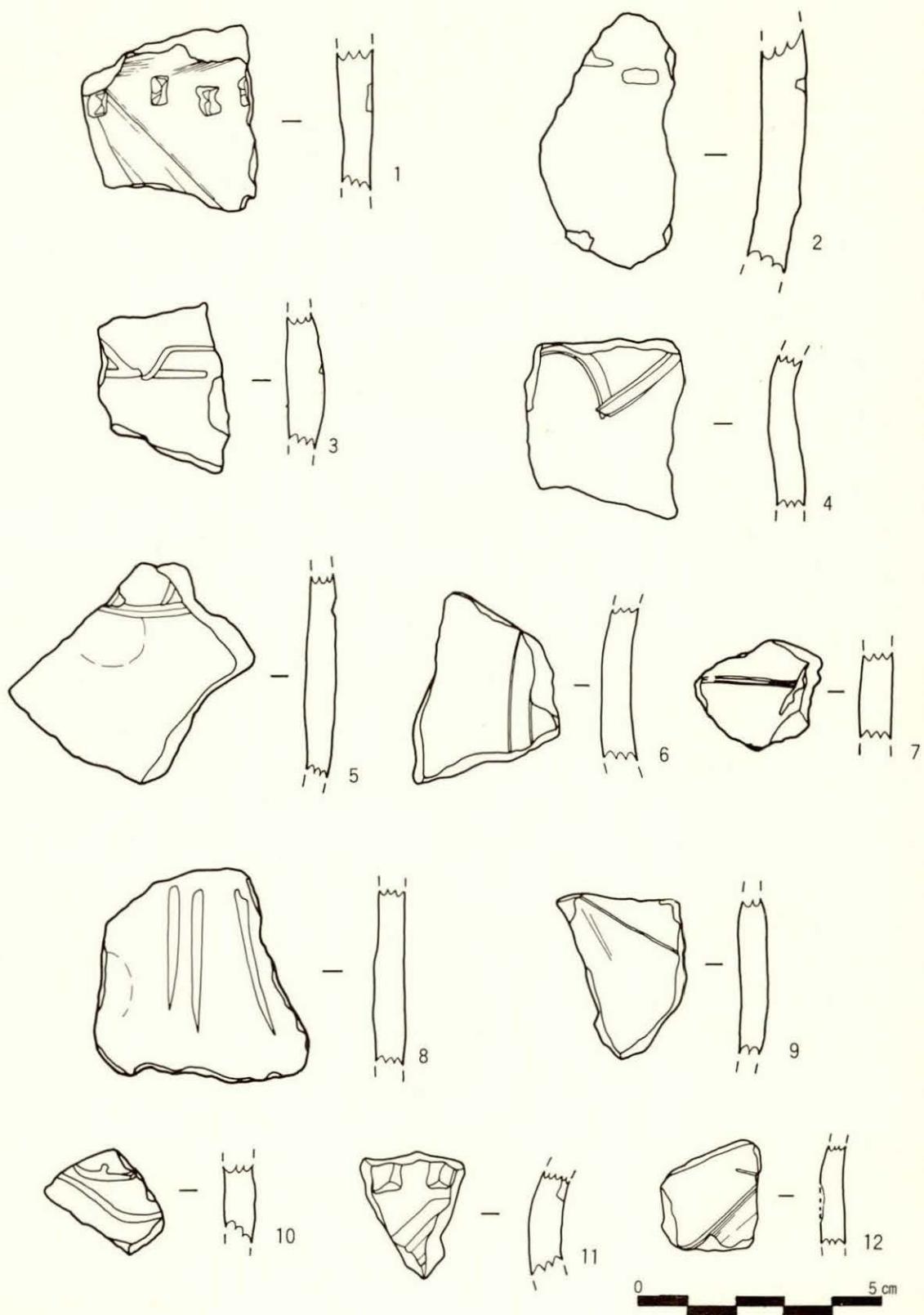
第24図 土器 (III-b, III-c)



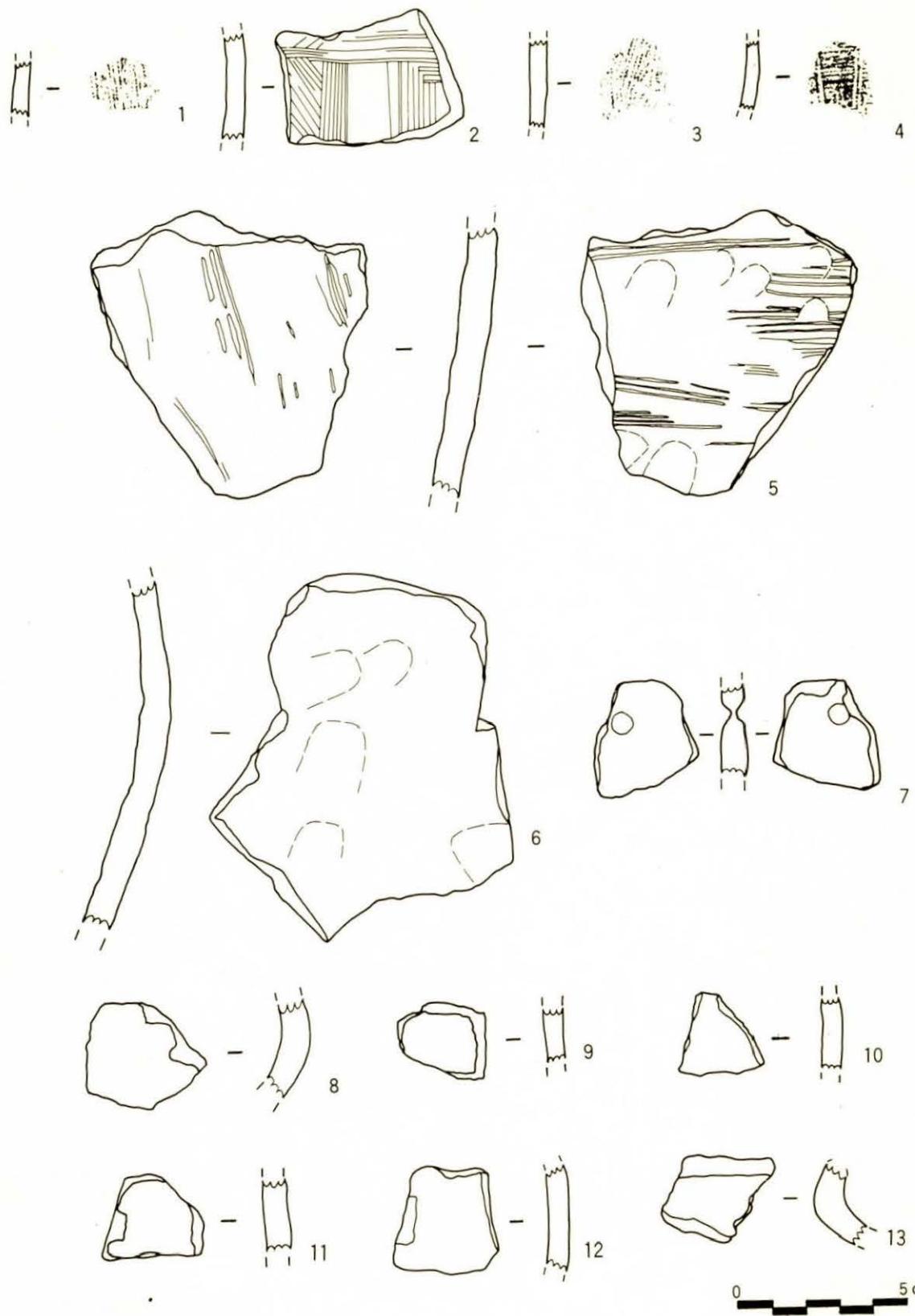
第25図 土器（有文）



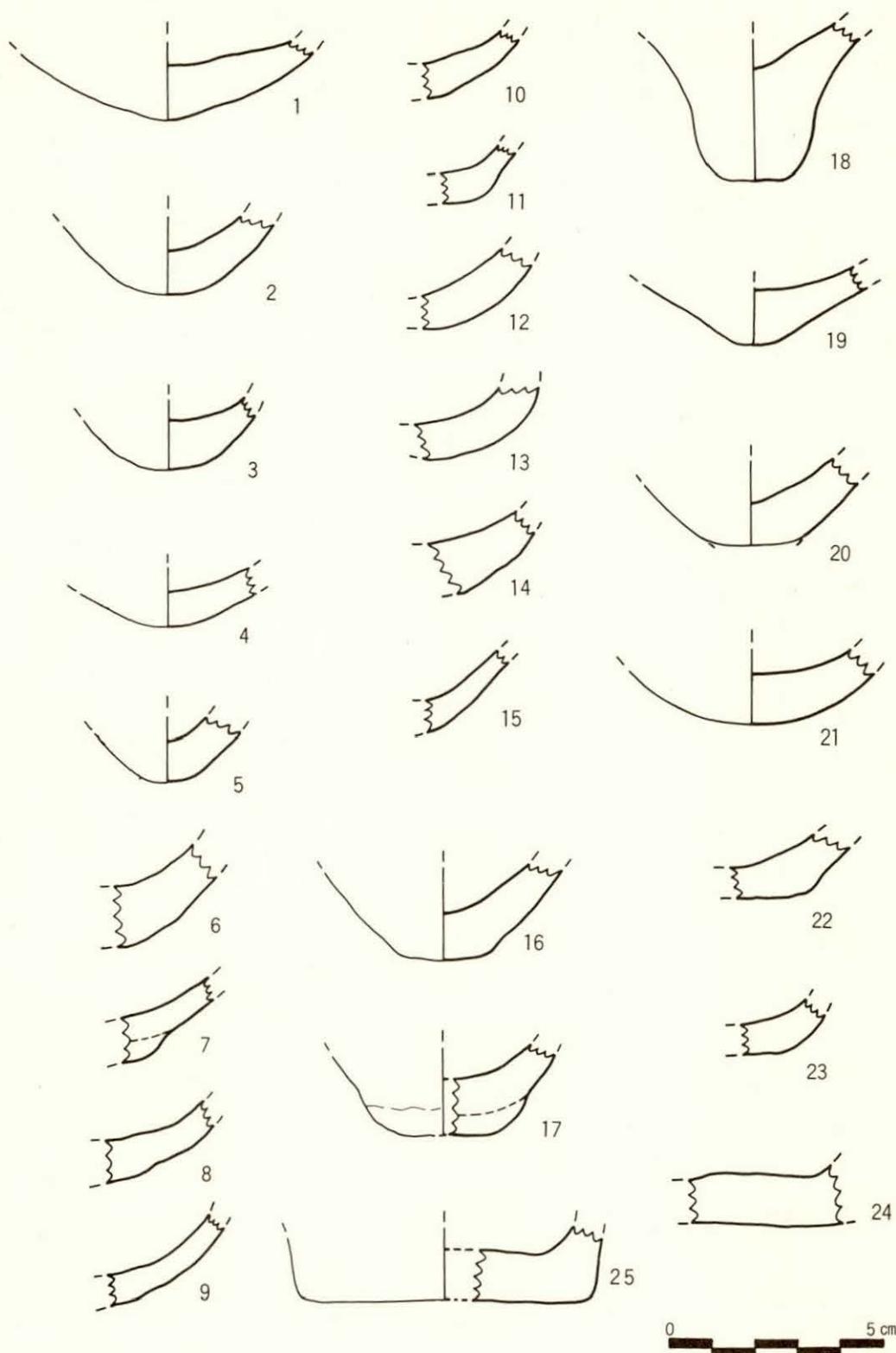
第26図 土器（有文）



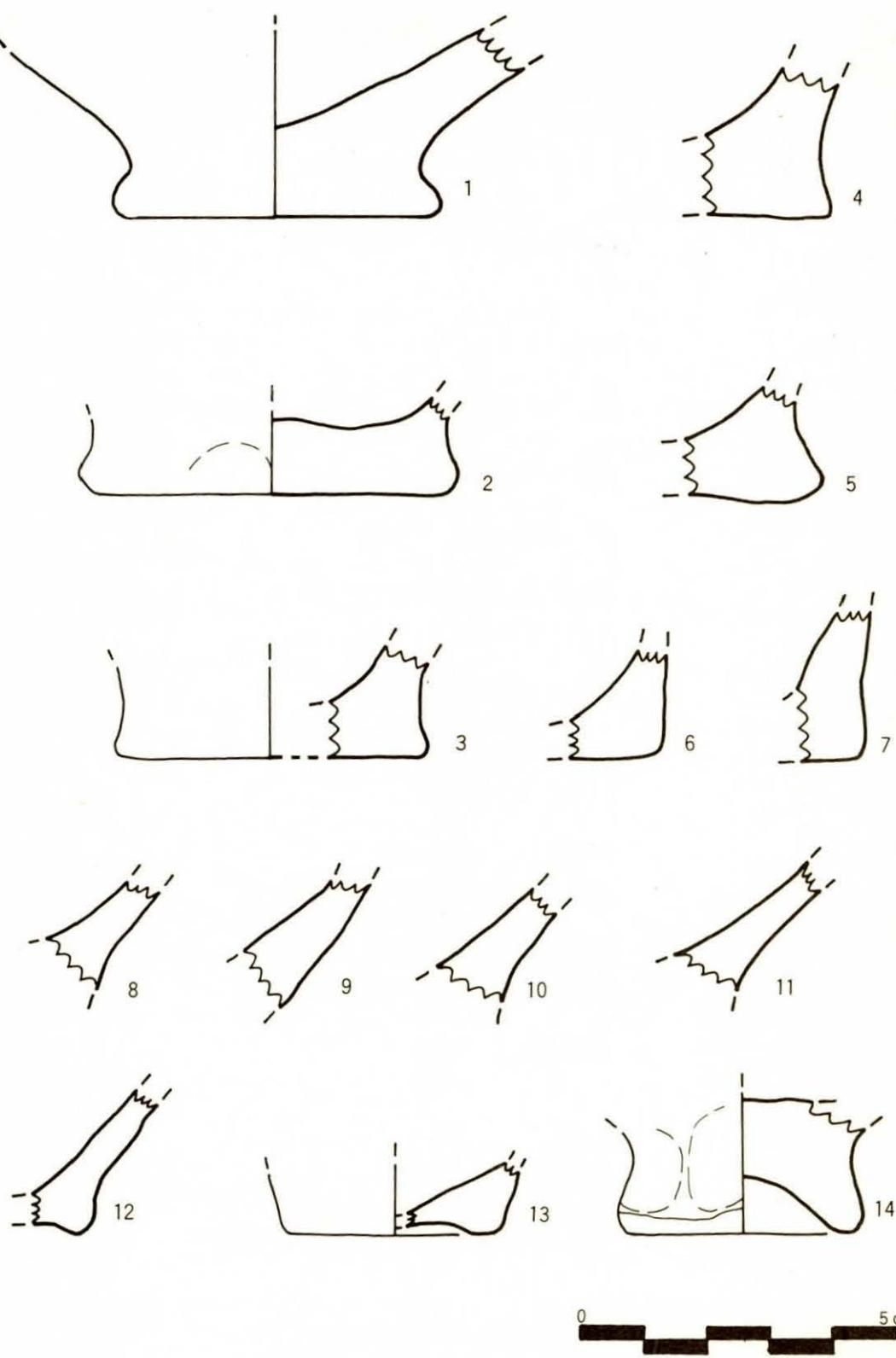
第27図 土器（有文）



第28図 土器（胴部）



第29図 土器（底部）



第30図 土器（底部）

(2) 陶磁器(青磁・白磁・染付・沖縄産陶器・擂鉢・類須恵器)

第1表 青磁・白磁観察表

図・番号	器種	器形・文様・その他の特徴	貴入
第31図1	碗	口縁部端反り内・外面にヘラ描き文	なし
〃2	〃	内面にヘラ描き文	内・外面に細かい貴入
〃3	〃	見込みに印花文	内・外面に粗い貴入
〃4	〃	内面に陽刻文	〃
〃5	〃	見込みに印花文	なし
〃6	〃	外面に蓮弁文・内面にヘラ描き文 灰色～灰白色	内・外面に粗い貴入
〃7	〃	蓮弁文を簡略化したタイプ	内・外面に細かい貴入
〃8	〃	ヘラ描き蓮弁文 年代は14C頃	なし
〃9	〃	剣先蓮弁文をヘラ描き 灰色、年代は15C中～16C前半	内・外面に粗い貴入
〃10	〃	剣先蓮弁文をヘラ描き 腰の部分に焼成時の溶着痕	〃
〃11	〃	剣先蓮弁文 灰色	〃
〃12	〃	〃	〃
〃13	〃	剣先蓮弁文を線描き 灰色、年代は15C後半～16C前半	内・外面に細かい貴入
〃14	〃	〃	〃
第32図1	〃	口縁部は雷文帯を施すタイプ と思われる。内面にヘラ描き文	なし

第32図 2	碗	雷文帯を印花 15C後半～16C中葉	内・外面に粗い貫入
〃 3	〃	雷文帯を印花	なし
〃 4	〃	口唇部が若干肥厚する	内・外面に粗い貫入
〃 5	〃	〃	なし
〃 6	〃	〃	内・外面に細かい貫入
〃 7	〃	高台内無釉	外面に粗い貫入
〃 8	小 碗	瀬戸・美濃系と思われる 明治～大正	なし
第33図 1	皿	口唇部を菱花形にカットしてい る、内面に櫛描文 年代は15C頃	内・外面に細かい貫入
〃 2	〃	〃	内・外面に粗い貫入
〃 3	〃	口唇部を菱花形にカットしてい る。内面にヘラ描き文	〃
〃 4	〃	〃	〃
〃 5	〃	見込みに印花文	〃
〃 8	〃	内底面（見込み）の釉をかきと り草花文をスタンプによって施 こしてある。	内・外面に細かい貫入
〃 9	〃	見込みに重ね積み痕	なし
〃 10	壺か瓶	外面にヘラ描き文	〃
〃 11	盤	口唇部が肥厚している	〃
〃 12	不 明	内面に印花文	内・外面に細かい貫入
〃 13	〃	〃	なし
〃 14	〃	〃	内・外面に粗い貫入
〃 15	碗	白磁の碗、見込み蛇ノ目釉ハギ 高台内無釉 年代は14C～15C	内・外面に細かい貫入
〃 16	小 壱	白磁の小壺 瀬戸・美濃系 年代は明治以降	なし

第34～36図 染付

器種は、ほとんど碗である。15C後半～16C前半の腰の部分に蕉葉文のある青花や17C後半～18Cにかけての印判手の青花が主たるものである。瀬戸系の19C後半～明治前半期の染付等も出土した。

沖縄産陶器

沖縄産の陶器は釉の施されたものと、無釉のものとに大別される。

施釉陶器は碗類がほとんどで、他に水注・カラカラ・蓋物・香炉(火取)がある。

碗類は灰釉をつけ掛けにし環元炎焼成されたもの、白化粧による白釉碗(この内に呉須による絵付けの物が含まれる)そして鉄釉を施したもののが3タイプに分かれる。無釉陶器は甕・壺などである。

第37図 灰釉碗

灰釉をつけ掛けにする為、内外底面は無釉になる。⑤は重ね焼きの為の砂目痕が顕著に見られる。⑪は胎土が他の物と違い赤褐色を呈し、瓦質の感のする碗である。

②～⑤は古我知焼の碗であるとみられる。

第38図 灰釉鉄絵碗・白釉呉須絵碗・白釉碗

①・②は灰釉の鉄絵碗、②は貫入が入る。つけ掛けにより内外底面は無釉になる。

③～⑬は白釉碗である。うち③～⑦は呉須による絵付けがされる。

⑪～⑯は8～9cmの小碗。⑪は重ね焼の為の溶着痕が残る。⑫・⑬は胎土が暗褐色を呈し絵付けは2色の発色をする。この3点は白化粧の上に透明度の高い釉がかかる。いずれも見込み部は蛇ノ目釉剥ぎを行い疊付は無釉になる。⑭以外は貫入がみられる。

第39図 鉄釉碗・蓋物・カラカラ・香炉(火取)

①安定感のある鉄釉碗で見込み部は蛇ノ目釉剥ぎになる。釉剥ぎ部分と疊付に白色物がみられる。高台内も鉄釉が施される。

②・④は鉄釉をつけ掛けにより施してある。③・⑤は外面鉄釉、内面淡緑色の釉が施される。⑥鉄釉をつけ掛けにし内底面に薄い鉄釉で1.2cm幅の圈線と、見込みに4.5cm幅の斑点状の鉄釉が残る。疊付けに白色物がみられる。

⑦鉄釉のカラカラ・⑧灰釉香炉(火取)、釉色は黄褐色で透明感がある。

第40図 水注・甕・壺・その他

①鉄釉水注、外面は底部脇まで施釉され口縁の一部を除き内面も釉が施される。

②搔落し技法による物で、浮き出た模様上は黒褐色を呈する。

③口唇部の残存部に2ヶ所、黒くススの様な物が付着する。⑤外面の器色が一定しない。櫛目による波状の模様がめぐる。⑧調整が雑である。外面半分にクワーディーサー色が出る。内底見込みに同様の釉が落ちている。

第41図 陶質土器

①～④素焼きの通称サークと呼ばれる鍋と鍋の蓋である。それぞれ対になる物と思われる。④は内面に黒いものが残る。

第42図 捜鉢

①は、口縁端が丸くおさまり、力キ目は間隔を開けて施こされ溝数は8本である。注口があり、口経30.3cmを測る。②・③は、口縁端が強く回転横ナデされ端面が押潰されて肥厚し、端面(下縁の断面)が尖る。力キ目はやや狭ばまる。口縁部上面は水平である。④・⑤は、口縁端が丸くおさまり、力キ目は間隔を開けて施こされ溝幅は1.0mm、④は溝数6本で、⑤は8本である。⑥・⑦・⑧は、口縁部下に屈曲部をもたないタイプで、口縁部が外に長く張り出し、口縁部上面には一状の凹線がめぐり、水平で端部は四角と丸くおさまる。力キ目は重複して施こされ、胴部は丸みをもって緩やかに立ち上がるタイプ。⑨・⑩・⑪は底部の資料である。

第43図 類須恵器

3点のみの出土である。③は底部。

(3) 石器類 第44・45図

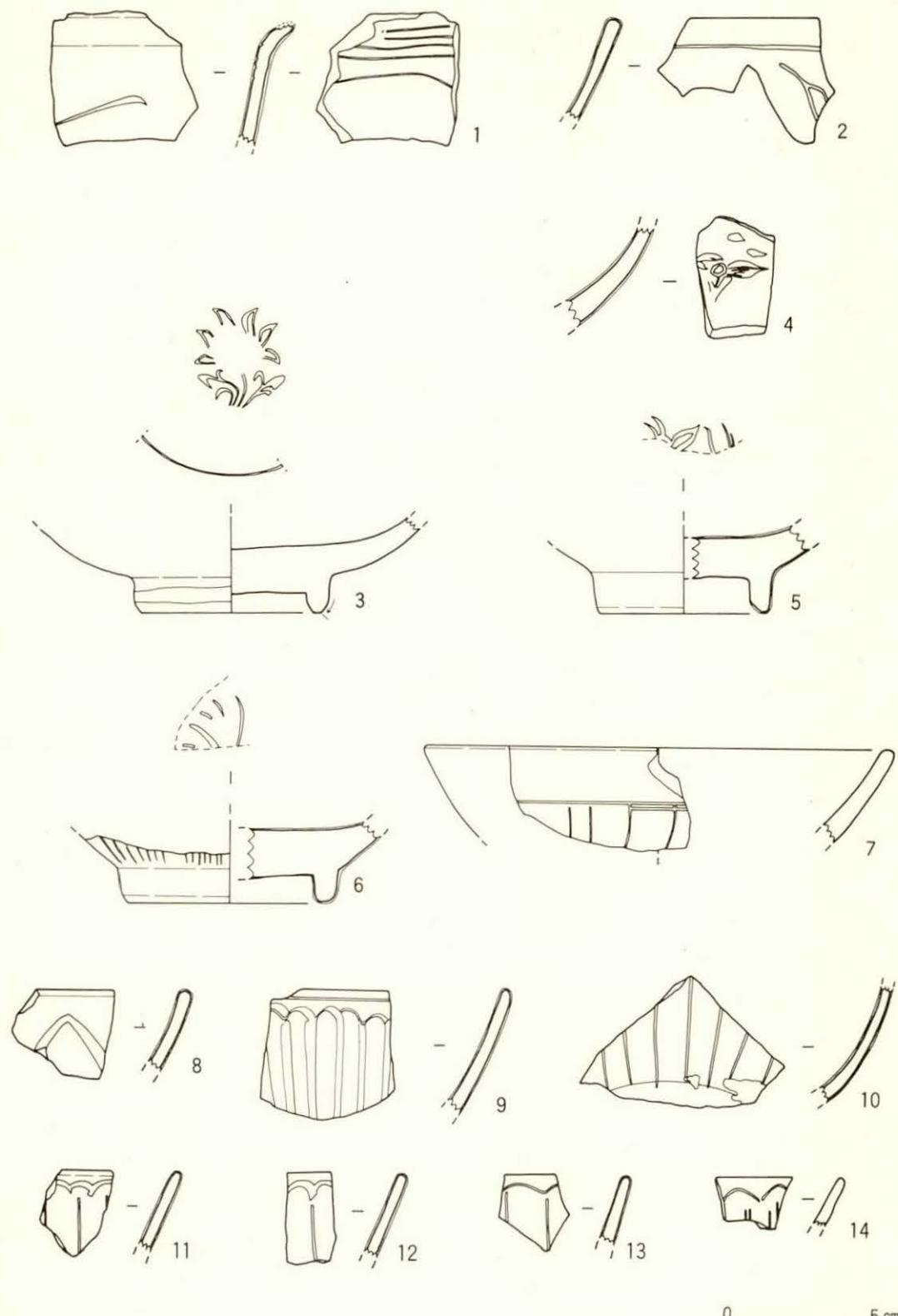
砥石4点、磨石1点、不明6点が得られた。

第46図 その他の土器

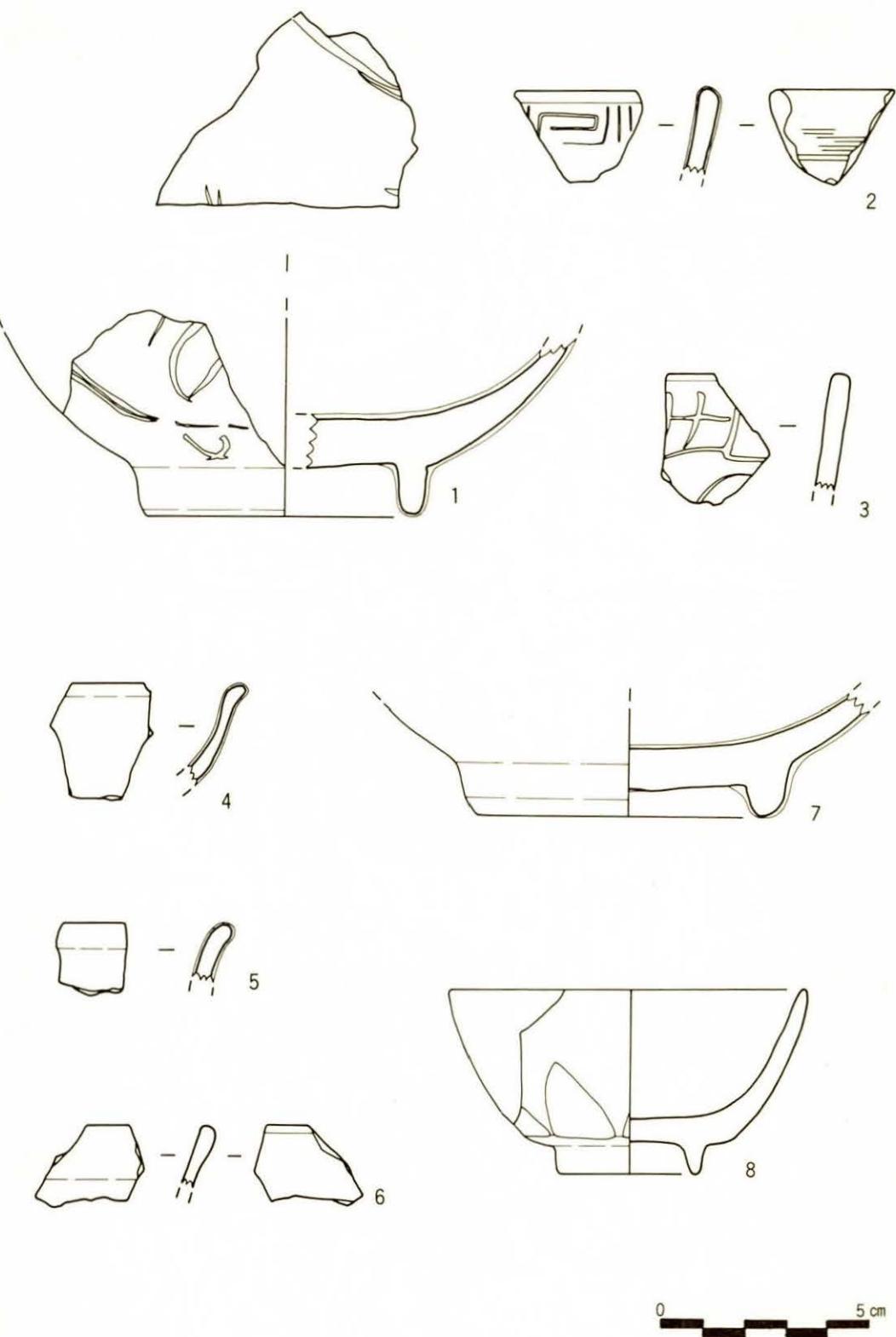
1点のみの出土。器厚が0.8mmと他の後期土器より厚い。貝殻の破片が混和剤として使われている。焼成は良くない。

(4) その他 第47図

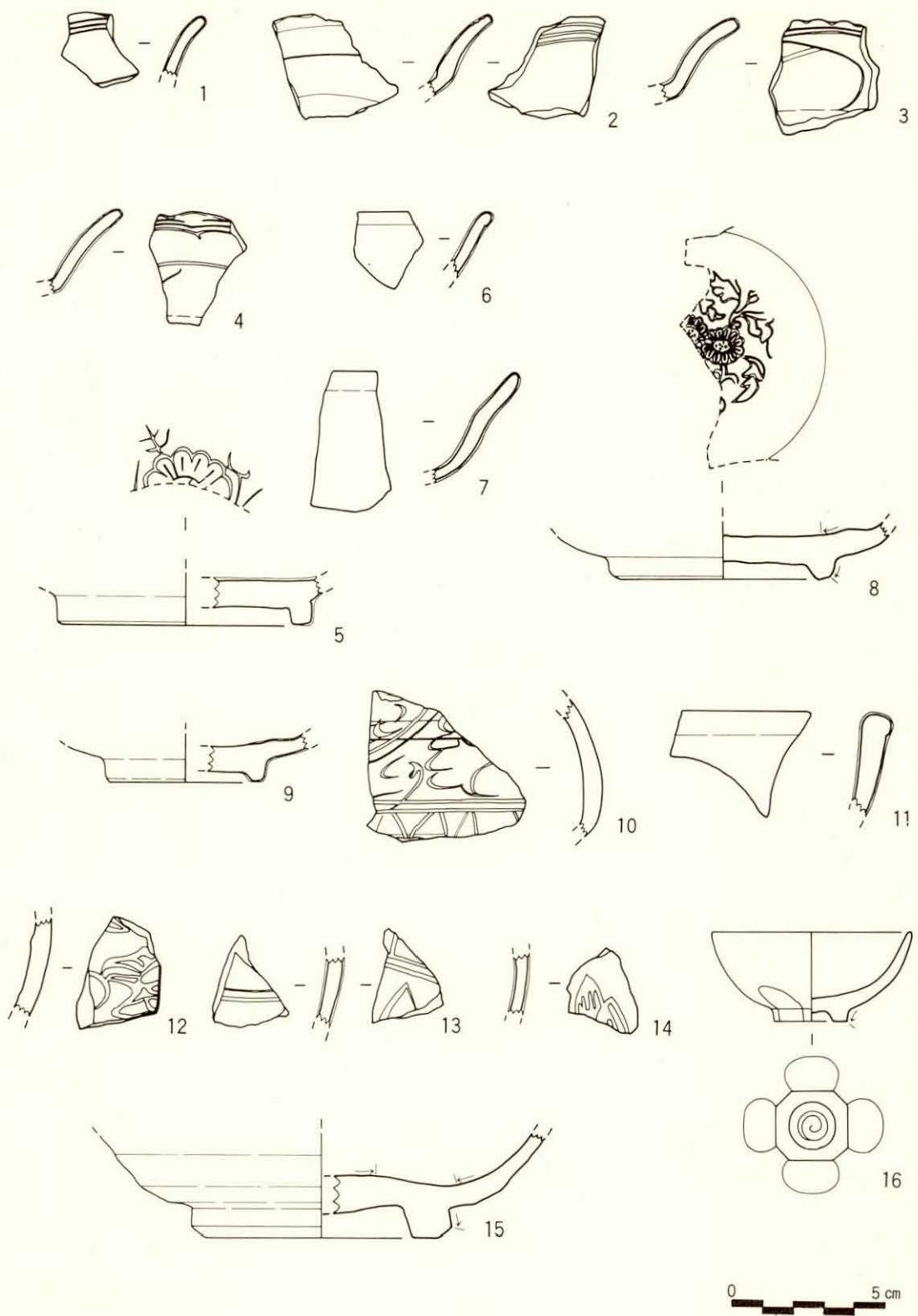
①～③は石製のキセルの雁首である。④は陶製。⑤は石製の硯。



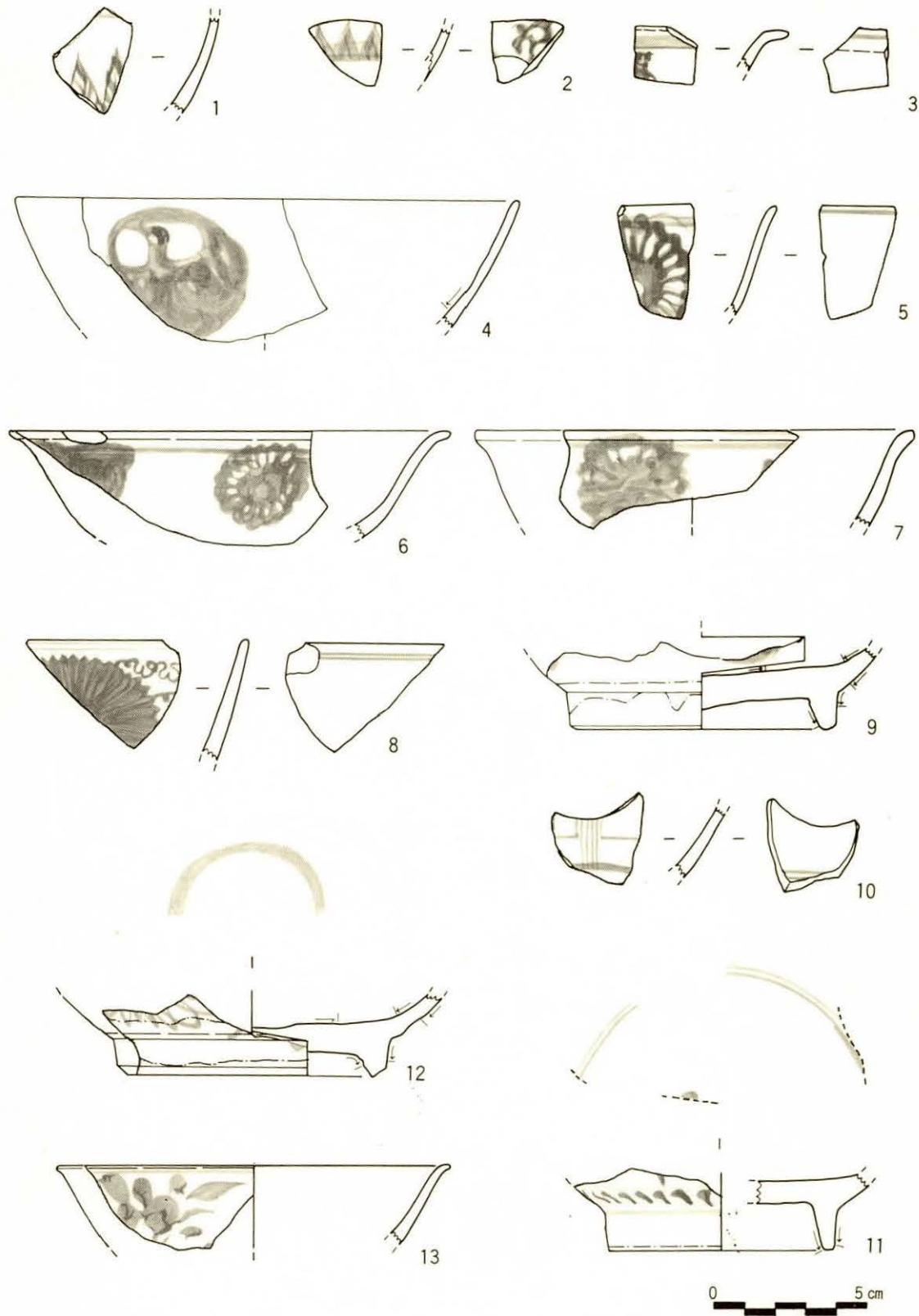
第31図 青磁



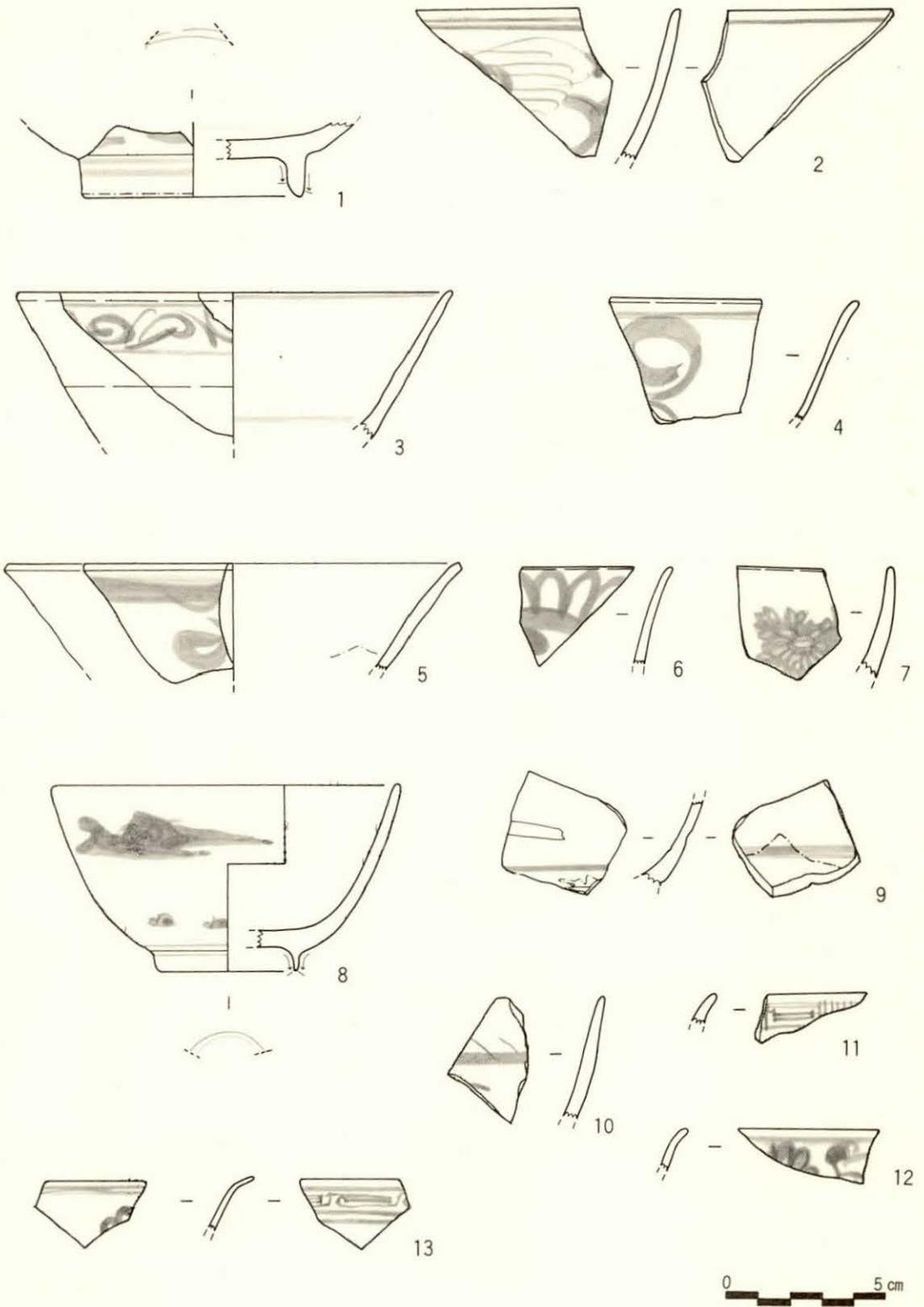
第32図 青 磁



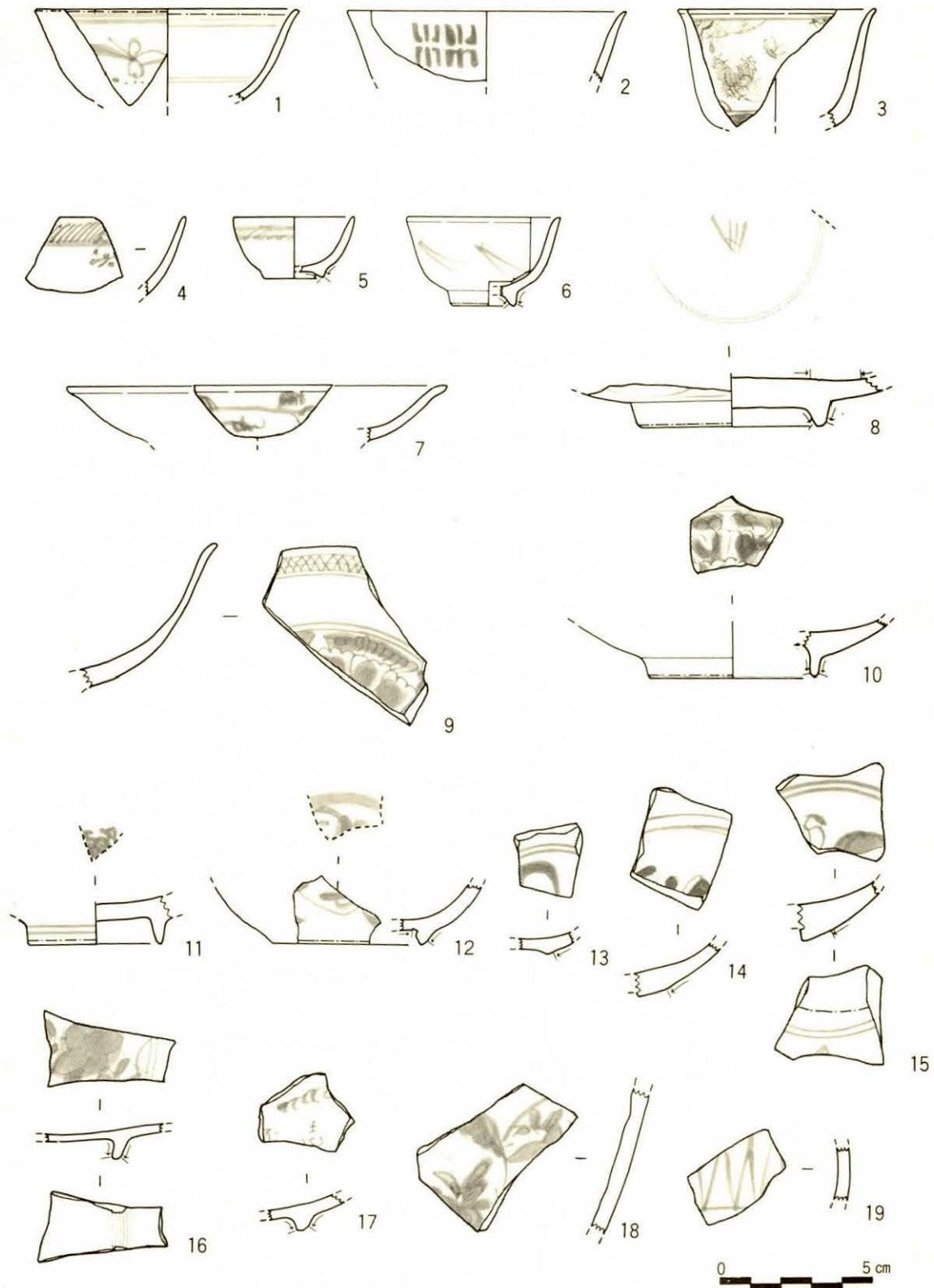
第33図 青磁・白磁



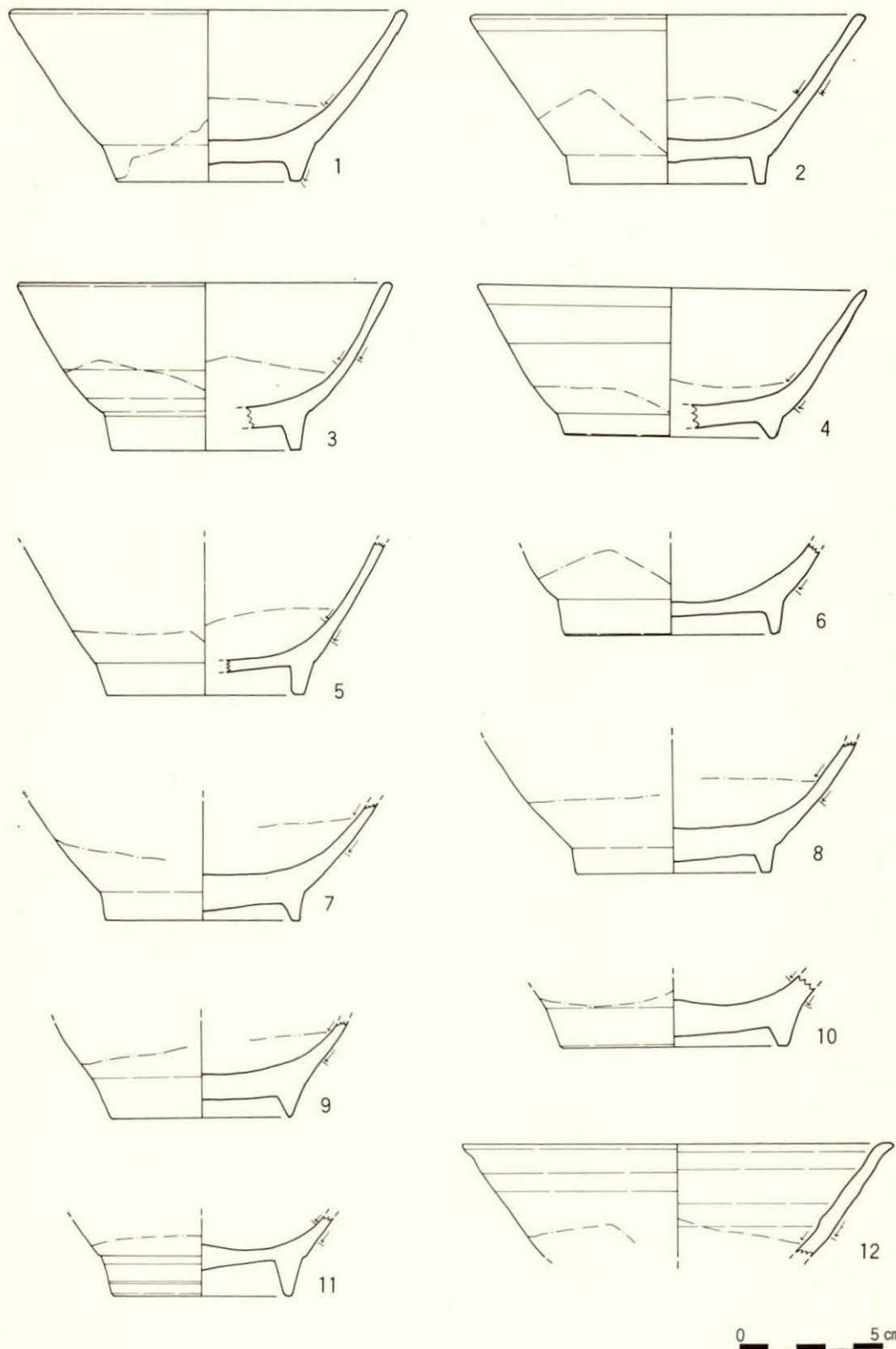
第34図 染付



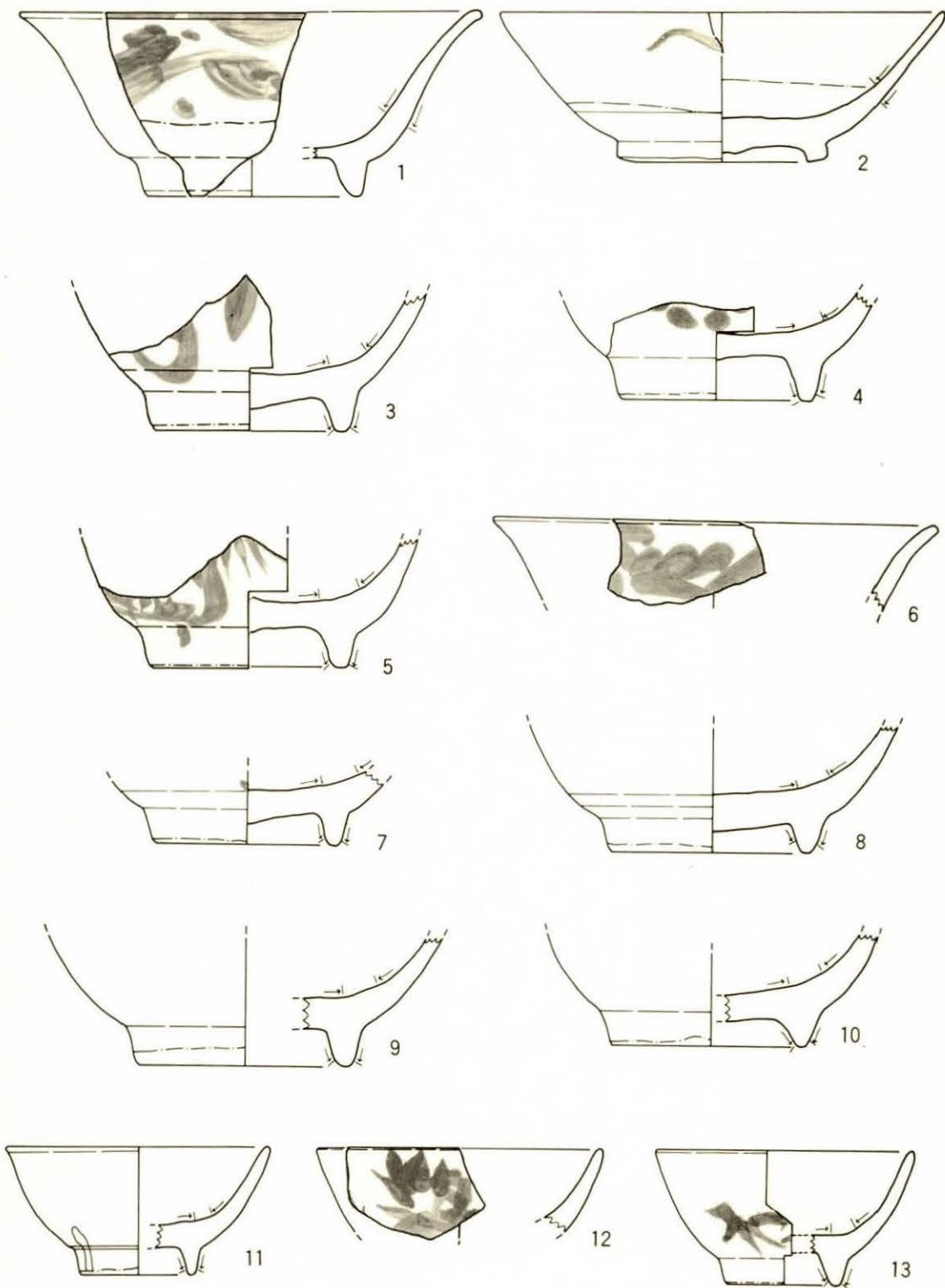
第35図 染付



第36図 染付

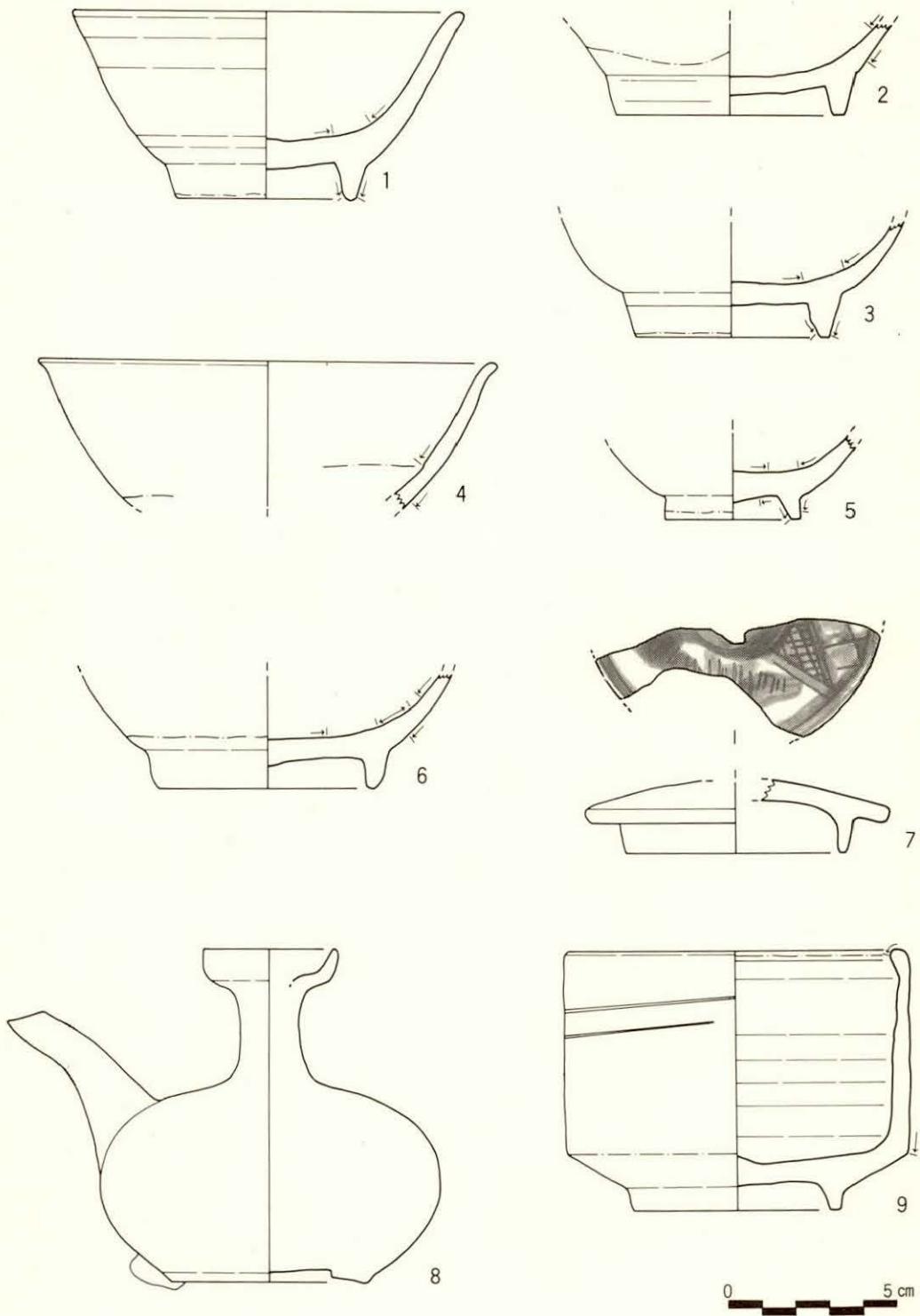


第37図 沖縄産陶器

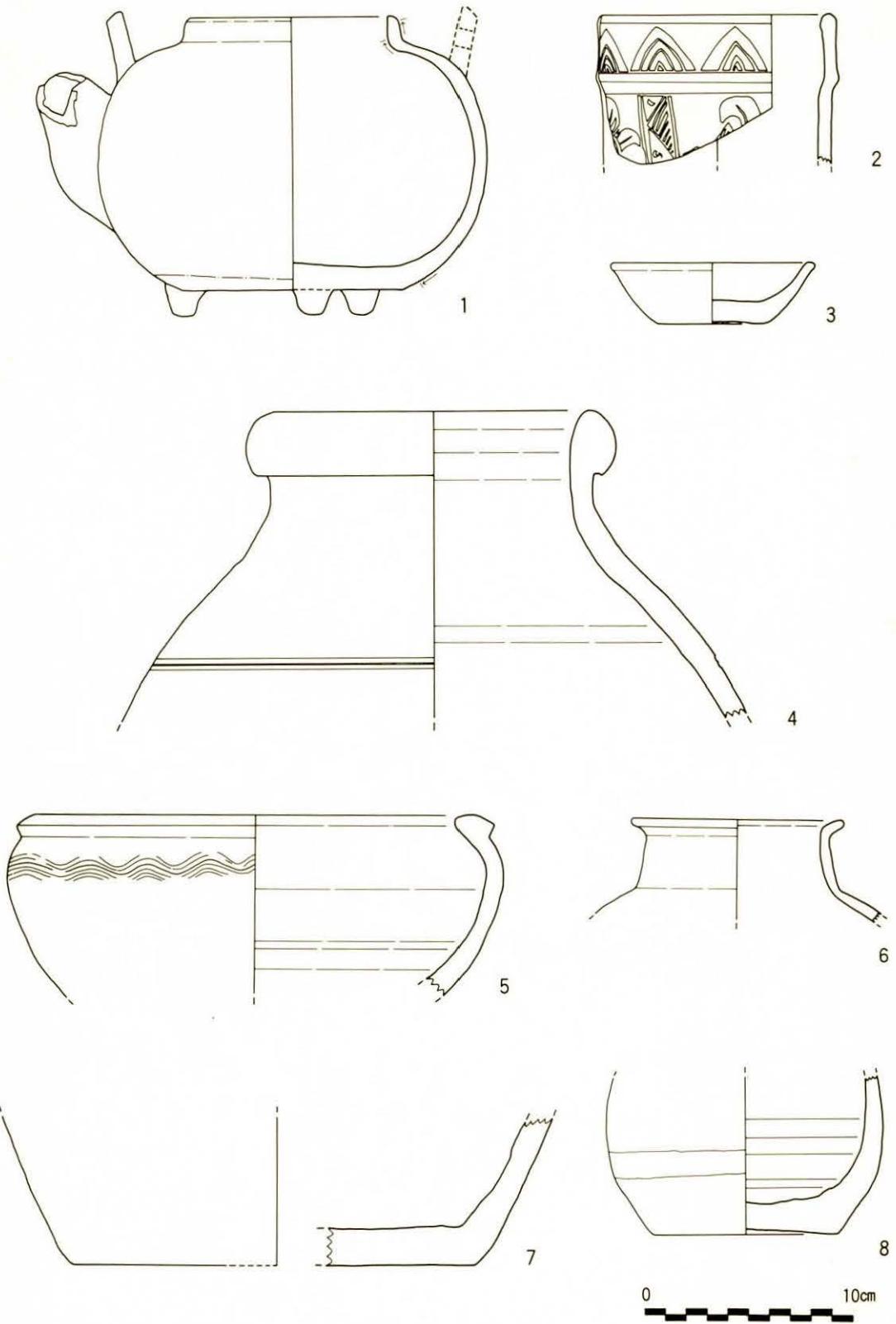


第38図 沖縄産陶器

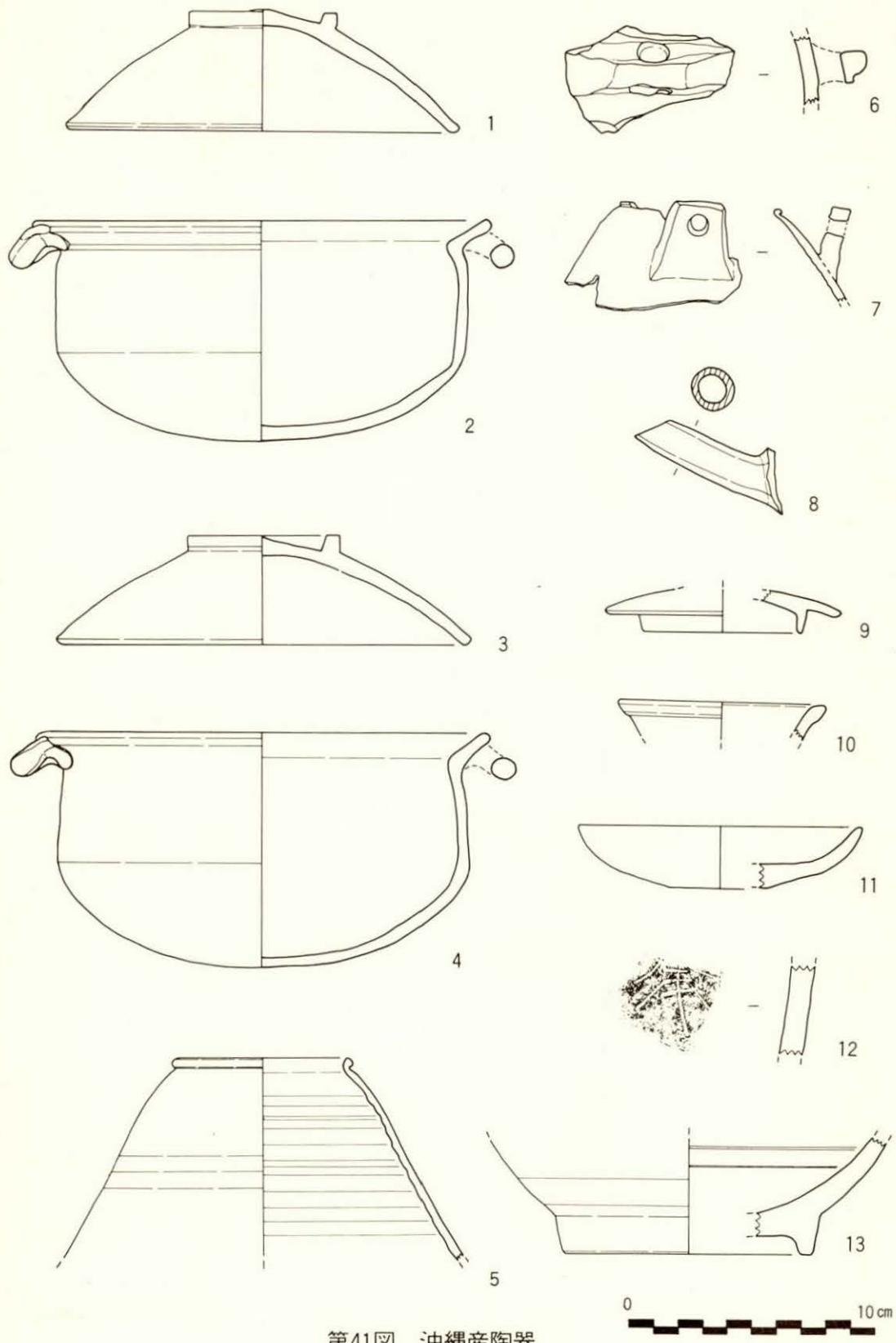
0 5 cm



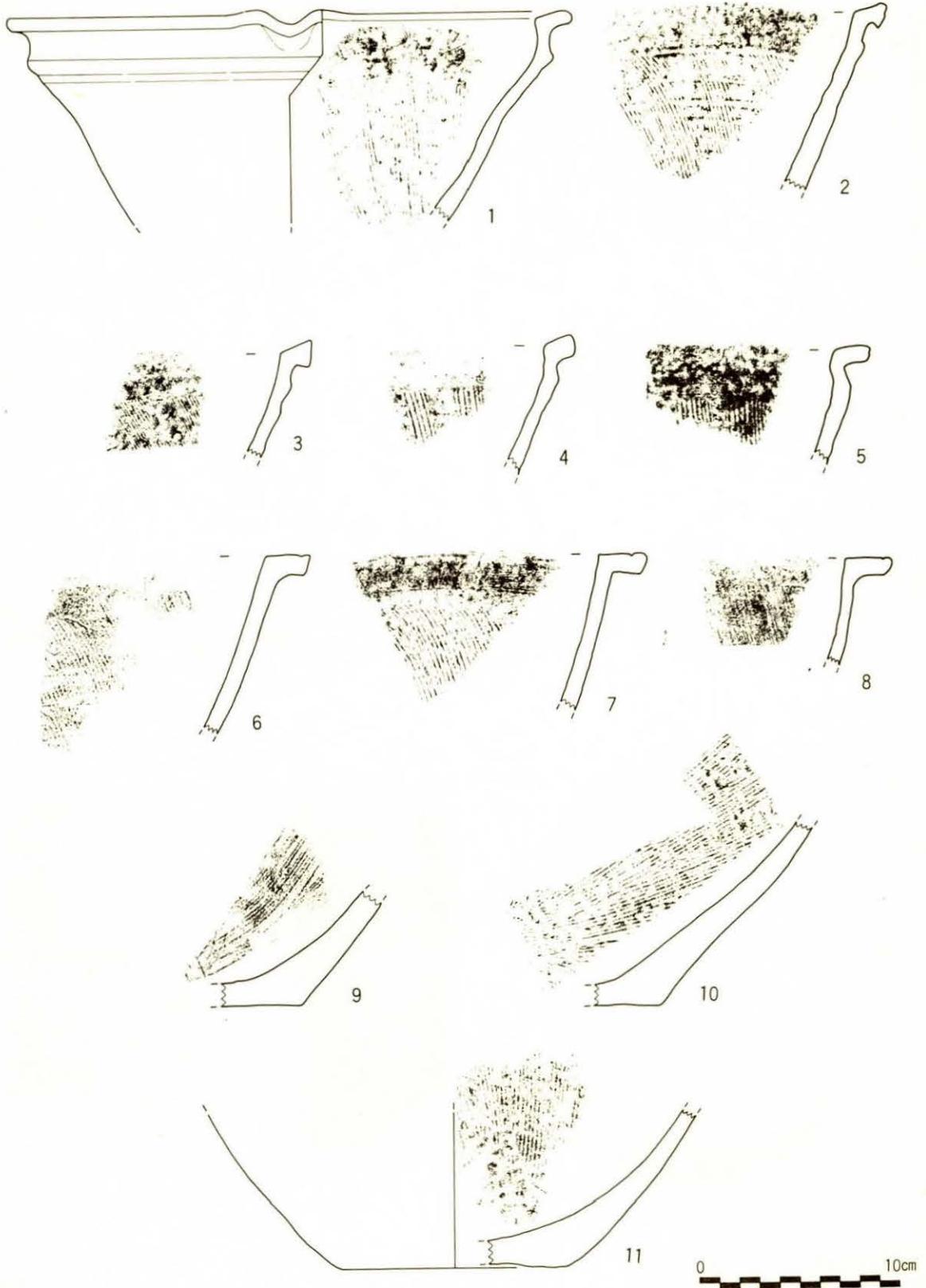
第39図 沖縄産陶器



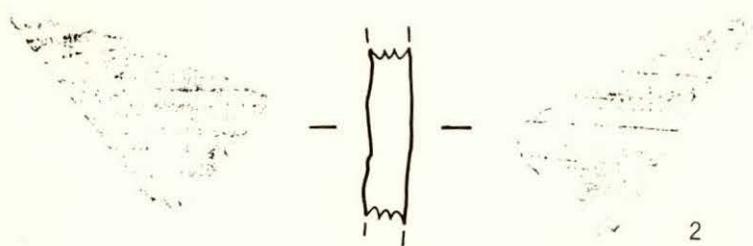
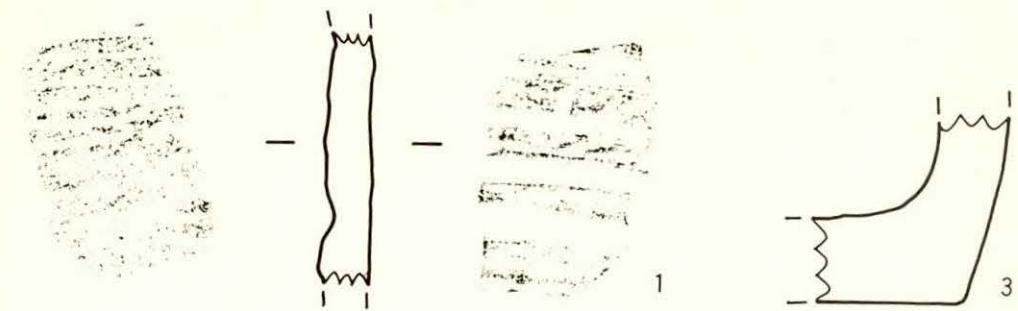
第40図 沖縄産陶器



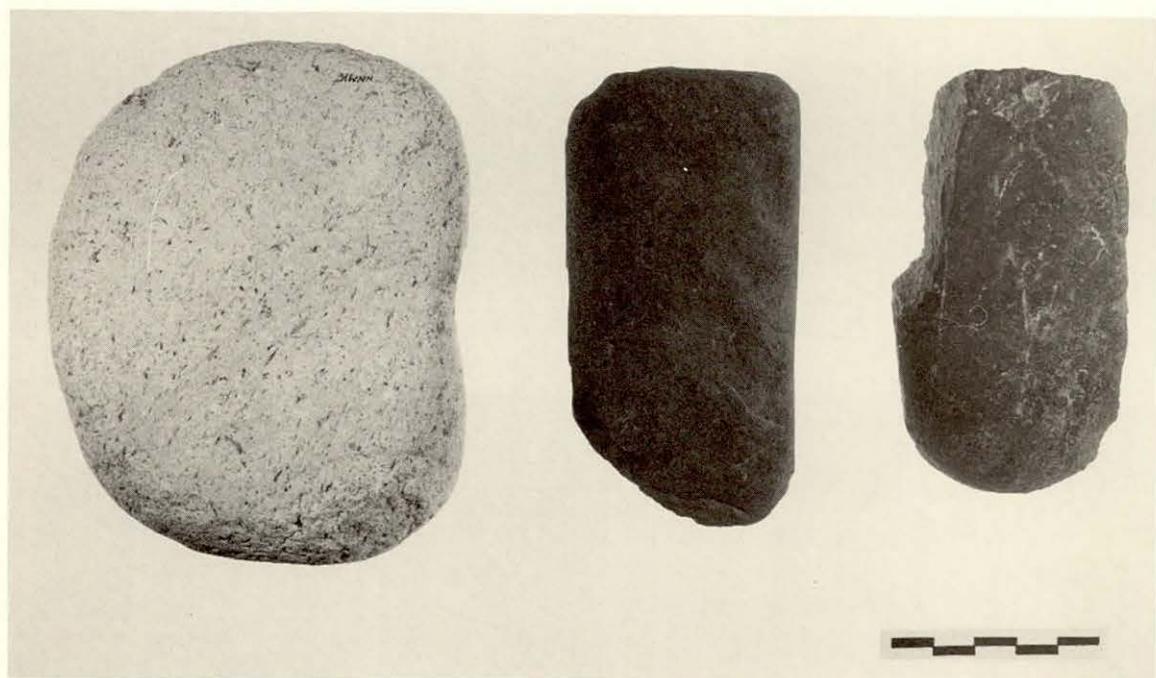
第41図 沖縄産陶器



第42図 擂鉢



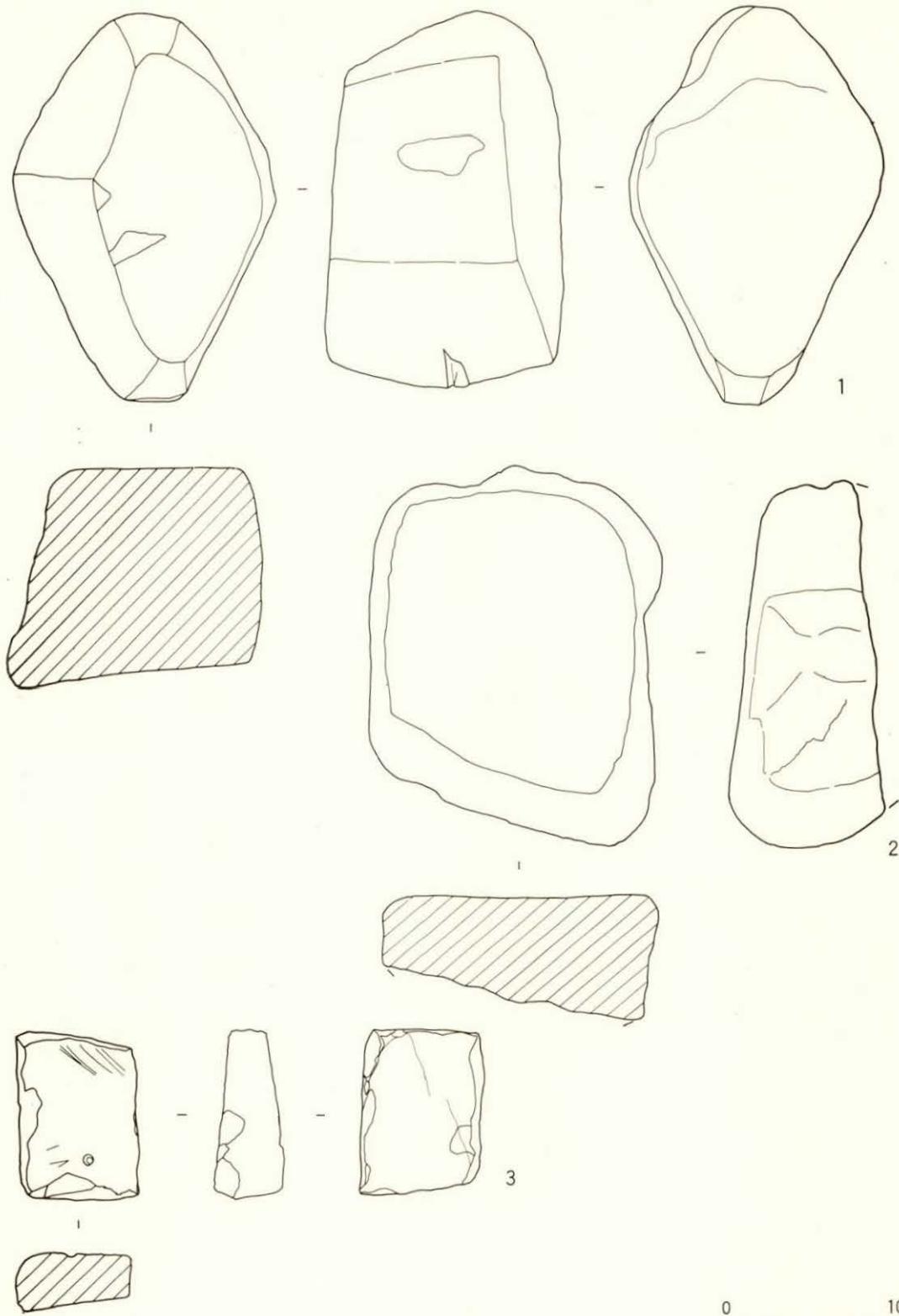
第43図 類須恵器



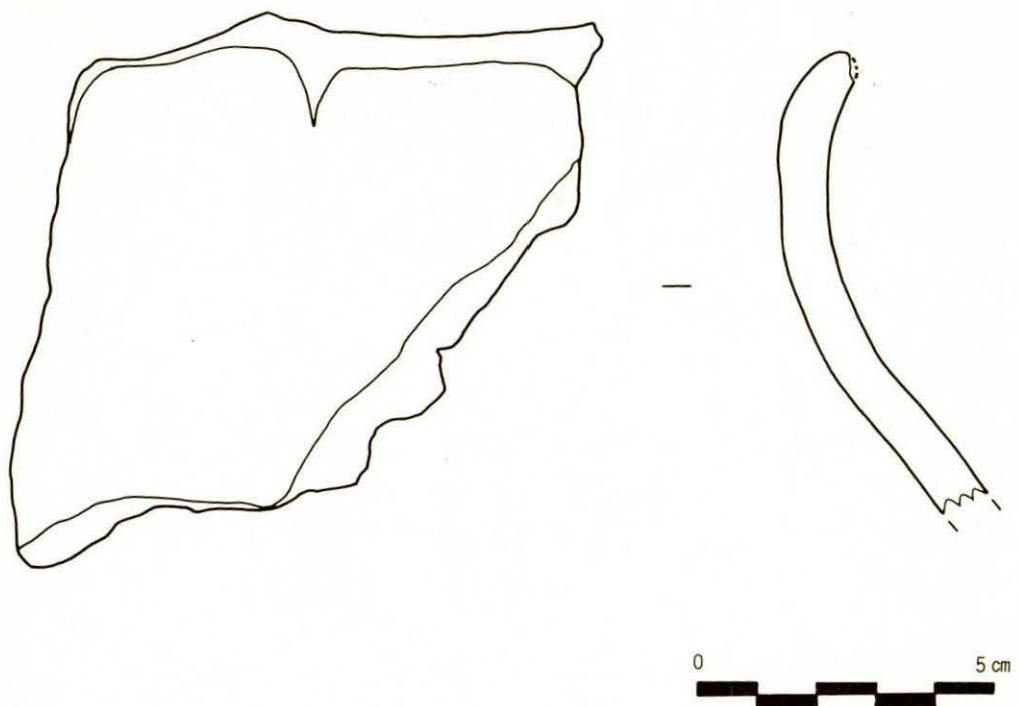
PL-3 石 器



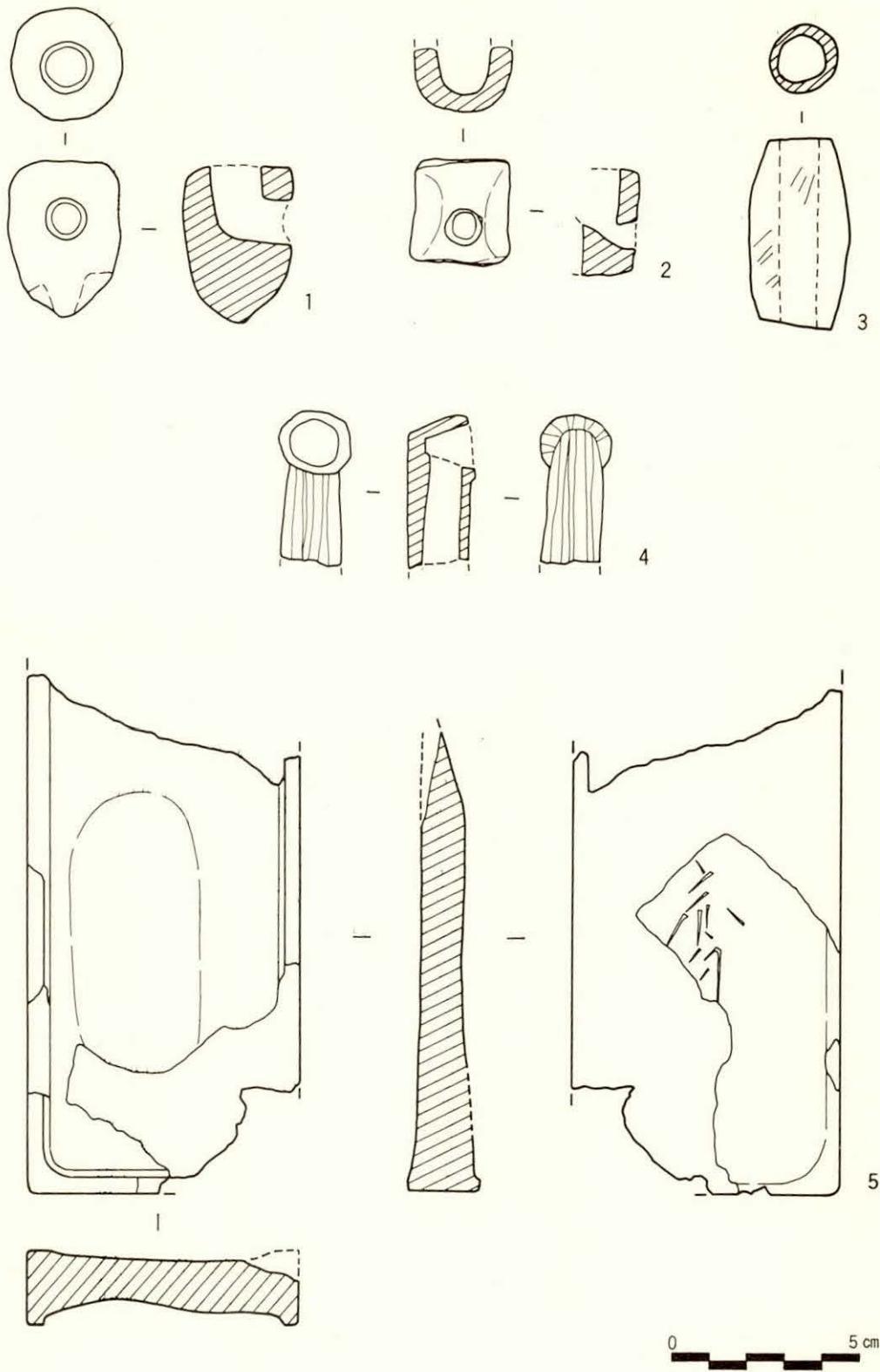
第44図 石 器



第45図 砥石



第46図 土 器 (近世)



第47図 キセル・錘・硯

(5) 自然遺物

第2表 貝類集計表(1次)

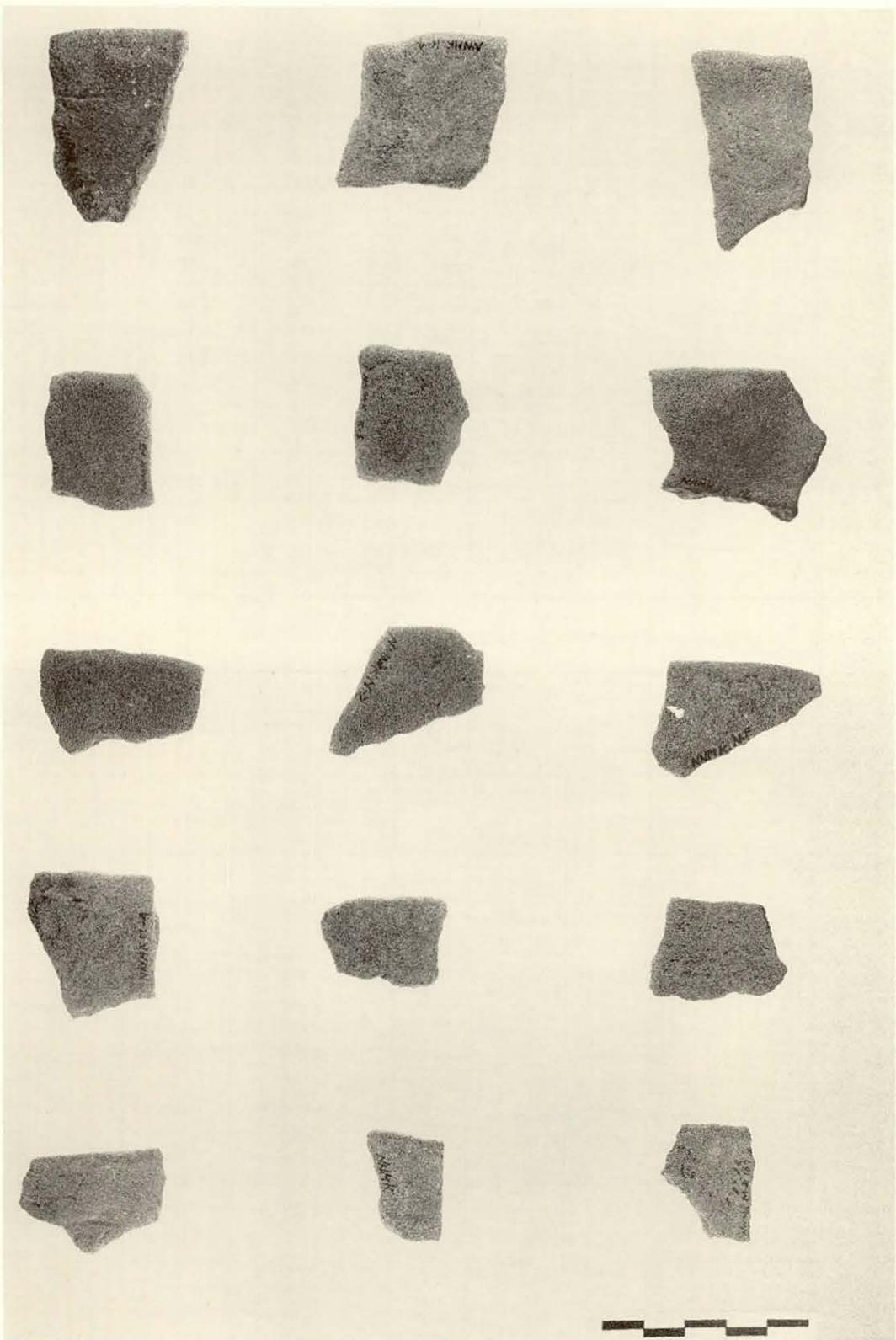
貝種	地区名	攢乱層									地区不明	合計	その他
		SE	ES	NW	NE	EN	N	SW	WN	WS			
イトマキボラ科	イトマキボラ	4	2	2	8	1	3	9		2	10	41	
	ナガイトマキボラ			1								1	
	チトセボラ	1									2	3	
ツキガイ科	カブラツキガイ			1			1	1				3	
	ウラキツキガイ		2	1							1	4	
	アメリカヒメツキガイ										1	1	
アマオブネガイ科	ヒメカノコガイ				1							1	
	リュウキュウアマガイ	1		2							1	4	
	アマオブネガイ							1				1	
	ヒラマキアマオブネ	1										1	
	シマカノコ	6									2	8	
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	7	6	5	4		4	6	1		53	86	
	オオシマカニモリガイ					1						1	
	タケノコカニモリガイ							1			1	2	
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	1	3		3	8	3				1	19	
タカラガイ科	コモンダカラガイ	1	1		1			2			4	9	
	ハナビラダカラ	1						1	1		2	5	
	チャイロキヌタガイ										1	1	
	キイロダカラガイ							1			1		
	ヤナギシボリダカラガイ										1	1	
	ヒメヤクシマダカラガイ				1						1		
	ヒメホシダカラ	2		1				2			4	9	
	シボリダカラガイ										1	1	
	タカラガイ			1							1		
ニシキウズガイ科	ヘソアキエビスガイ										2	2	
	コシダカカンガラ	1	1					1			3		
	ギンタカハマガイ	1		1				1			3	6	
	ニシキウズガイ				1						1		
	ムラサキウズガイ										1	1	
	サラサバティ	2		5		3	1	1	2	1	15		
	クボガイ										1	1	
	クマノコガイ	1			1	1					3		
キクザルガイ科	カネツケザル	1	3	1		1	1	1	1	1	5	13	
ウミニア科	マドモチウミニナ	2										2	
	キバウミニナ	2			1	1	7	2			12	25	
オニコブシガイ科	オニコブシ				2			1				3	
	コオニコブシガイ	1				1	1				5	8	
タマガイ科	ウスイロタマツメタガイ							1				1	
	ネズミガイ										1	1	
	クリイロリスガイ	1	2					1			2	6	
	クチグロタマガイ				1						1		
	ソメワケグリ								1		1		
	リスガイ							1			1		
	リュウキュウマスホガイ			2							2		
フジツガイ科	ホラガイ		1								1		
	ツブリボラ										1	1	
バカラガイ科	リュウキュウバカラガイ										1	1	

	ベニハマグリ			2						2	
ムシロガイ科	オリイレヨフバイ			1						1	2
ナミマガシワガイ科	シマナミマガシワガイモドキ			1						6	7
ヤツシロガイ科	トキワガイ	1								1	2
シオサザラミガイ科	リュウキュウマスオガイ	1								1	2
トゲカワニナ科	タケノコカワニナ	2	1							6	9
アクキガイ科	オオガンゼキボラ									1	1
	シロイガレイシガイ	1									1
	センシュガイ						1				1
ザルガイ科	リュウキュウザルガイ	6	6	4	14	1	8	4	1	19	63
	トマヤエガイ				1						1
	カワラガイ	1	2	1	5		2			1	6
シャコガイ科	ヒメジャコ	15	6	4	6	1	5	12	7	3	33
	ヒレジャコ	8	2		3	1	1	1		2	1
	オオシャコガイ										1
	シラナミガイ			2	9					3	17
	シャコガイ							1			6
	シャゴウガイ					1		1			2
シジミガイ科	シレナシジミ	30	12	6	36	8	6	13	10	4	97
イモガイ科	サヤガタイモ	8		2	4	3		6	19		4
	アンボンクロザメ	8	7	1	6		2	1	3	1	11
	ナンヨウクロミナシ	10									5
	ヤナギシボリイモ			5	2			3			54
	コモンイモ	2		1	2						5
	メノウイモガイ				1						1
	ハルシャガイ				1						1
	ヒメダカヤサンミナシガイ										1
	アカシマミナシ			6				1	12		12
	イボシマイボ				2			9		2	13
マルスダレガイ科	オオヌノメガイ										1
	ヌノメガイ	5	8	1	6	2		5		2	12
	オイノカガミガイ					1		1			9
	アラスジケマンガイ	14		5	15	2	6	12	4		42
	サヤガタイモ	1	1		5			1		3	46
	ダテオキシジミ	1	1		1		1			1	3
ソデボラ科	マガキガイ	119	90	37	184	17	42	72	18	10	7
	オハグロガイ	1			3	4					3
	クモガイ			1							11
	ゴホウラ										2
	オハグロガキ	2	1		14			5			10
	ネジマガキ	1			1		1				3
	ギンタカハマ	7	1		2				1		11
リュウテンザザエ科	ハリザザエ										1
	スガイ	1			1						2
	カンギクガイ			2			1				2
	ヤコウガイ(ふた)	2	2		1				1		2
	チョウセンザザエ	6	2	1	3		2			1	9
	コシダカザザエ							3			3
	メングガイ	41	18	2	84	2	5	5		9	45
ウミギクガイ科	ヤスリメンガイ	9	1	3	4		1	4			8
	ウミギクガイ	9	1	6	1		10	2	1		6
	ヤコウメンガイ			1							1
	オナジマイマイ科	オナジマイマイ		1		1	6	5	1	3	17

タマキビ科	ウズラタマキビ				1			1				
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ						6	6				
	コノハザクラ				1			1				
スイショウガイ科	クモガイ	1	1	1	1	1	1	6				
	ネジマガキガイ				1			1				
ツタノハガイ科	オオベッコウガサガイ					1	1	2				
	トラフザラガイ		1					1				
エゾバイ科	シライトイマキバイ	1					1	2				
	ゾウゲバイ				1			1				
オリイレヨフバイ科	オリイレヨフバイ				1			1				
タケノコガイ科	タケノコガイ				1			1				
クマダキガイ科	ホンカリガネガイ						1	1				
	セキトリフデシャワガイ			1				1				
タマキガイ科	ソメワケグリ			1				1				
オキニシ科	オオナルトボラ						1	1				
	シワオキニシ	1						1				
セコバイ科	セモカケセコバイ						2	2				
フデガイ科	オニノキバフデガイ						1	1				
フネガイ科	リュウキュウサルボウガイ	14	21	14	38	4	3	41	12	7	167	321
	ベニエガイ										1	1
チドリマスオガイ科	チドリマスオガイ										1	1
マクラガイ科	ジュドウマクラガイ										1	1
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ									2	2	

第3表 貝類集計表(2次)

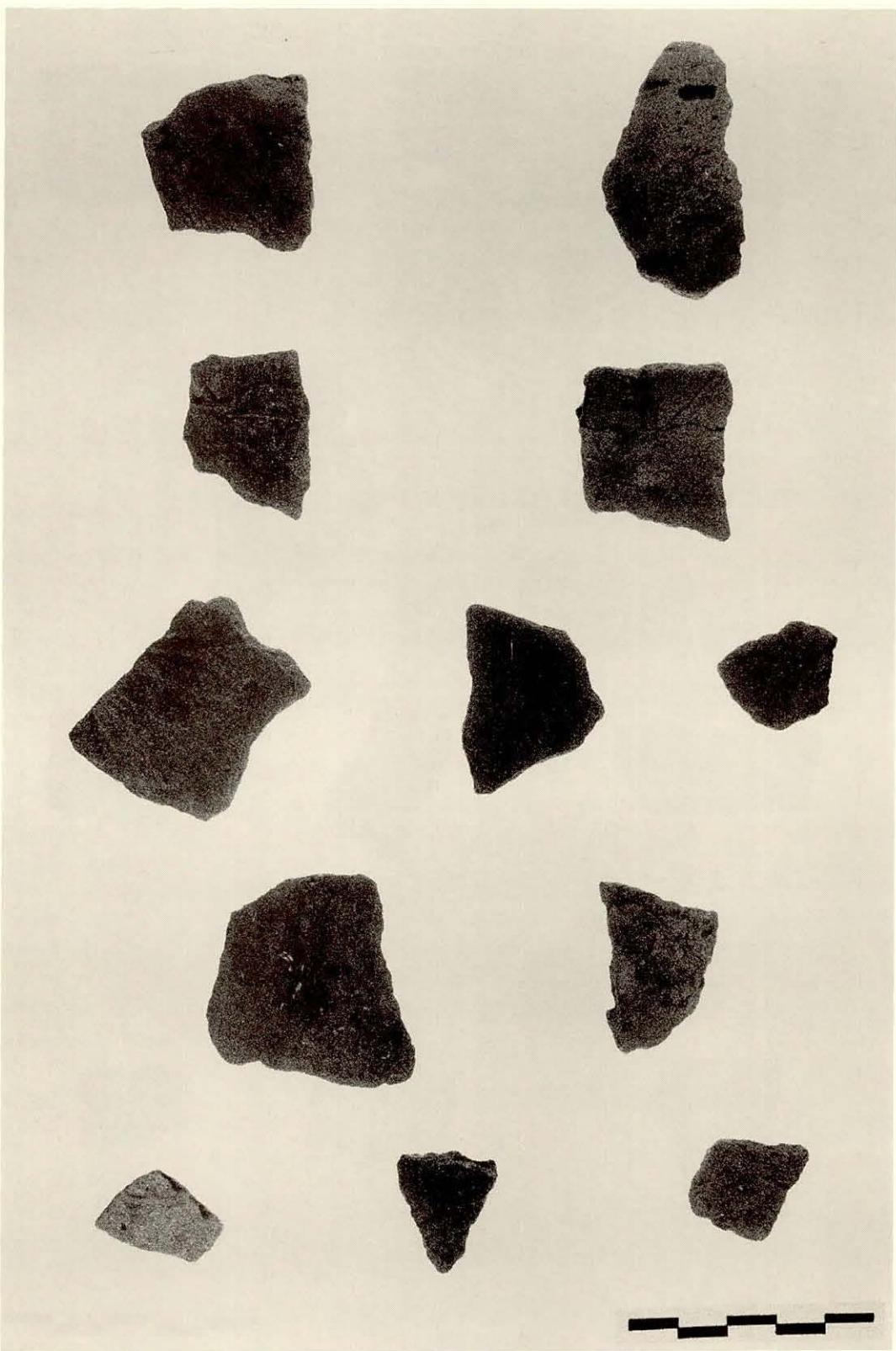
貝種	地区名	層							合計	その他
		H-1	H-3	M-2	M-3	M-5	N-2	N-4		
ソデツボラ科	マガキガイ	1	11			1			13	
フネガイ科	リュウキュウサルボウガイ		2	5	2		2	2	13	
ザルガイ科	カワラガイ	1						2	3	
	リュウキュウザルガイ						4		4	
マルスタレガイ科	ダテオキシジミ	1				1			2	
	マルオミナエシ		1						1	
	ヌノメガイ	1							1	
イトマキボラ科	イトマキボラ	1	1						1	3
シジミガイ科	シレナシジミ		1	6	1		2	2	12	
シャコガイ科	シャコガイ								1	1
	ヒメジヤコ	2	1						1	4
	シラナミ		2						2	
	シャゴウガイ			2					2	
イモガイ科	サヤガタイモ				2				2	
	アンボンクロザメ							1	1	
タカラガイ科	ヒメホシダカラ			1					1	
	コモンダカラ					1			1	
	ホシダカラガイ	1							1	
スイショウガイ科	マガキガイ						12		12	
	クモガイ	1			5				6	
リュウテンサザエ科	ヤコウガイ(ふた)			1			2	1	4	
オニコブシ科	コオニコブシ				1				1	
ウミギクガイ科	ウミギク		3	1					4	
バカラガイ科	ベニハマグリ		1	1					2	
フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ							1	1	



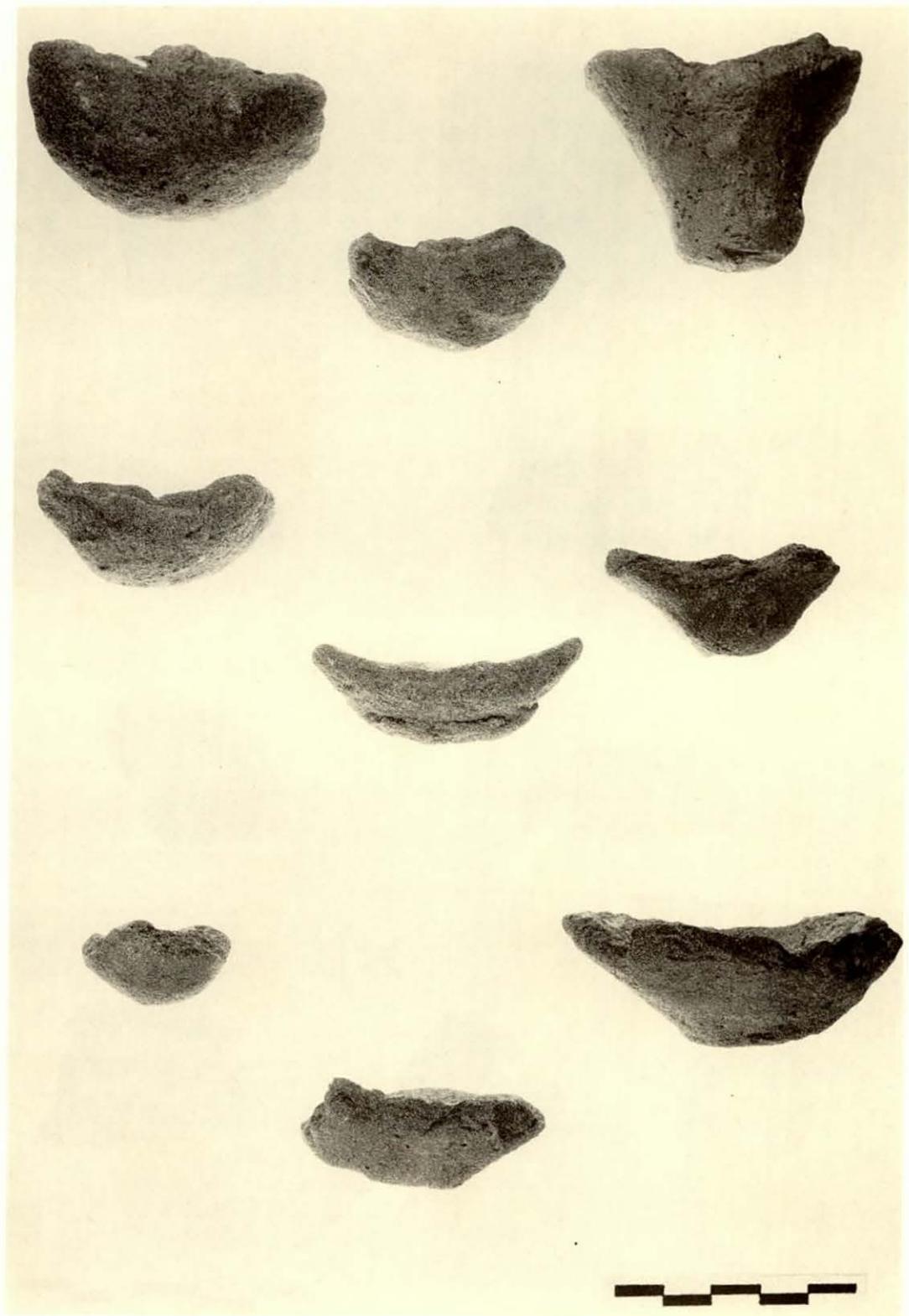
PL-4 土 器(無文口縁)



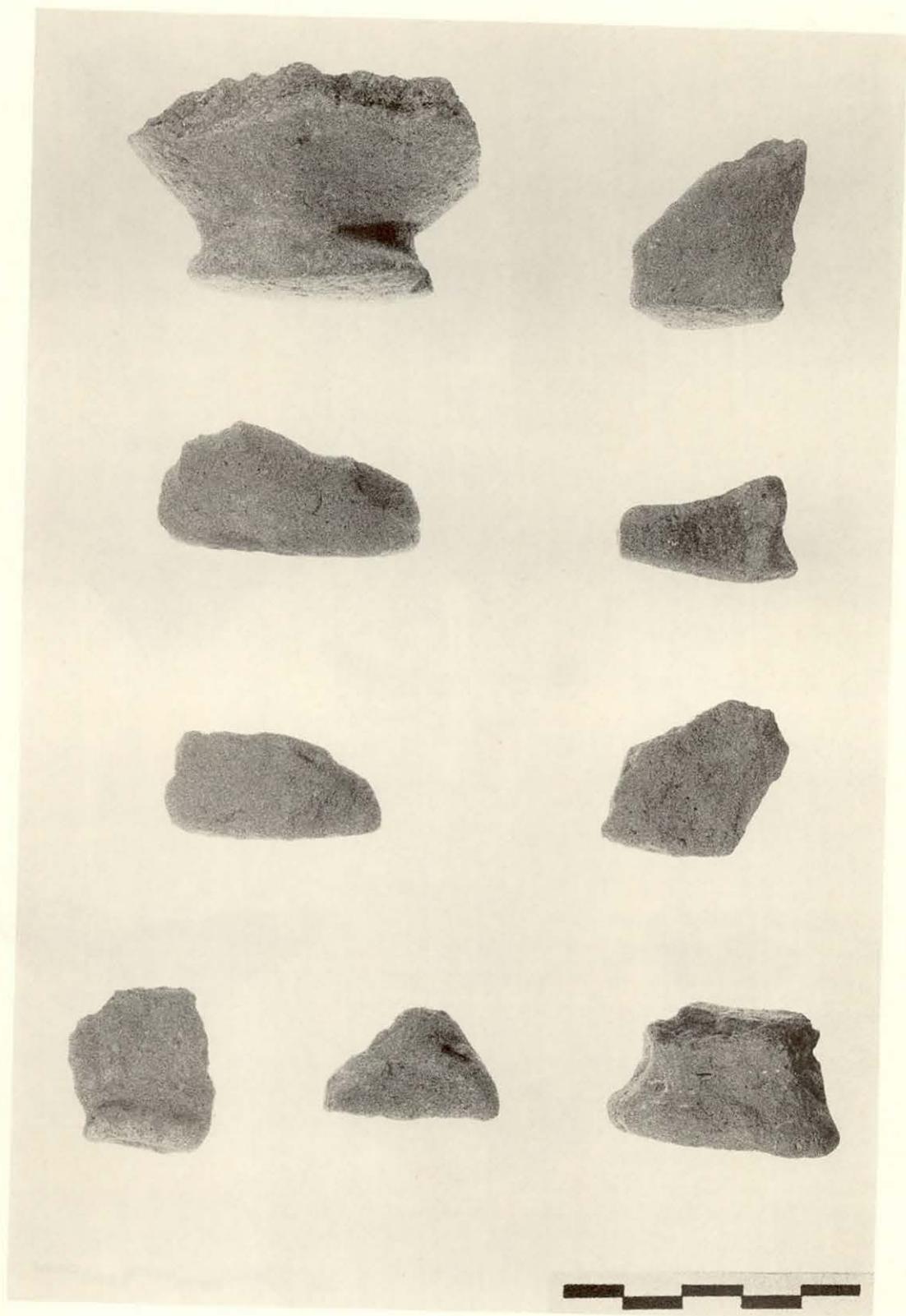
PL-5 土 器 (有文)



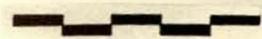
PL-6 土 器 (有文)



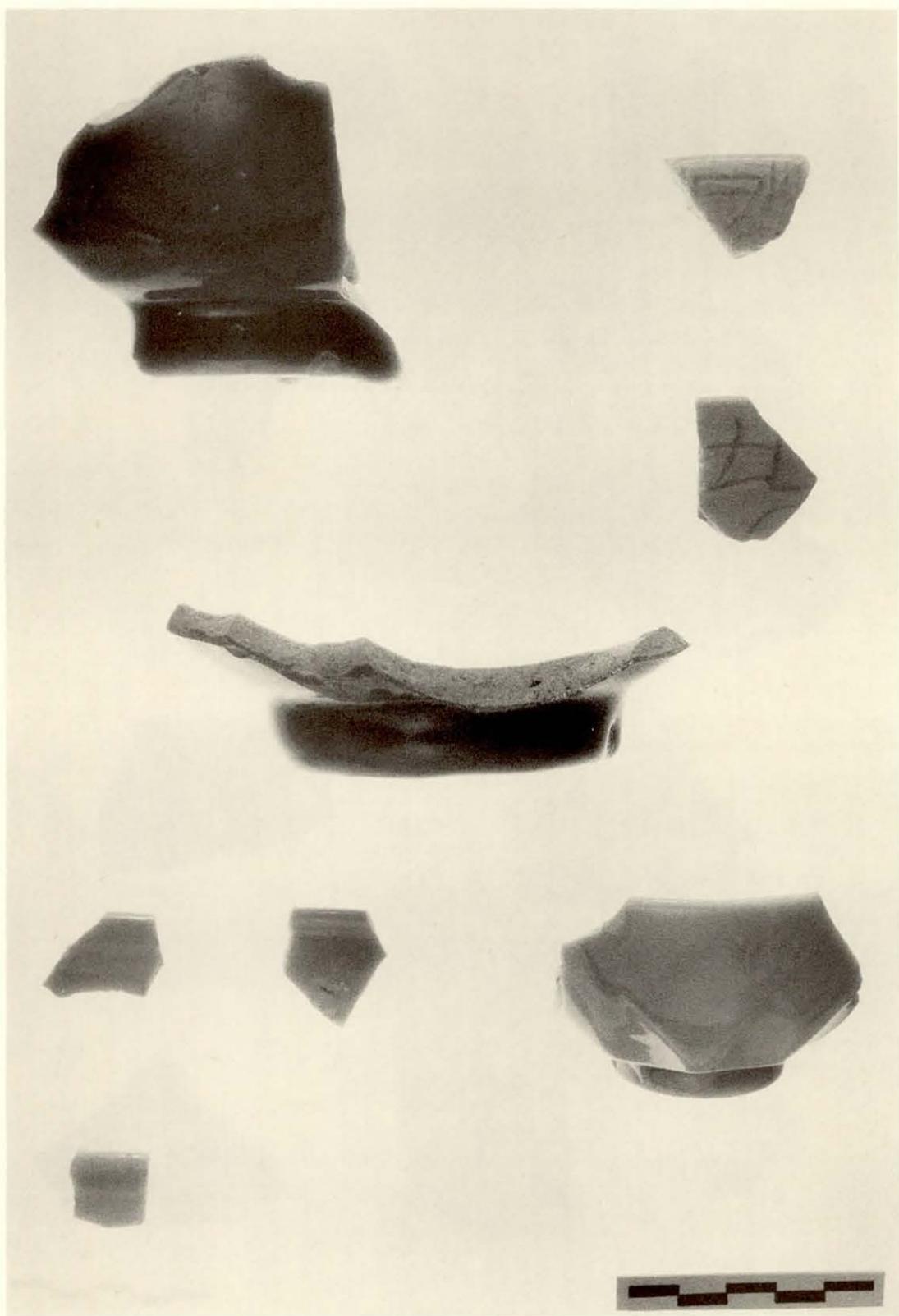
PL-7 土 器 (底部)



PL-8 土 器 (底部)



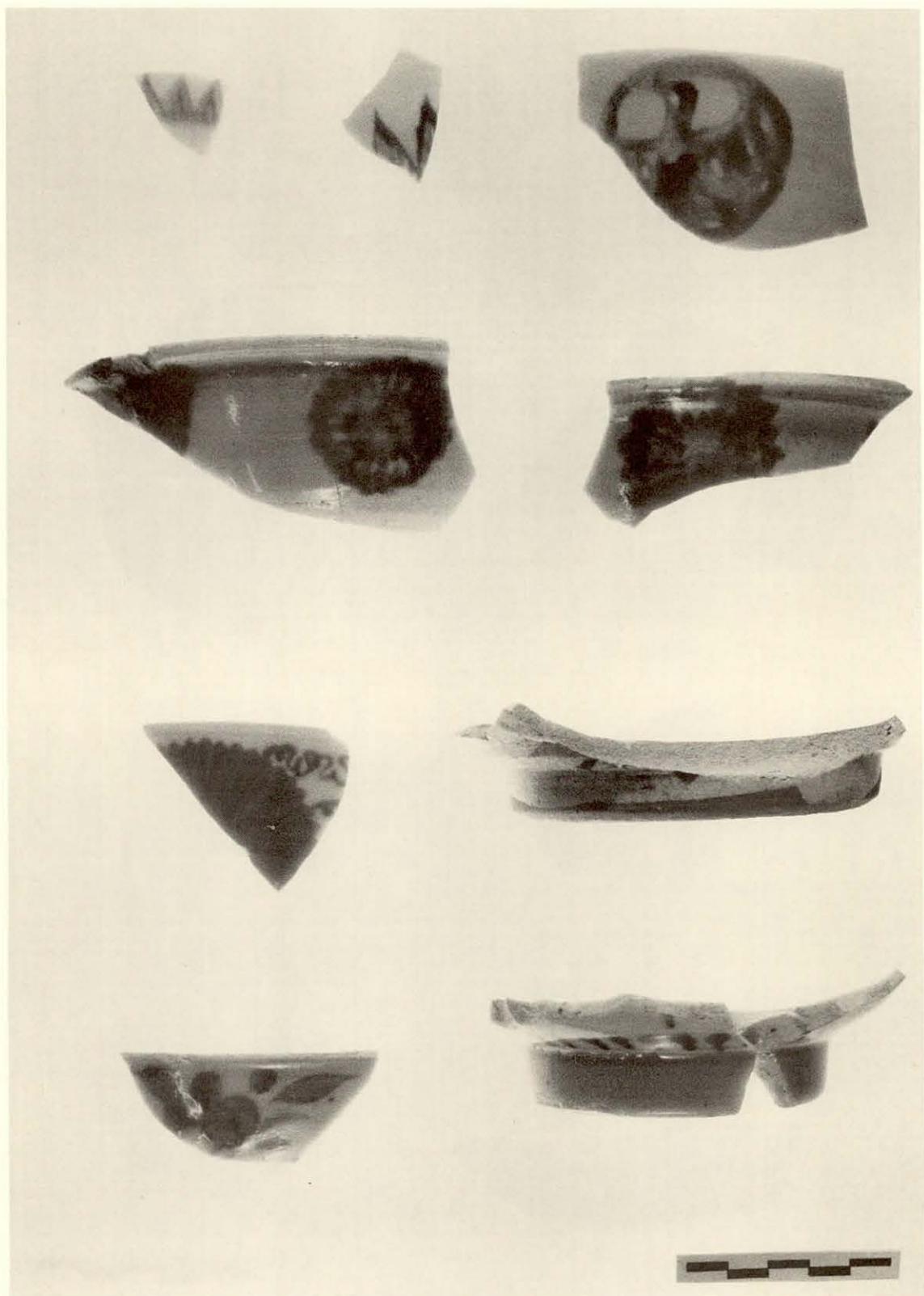
PL-9 青 磁



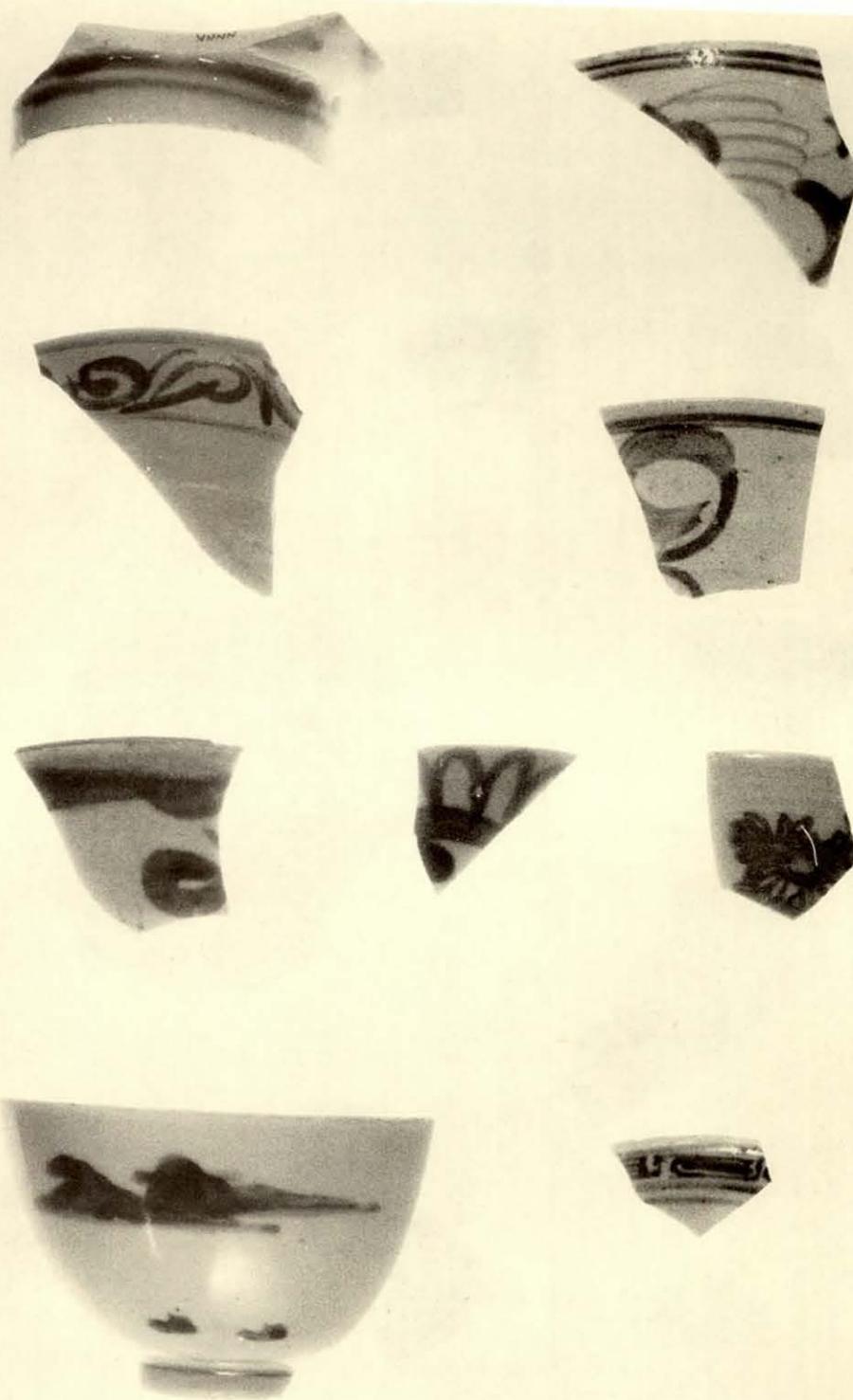
PL-10 青 磁



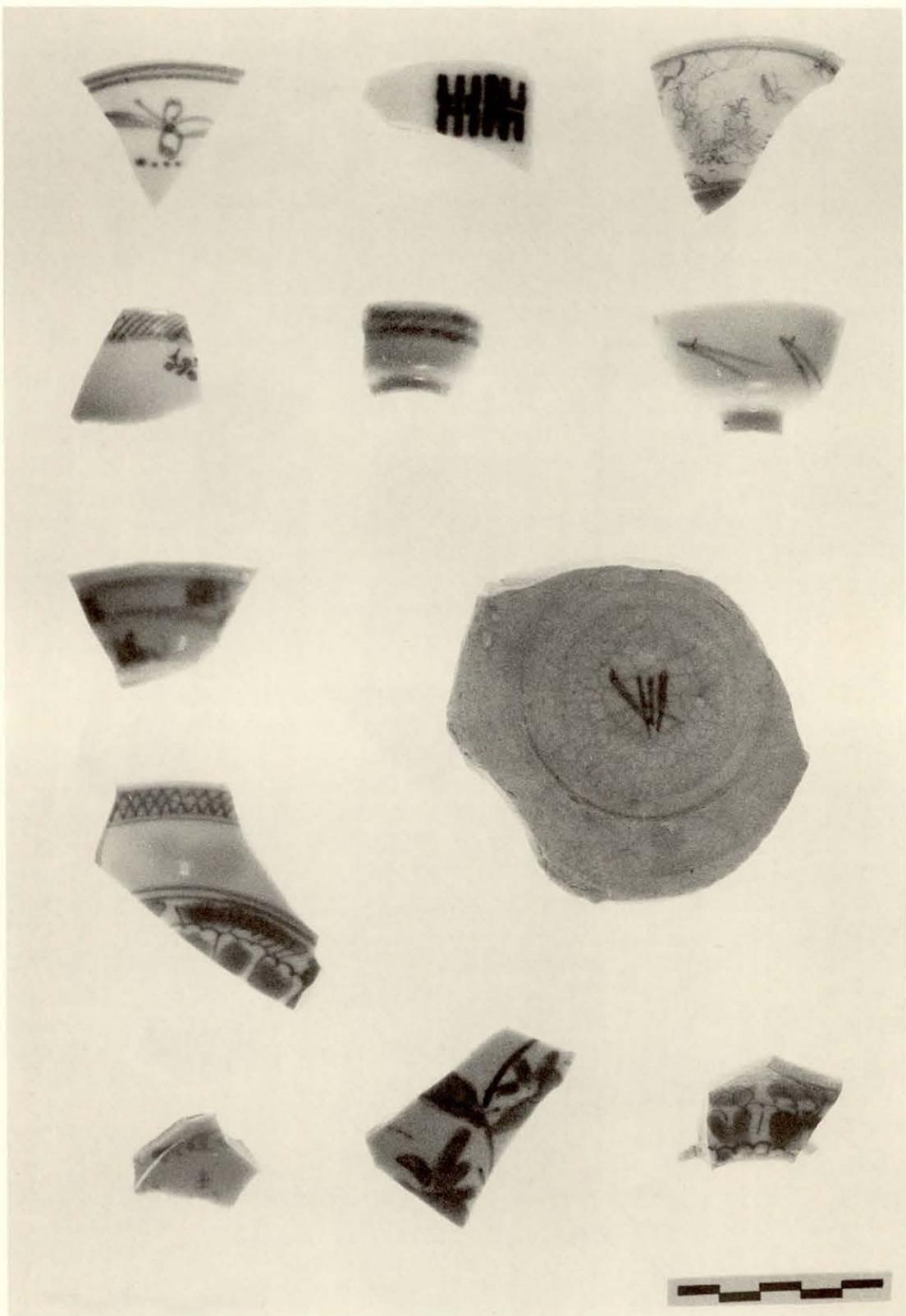
PL-11 青磁·白磁



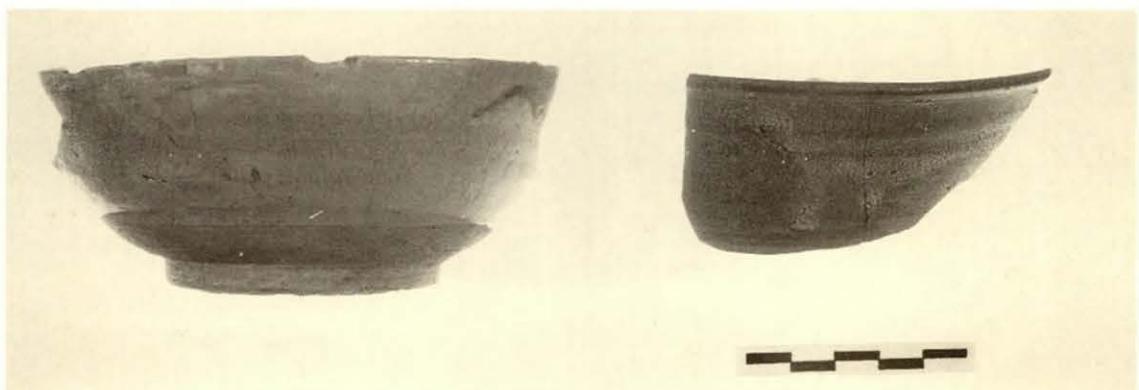
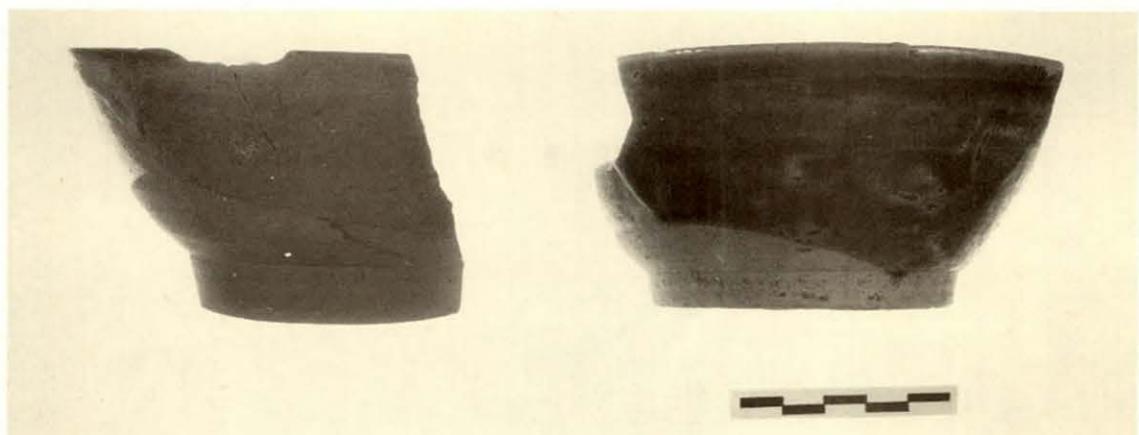
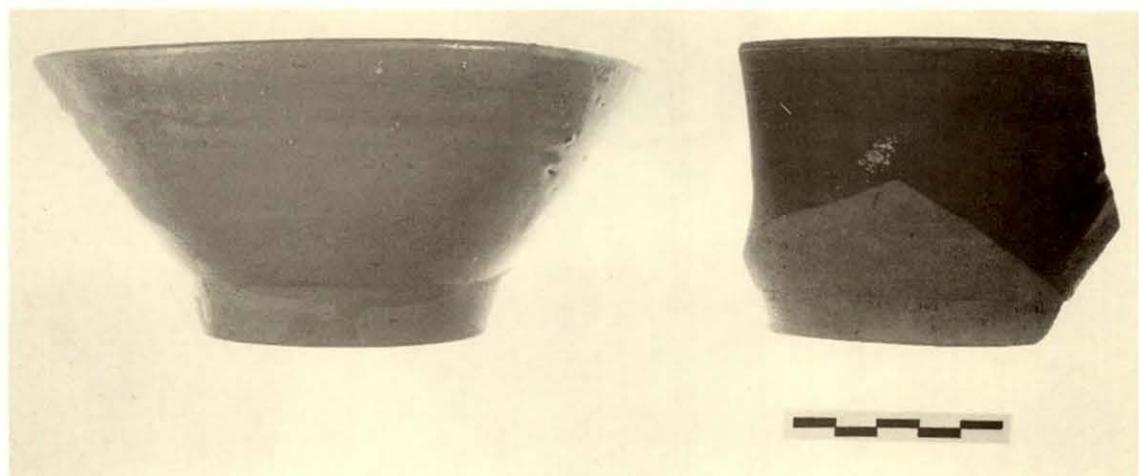
PL-12 染付



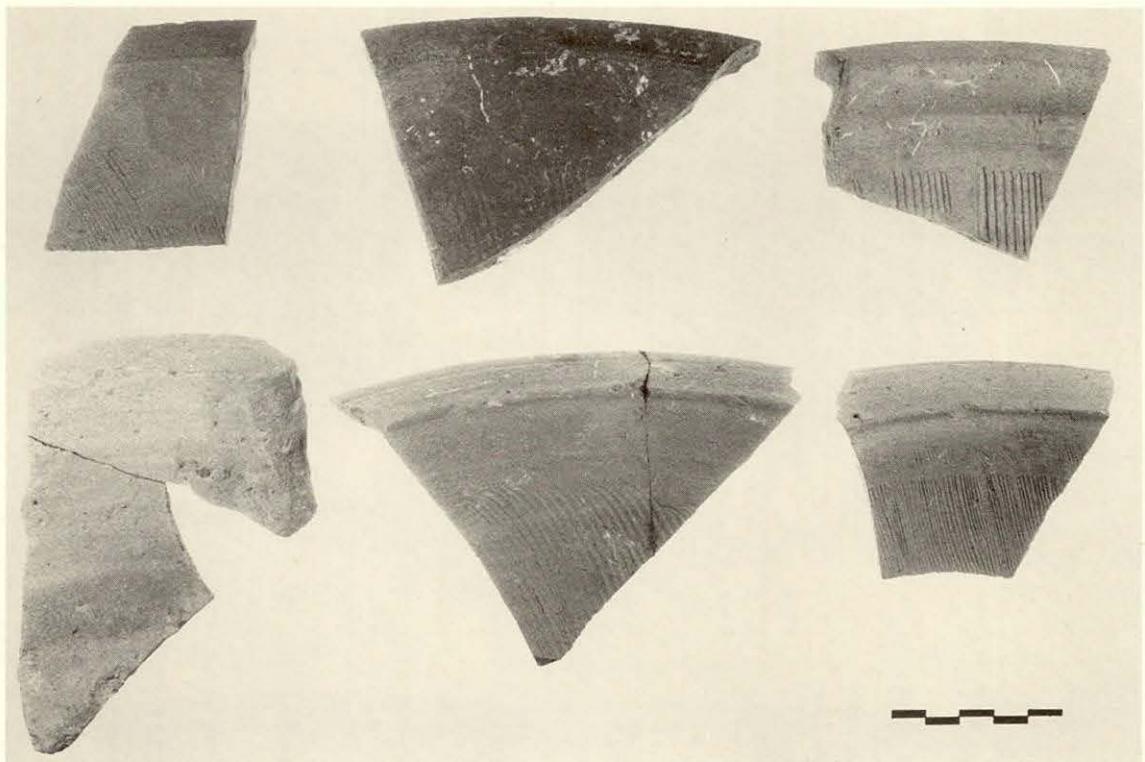
PL-13 染付



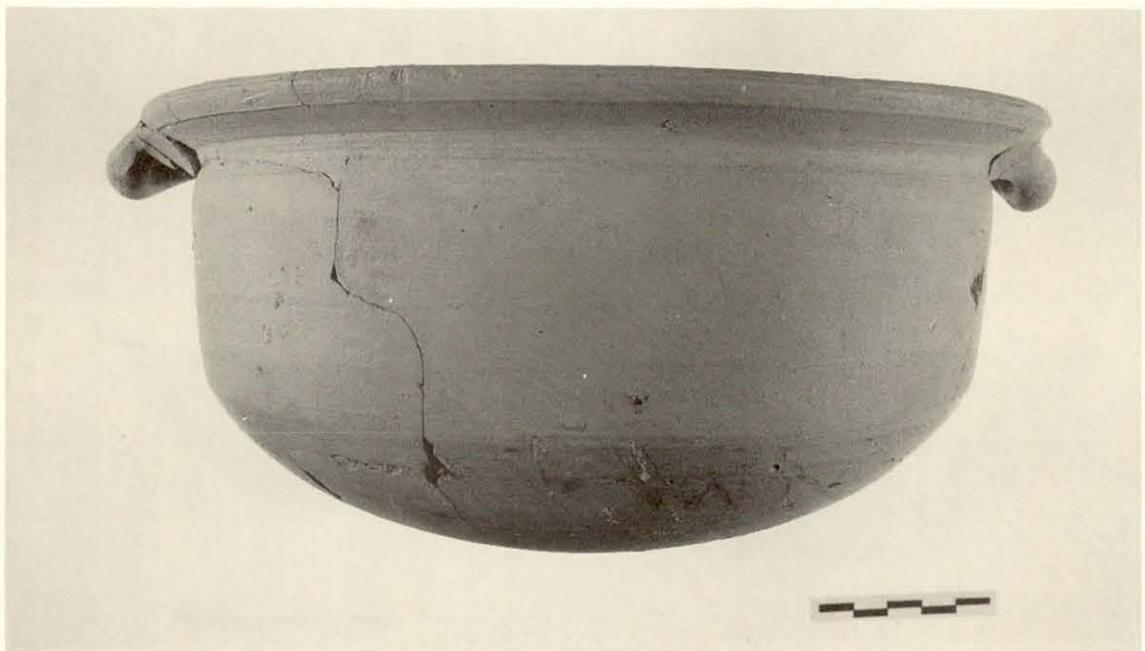
PL-14 染付



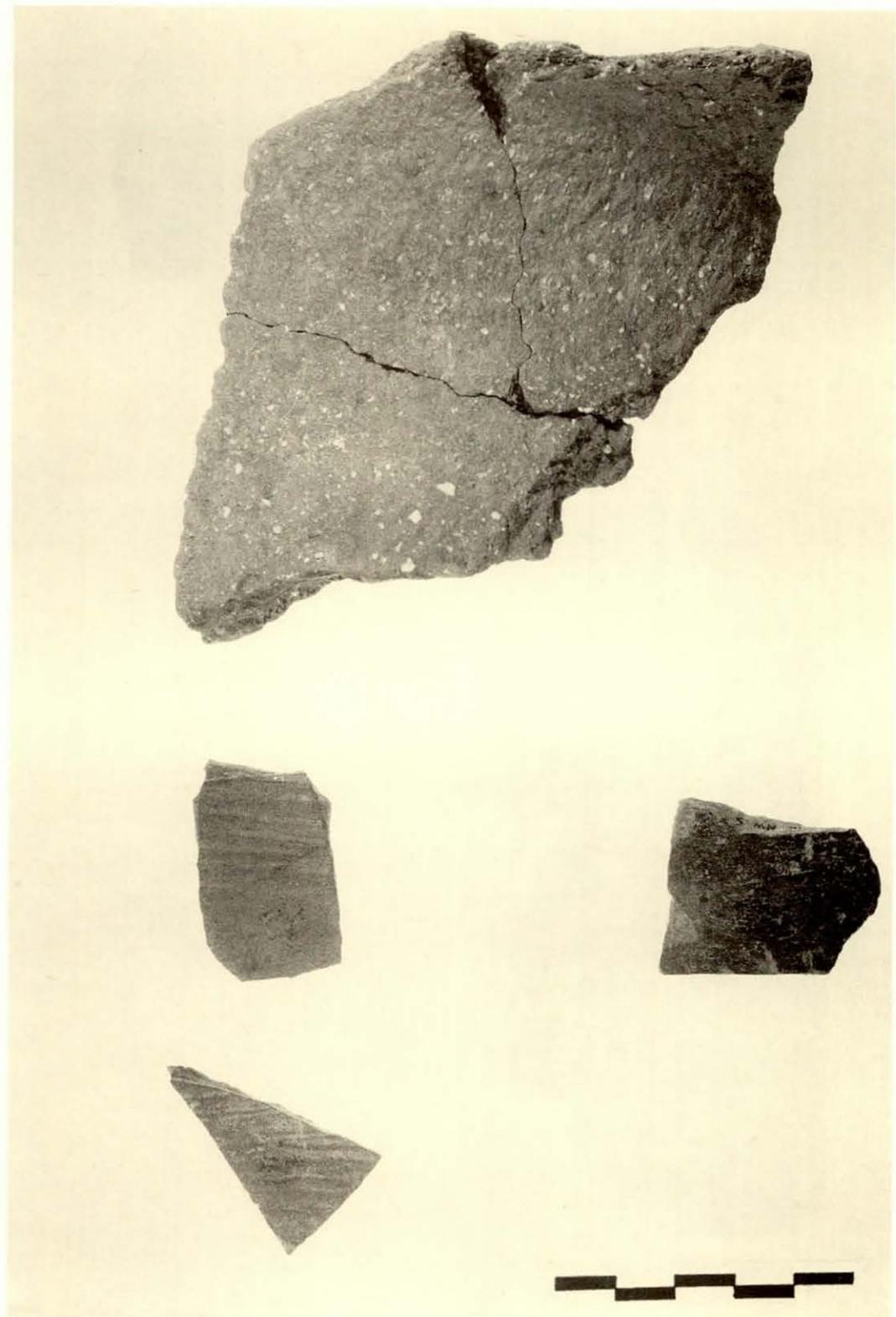
PL-15 沖縄産陶器



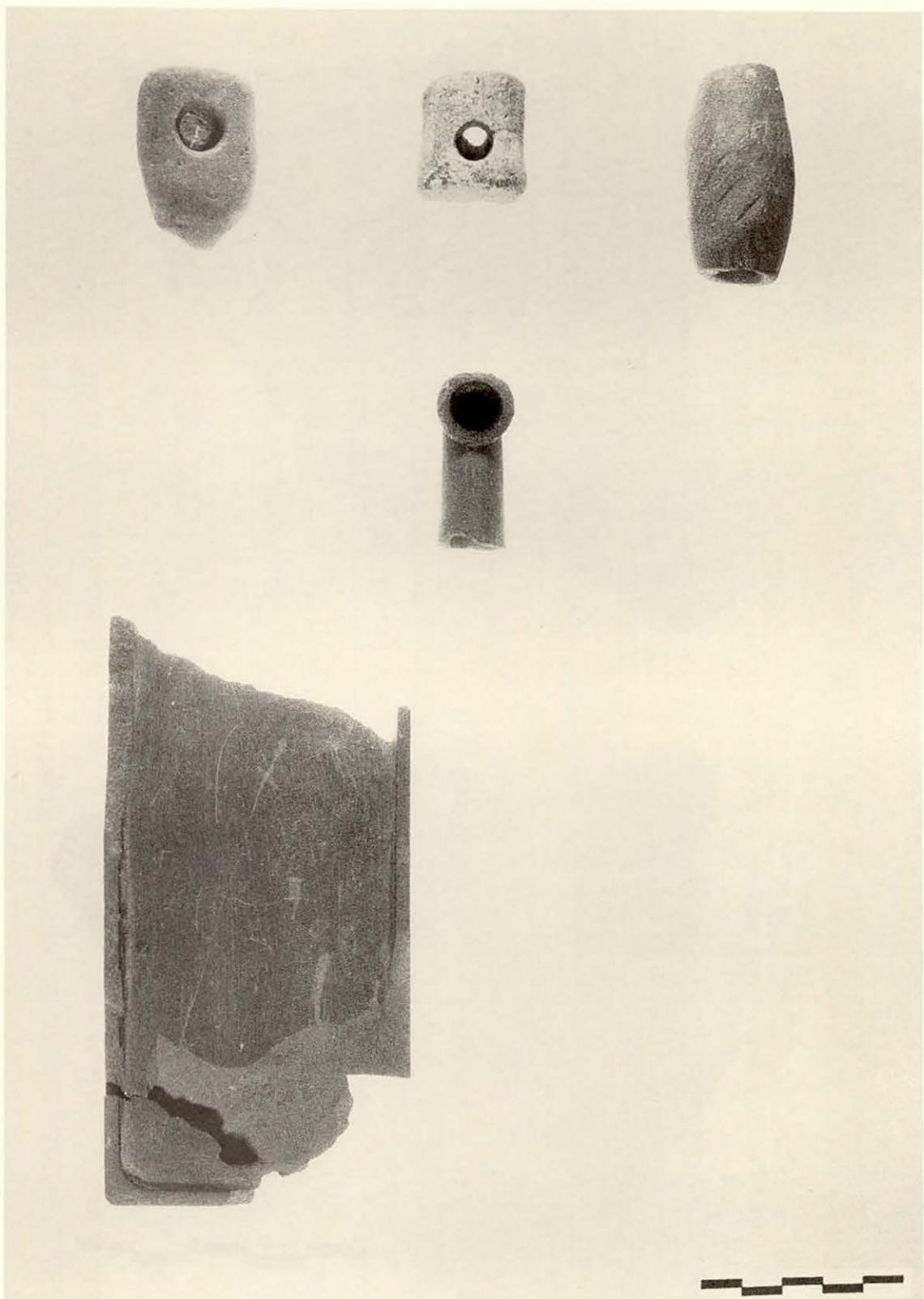
PL-16 捣 鉢



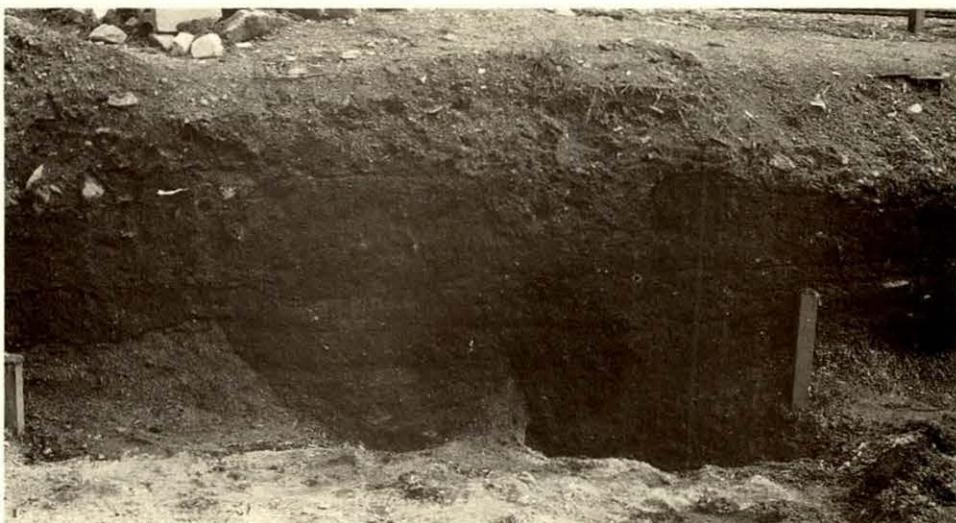
PL-17 サーク



PL-18 近世土器・類須恵器



PL-19 キセル・錘・硯



PL-20 層序断面

V. 調査の成果と課題

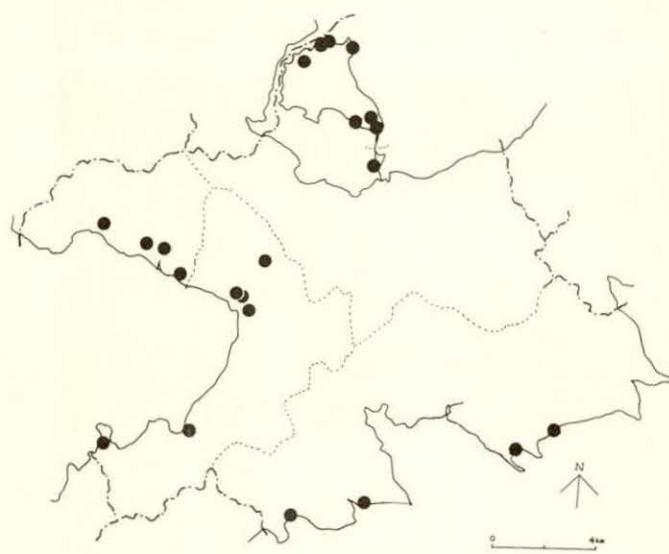
溝原貝塚の発掘調査は、1984年、1985年の2次にわたって行なわれた。名護博物館収蔵庫建設の変更によるものである。本文でも述べてきたように、この土地は、名護間切番所、名護町役場、名護市役所と利用されてきたところである。1次調査においても、攪乱の状況が報告されたが、すでに貝塚時代の遺構や層序は破壊され、現代遺物が下層の白砂層直上まで入りこんでいた。2次調査においては、役所の遺構や塩化ビニールの配管が出て、攪乱がかなり進行し遺構の検出等は希望が持てなかった。

数多くのピット群については、番号を付し遺物を検討した。土器のみを含むピットも何点か認められたが、ほとんど攪乱されたものであり貝塚時代の遺構は残存しないと判断された。

出土遺物についてみると、乳房状尖底や、くびれ平底を底部にもつ土器群が主体で沖縄貝塚時代後期に属するものが中心である。陶磁器は、14C～16Cの青磁や17C後半～18Cにかけての印判手の青花が出た。

自然遺物についての検討は、当時の食生活、自然環境を復元する上において重要なが、貝類の分類集計にとどまった。

当市における後期遺跡の分布は図に示すとおりであるが、これらの編年作業はこれから重要な課題である。また、溝原貝塚の広がりと遺構の検出のため早めに未攪乱



個所をおさえ現状変更の際の調整資料を整えることは、文化財保護行政当局の緊急の課題である。

本報告は、小規模の調査のものであり、溝原貝塚の攪乱部の一部が明らかになった程度である。今後、開発行為によって貴重な遺跡群が破壊されることのないよう配慮が必要である。

第48図 名護市における沖縄貝塚時代後期遺跡の分布図

第4表 名護市の遺跡編年 — 時代区分表

The timeline diagram illustrates the distribution of archaeological sites in Nago City across different periods and regions. The horizontal axis represents time from approximately 30,000 years ago to 1982 AD. The vertical axis on the left lists the main regions and their specific sites.

西暦 何年前	紀元前 0										1982									
	8000	4000	3000	2000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000			
中 国	旧石器時代	(仰韶・竜山)	殷 周	春秋戦国	前漢 後漢	北魏	唐	北宋	南宋	元	明	清	中華民国	人民中国						
日 本	旧石器時代	(繩 文)			(弥生)	(古墳)	大和奈良	平 安	鎌倉	南北朝	室 町	(戦 国) 安土桃	江 戸	明治 大正	昭 和					
沖繩本島の主要な遺跡	生産経済	漁撈・狩猟・植物採集										農業					工業			
	時代	原 始										古 代					近 世	近 代	現 代	
	考古学 の編年 時代	先土器	早 期	沖 繩 貝 塚 時 代			グシク時代			古 琉 球										
				前 期	中 期	後 期	前 期	中 期	後 期											
	屋我地羽地屋部名護久志	天堂原貝塚	運天原サバヤ貝塚			シマスバー御嶽遺跡群														
		豊原遺跡	墨屋原浜崎遺跡			屋我グシク遺跡群														
			奥武原遺跡			フガヤ遺跡					親川グシク遺跡	瀬洲村跡遺跡	古我知燒窯跡							
				安和貝塚			宇茂佐古島遺跡													
				東兼久原貝塚			ナシグシク遺跡群					宮里古島遺跡								
				名護貝塚			上里グシク遺跡													
			久志貝塚			嘉手苅村遺跡														
			有井遺跡																	
			大川田原遺跡																	
其他な遺域	通路	室川貝塚下層 (沖穂)	大山貝塚(宜野湾)			西長浜原遺跡(今帰仁)					福富遺跡(大里)									
	山下町第一洞穴	對馬貝塚(嘉手納)	萩堂貝塚(北中城)			宇佐浜遺跡(國頭)					熱田貝塚	熱田貝塚(恩納)	今帰仁グシク(今帰仁)							
	通路	西長浜原遺跡(読谷)	伊波貝塚(右川)	カヤウチバンダ遺跡(國頭)			貝志原貝塚(伊江)					根謝跡グシク(大宜味)								
	通路	西長浜原遺跡(読谷)	伊波貝塚(右川)	カヤウチバンダ遺跡(國頭)			貝志原貝塚(伊江)					根謝跡グシク(大宜味)								
	通路	西長浜原遺跡(読谷)	伊波貝塚(右川)	カヤウチバンダ遺跡(國頭)			貝志原貝塚(伊江)					根謝跡グシク(大宜味)								

※名護市の遺跡(2)より



名護市文化財調査報告一9
—名護博物館収蔵庫建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報—

溝原貝塚

1989年 3月30日

編・発行 名護市教育委員会社会教育課

名護市字名護6492番地

☎ (0980) 53-5429

印 刷 サキハマ印刷

☎ (0980) 52-2740



K-202

講原貝塚
名護市教育委員会社会教育課

1989年

3574

-1.7.31

76P 25.6 cm
* 文化財大観覧報告書.9

寄贈

名護市史編さん室

* 表紙は名護市において後期の塚時代
後期の遺跡分布図